（表紙）

久經公
忠宗公
貞久公

自弘安元年
至同十一年

前編 舊記雜錄 卷八

自弘安元年至十一年

三代久經公 弘安七年逝去

四代忠宗公

789

「島津國史」

弘安元年戊寅、是年二月改元弘安、正月猶是建治四年、春二月二十九日改元、大拠日本史、

二年己卯、三年庚辰、凡二年、事缺不書、

四年辛巳夏四月十六日、公與次子藥壽丸讓狀、使領信濃國神代郷、薩摩國伊作莊・日置莊、藥壽丸者、大隅守久長小字也、拠伊作家譜、五月二十一日、蒙古兵寇壹岐・對馬、關東及九州二島兵禦之、不勝、自六月六日至十三日、與蒙古兵日夜會戰、殺千餘人、賊兵少却、拠大日本史後宇多天皇紀、二十九日、大炊助長久・五郎忠經・比志島五郎二郎時範・河田右衞門尉盛佐・邊牟木又五郎義隆等、擊蒙古軍於壹岐島、拠伊集院十右衞門・比志島隼人系図文書、島津系図、道忍公旧譜、道仏公次子曰大炊助高久、比志島隼人文書、越前島津系図、並作長久、蓋一人前後異名耳、河田盛佐・辺牟木義隆、二人皆比志島祐範弟、各以其邑為氏、比志島隼人文書、辺牟木属満家院西俣、郡山郷西俣村、今有辺牟木門、時範、祐範之子也、拠比志島隼人系図、入來院平四郎有重及弟平五郎致重・四郎太郎重尚、與蒙古戰於筑前海上而死、拠入来院主馬系図、入来院主馬東郷総左衞門系図、渋谷太郎光重生六男、重直・実重・重保・重諸・定心・重貞、重直為父後、居東国、実重・重保・重諸・定心・重貞、皆居薩摩、実重領東郷、重保領祁答院、重諸領鶴田、定心領入来院、重貞領高城、各以其邑為氏、実重居車内、又以車内為氏、有重、定心子明重之第四子也、按東郷氏・入来院氏・高城氏、皆有子孫、祁答院氏、伝数世至良重而嫡流絶、鶴田氏子孫無聞、郡村高辻帳、東郷即薩摩郡南瀬村・泊野村・島丸村・完野村・二渡村・藤川村・白男川村・白浜村・田海村・山田村・中郷村凡十二村地、而泊野村・二渡村・白男川村三村、今隷伊佐郡山崎郷、祁答院即伊佐郡時吉村・虎居村・湯田村・宮之城村・平川村・船木村・求名村・平木場村・久木野村・鶴田村・紫尾村・柏原村・神子村・久富木村・山崎村・大村・中津川村・黒木村・佐志村・闍牟田村・長野村凡二十一村地、而時吉村至久木野村九村、今為宮之城郷、鶴田村至神子村四村、久富木村・山崎村二村、今為山崎郷、大村・中津川村二村、今為大村郷、黒木村・佐志村・闍牟田村、今各建為郷、長野村、今隷隅州曽木郷、入来院、即薩摩郡裏之名村・添田村・市比野村・中村・楠元村・久住村・倉野村・塔之原村凡八村地、而裏之名村・添田村二村、今為入来郷、市比野村至塔之原村六村、今為樋脇郷、高城即今高城郡高城郷、東郷有地名車内、秋七月晦夜大風雨、海水簸蕩、蒙古船破壞、人物漂溺、敗卒數千人、尚在鷹島、繕修壞船、大拠

日本史蒙古傳、閏月七日、五郎忠經・比志島時範、自壹岐島還、拠伊集院十右衛門・比志島集人系図文書、少貳景資及鎮西兵、撃蒙古軍於鷹島、殺溺無算、請降者千餘人、皆斬之、蓋蒙古十萬兵、得生還者三人、拠大日本史蒙古傳、蒙古傳、七月晦夜大風雨、海水鼓蕩舟舩破壊、人物漂溺、海上可歩、敗卒数千人、尚在鷹島繕修舟舩、少弐景資及鎮西兵乗勢掩撃、殺溺又無算、請降者千余人、皆斬之、積屍為丘、蓋蒙古十万兵、得生還者三人、按蒙古伝、七月晦夜大風雨、蒙古舩破壊、而比志島集人系図、閏月七日、時範・忠経撃蒙古軍於鷹島、則晦日以後蒙古尚在鷹島明矣、蓋蒙古伝云、敗卒数千人尚在鷹島以下、因七月晦日事而終言之、則蒙古十万兵得生還者三人、応是閏月七日以後事、故分蒙古伝文為両段、而挿叙時範忠経事於中間云、

五年壬午、六年癸未、凡二年、事缺不書、

七年甲申、夏閏四月、公修浄光明寺、施新鐘一枚、以資道佛公冥福、拠道忍公旧譜、廟堂要覧、道仏公薨於文永壬申四月十三日、至於今茲四月十三日実十三年、故公修寺、施鐘、所謂十三年忌法事者也、鐘銘刻曰、弘安七年歳甲申閏四月己巳三日、大願主前下野守藤原朝臣□経法名道忍、鋳師太宰府住人丹治恒頼、銘辭甚拙不足録、浄光明寺創立見第一巻建久七年、和事始云、十三年忌出於国俗、蓋十二支終而復始、追慕殊切、故作法事、其説見元亨釈書、然不言其始於何代、桜町中納言欲為少納言信西作十三年忌法事、高野明遍不肯、按仏法追薦、毎七日則備一祭、謂之過七、至四十九日而止、至於年忌本非仏説所有、乃倣儒家祭法為之、故明遍不肯云、先是、一遍上人抵鹿兒島、浄光明寺住持覺阿了性和尚欽其道徳、請爲一遍宗、蓋浄光明寺六時行法自此始、覺阿了性和尚者、宣阿上人二代法嗣也、拠浄光明寺文書、宣阿上人見第一巻建久七年、二十一日、公薨於筑前筥崎、年六十、拠道忍公旧譜、歸葬鹿兒島五道院、拠廟堂要覧、公生二男、長道義公、少久長、道義公生於建長三年辛亥、母相馬氏、小次郎左衛門尉胤綱之第三女、是歳年三十四襲封、拠島津系図、久長稱大隅守、食邑於薩摩伊作荘、因以爲氏、同上、久長代道忍公領筥崎戍兵、蓋二十餘年焉、拠伊作家譜、

790

「西藩野史　忠宗公」

久經公の長子、母ハ相馬小次郎左衛門尉胤綱女、享保中追諡して浄温院殿妙智神一房とす、神主を浄光明寺に立つ、建長三年辛亥生る、弘安元年戊寅久經公に従て筥崎津を鎮す、久經公薨して猶爰に有る事數年也、伝云、此時国中に事有り、其事を詳かにせず、鎌倉執権令して曰、文書を才智の人に齎して京師文注所に出して決を取るへし、忠宗公其人を撰て国に帰らし、書を齎して京に到り、事を決して帰る、京師四条神を懐山田孫五郎(山田氏三世孫)撰に当る、孫五郎誓て曰、事決せすんハ生を保て帰り、薩州伊作の惣社八幡神の社傍に小社を建て祭る、あかし王神是なり、弘安十一年四月廿八日改て正応元年とす、六年四月廿日改て永仁元年とす、七年四月十六日改て乾元元年とす、二年八月五日改て嘉元元年とす、　後宇多上皇、大納言藤原爲世に勅し、時の倭歌を撰せしむ、先是大同中、橘諸兄　平城帝五十一世の勅を奉し、倭歌四千三百十五首を撰し、万葉和歌集と号し、延喜中五年紀友則・紀貫之・壬生忠峯・大内河内躬恒(凡)　醍醐帝五十六世の詔を奉し、千五百首を撰して古今集と号し、一代の盛時とす、是より世々時の歌士に詔して、和歌を撰する事大凡恒例たり、天暦五年能宣・順・時文・望城、村上帝の勅を奉して千二百廿首を撰す、後撰集と号す、永観中花山帝親千三百五十一首を撰す、拾遺集と号す、応徳中白河帝の命を奉し、千二百十八首を撰す、後拾遺集と号す、天治中後頼崇徳帝の命を奉し、六百四十九首を集む、

金葉集と号す、天養中顕相四百九十首を集、詞花集と号し、近衛帝に献す、保元中後成後白河帝命を奉し、千二百八十四首を集め、千載集と号す、元久中通具・定家・家隆・有家・雅経、後鳥羽上皇の命を奉し、千百七十八首を集め、新古今集と号す、貞応中定家後堀河帝の命を奉し、三百七十一首を撰し、新勅宣集と号す、建長中為家後嵯峨上皇の命を奉し、千三百六十八首を撰し、続後撰集と号す、文永中後嵯峨上皇又基家・為家・行家・光俊に命し、千九百七首を集しむ、続古今集と号す、建治年中為氏亀山上皇の命を奉し、千六百首を撰し、続拾遺集と号す、嘉元中為世後宇多上皇の命を奉し、千九百七十首を纂して、新後撰集と号す、正和中為兼伏見上皇の命を奉し、二千八百三首を纂して、玉葉集と号す、元応中後宇多上皇命して、二千百二十首を纂して、続千載集と号す、正中為定後醍醐帝の命を奉し、千三百四十三首を集め、続後拾遺集と号す、貞和中花園上皇自二千二百十首を撰して、風雅集と号す、延文中為定後光厳帝の命を奉して、新千載集と号す、貞治中為明亦後光厳帝の命を奉し、撰して新後拾遺集と号す、至徳中為重後小松帝の命を奉し、撰して新続古今集と号す、是を号して二十一代集と云ふ、於是爲世千九百余首を撰し、新後撰集と号して献す、忠宗公倭歌を詠して聲譽あり、爲世、忠宗公の歌二首を撰て集に載す、

波こゆる袖の湊の浮枕浮てそひとりねをなかれける

按に新後撰集恋部第四に載す惟宗忠宗とあり、

中〳〵にうきもつらきも知れすは心の儘に世をは過さん

按に同集雑歌中にあり、

文保元年丁巳、嘉元四年十二月十四日改て徳治元年とす、三年十月十八日改て延慶元年とす、三年　月　日改て応長元年とす、二年　月　日改て正和元年とす、六年二月三日改て文保元年とす、將軍守邦親王日州高知尾庄・肥前國福万名松浦庄の内早湊村の内也、を忠宗公に加へ封す、按に日州の一庄を賜ふと云ときは、此時既に日州ハ封内にあらさる欤、詳かならす、

元應元年己未、文保三年四月二十八日改て元応元年とす、　上皇復ひ勅して續千載集を撰せしむ、又　忠宗公の歌一首を撰て載す、按に集中雑歌上にあり、

風渡る夏見の川の夕くれに山かけすゝし日くらしの聲

正中二年乙丑十一月十二日薨す、享年七拾五、道義仲阿弥陀佛と謚す、墓廟神主を建ること前に同し、

791

『正本在權執印』

權執印妙慶申、五大院上家分事、訴狀如此候、無子細候者、可令計下知給候、若又異儀候者、可令注申先例給之由候也、仍執達如件、

弘安元年三月十一日　　道胤（花押）

（二階堂泰行）

隠岐右衛門尉殿

792

「權執印文書」

（本文書ハ七九一号文書ト同文ニッキ省略ス）

793

『入來院氏文書』

可早以平氏字竹鶴領知相模國澁谷上庄寺尾村内田在家四至堺名

字員数載讃状、美作國河會郷内十町村河北事

右、任祖父澁谷五郎四郎重經法師法名定佛建治三年九月十三

日讓狀、可令領掌之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

弘安元年六月三日　　相模守平朝臣(時宗)御判

794

『仝』

將軍家政所下

可令早平重通領知相模國澁谷上庄寺尾村(除孫子竹鶴分)、同國大上郷内田在家(名字員數載讓狀)、同國四宮郷内屋敷、伊勢國箕田大功田(加高柳餘分定)、薩摩國入來院内塔原郷等地頭職事、

右、任亡父澁谷五郎四郎重經法師(法名定佛)建治三年九月十三日讓狀、爲彼職、守先例、可致沙汰之狀、所仰如件、以下、

弘安元年六月三日　　案主菅野

知家事

令左衞門少尉藤原

別當相模守平朝臣(時宗)御判

795

『載于山田譜二代忠貞傳』

走湯山造營事對捍之間、雖被成御教書、不叙用云云、甚自由也、不日隨惣領支配、可致沙汰、若猶及難澁者、可有其咎之狀、依仰執達如件、

弘安元年七月卅日　　相模守(時宗)御判

大隅入道孫子等中

796

『入來院氏文書』

澁谷五郎四郎入道定佛(重經)後家尼妙蓮・同子息重道(通)等申餘一重員狼籍(藉)事、重訴狀如此、爲有其沙汰、於重員者、可被召進之由被仰下了、而彼妻女并代官、於美作國河會郷内、致悪行云々、甚不穩便、云重員、云同妻女等、早速可被召進之狀、依仰執達如件、

弘安元年八月十四日　　相模守(時宗)在判

陸奥守(時村)殿

越後(時國)左近太夫將監殿

797

「帖佐士安楽五郎左衞門(藏)」

座衞(庄衞)御願大曼荼羅院一宇三間四面

弘安元年(歳次戊寅)八月日修造之、

右當寺者、其仁安二年(歳次丁亥)尋譽聖人造立之、大願主當檀那伴朝臣兼高也、而其彼(後)從百十餘廻之間、於相代(マヽ)、於安(弘)元年八月廿九日時正初日、尋譽聖人殊孫弟法橋上人位舜

應、爲大勸進造立之、于時施主兼高五代孫子右衞門尉伴朝臣助兼・六代孫子方(マヽ)郷弁濟使伴朝臣兼郷、但前者雖爲一間四面、法會時堂内狹少之間、座席依有其煩、人改(今カ)前造、所造於三間四面、仍銘如件、

造營奉行僧舜應

798

「管窺愚考中」

右の字、すへて古躰らしく、其後欵を其彼とかき、百十餘かへりの回を廻とかき、弘安元を於安元とかき、如件を如件とかくの類、ミな文字に曚き人、傳写を誤りしと見ゆ、是に據れは、座衞御願も、また庄衙御願の誤なるには疑なし、然あれは、庄衙とハ島津御庄の府本役所にて、安元二年七月日島津御庄よりの下文に、庄衙宜承知云云の庄衙に當るもまた疑なし、府本とハ近衞殿下御領の三ヶ國諸方に散在せし寄郡の、政令を出されし官廨の在る所を云ふなるへし、さあれは、此大曼荼羅院西生寺といへる寺は、近衞領庄園長久の御祈禱、またハ御元祖冥福の爲に建られ、御願の文字あるは明らけし、其かうかへは、つはらに本篇に述おきたれは、併せ證すへし、

799

『正文在水引權執印』

薩摩國新田宮所司神官等申當宮造營事、院宣并春宮大夫家・新大納言(藤原実兼)家御文(注カ)副領家注文、訴状具書、如此、早相尋子細於彼郡司名主等、可被注申也、仍執達如件、

弘安元年後十月十七日　　左近將監(時国)在御判
陸奥守(時村)在御判

大隅修理亮(久経)殿

800

『權執印文書』

(花押)

新田宮五大院政所職事、在國司道氏与權執印妙慶、雖有相論、政所職以下妙慶領知之、割分名田道氏可知行之由、去九月廿日出和与狀畢、然者早止向後牢籠、妙慶可爲彼職之狀如件、

弘安元年潤十月廿二日

801

「越前島津氏二世忠行譜中」

弘安二年、補播磨國下揖保地頭職、自是世世住播州、下揖保外祖父高鼻和左衞門尉有景所領、而所授与越後局也、忠行受局之讓領之、

802

『岸良氏文書』

（花押）

下　嶋津御庄大隅方肝付郡

可早以兼基嫡子得房丸、岸良村田畠山野狩倉等令相傳知行事、

右、件村者、兼基親父阿佛之所帯也、而兼基依爲子息、讓得之了、爰兼基死去之上者、于得房丸彼所帯所宛給也、但得房丸成仁之程、爲母堂之沙汰、任阿佛讓狀之旨、不一事残、令知行領掌、有限所當以下色色御公事等、守阿佛支配、無懈怠可令勤仕之狀、爲向後所仰如件、以下、

弘安二年四月　日

803

『臺明寺文書』

去年三月之比、所被流遣硫黄嶋之殺害人松夜叉丸（南都児童）有可被尋子細、就雑色友貞、早速以守護次可被進也、仍執達如件、

弘安二年四月十一日　　左近（時国）將監在御判

陸奥（時村）守在御判

千竈六郎入道殿

「在口裏」千竈六郎入道殿　　陸奥守時村

804

『戴于山田譜土用熊丸傳』

修理亮（三代久経公也）久時重言上

爲式部太郎忠眞跡輩等、不遣新造御所用途遁（脱カ）間、令言上事由處、不日可致其弁由、雖申付四箇度御教書、一向不叙用上者、任故大隅前司入道〻佛誡置狀文、欲宛給忠眞跡谷山郡子細事、

副進

四通　御教書案

二通　道佛誡置狀案

件御所用途者、去建治三年五六兩月仁、可令運上早久時代官之處、到于當年三月廿日、既三ヶ年之間不致其弁之間、任傍例、相副利分、可致急速弁之由、度〻雖觸申之、背御教書之旨、于今無沙汰上者、早任道佛之誡狀之旨、於忠眞所領谷山郡者、久時爲令拜領、重言上如件、

805

『仝』

走湯山造營用途事、大隅土用熊丸訴狀遣之、對捍云〻、甚無謂、不日可致沙汰之狀、依仰執達如件、

弘安二年五月九日　　前武藏守（義政）御判

相模（時宗）守御判

谷山五郎(資忠)殿

806

『正文權執印蔵』

當國鹿兒嶋・莫禰・薩摩郡等、被(宛脱カ)新田宮造營畢、於検注者、可爲國衙沙汰候、彼検注用途可被宛造營候也、鹿兒嶋郡永吉名事、先例各別知行之上、可爲國衙沙汰之由、院宣如此、仍執達如件、

「弘安二」五月十日　　参議在御判

薩摩守殿

807

「写在御文庫二番箱他家文書中」

(端書)「□んこせんにあてゝのゆつりしやう」

たからのすへなかぜんそさうてんのしよしう(所從)、まこくわんのう(注文)にゆつりわたすちうもんの事、

合

せいたゆ入道かいちるい六人　にしの御ちか二人
たゆふとの　いわゝとの
ひめ　まつわか
きわう　ちよまてか四人
せすか二人　みつへのこもろか二人
はころも　ねやのか二人
をにけさ　こまつ
とら　くろたらう
し三らう　わかは
やくしか二人　い上三十二人

弘安貳年六月廿七日　　院司沙弥迎慶(花押)

808

『比志島氏家蔵文書』

京都大番事、催具□御家人□七月□同十二月晦日、可令勤仕之狀、依仰執達如件、

弘安二年(長)七月□　　武蔵(長時)守在御判
相模(政村)守在御判

嶋津大隅(忠時)前司入道殿

(本文書弘長二年ノモノナルベシ、六三九号文書ト同文ナリ)

809

『比志島氏文書』

京都大番勤仕事、御教書案文遣之、早任被仰下之旨、可被参勤候、但寄事於老耄、於□(差カ)立代官事、御誡候、可被存其旨之狀如件、

弘安二年八月十一日　　沙弥(忠時)(花押)

滿家比志嶋太郎殿

(本文書弘長二年ノモノナルベシ、六四三号文書ト同文ナリ)

810

「写在御文庫二番箱他家文書中」

寺家政所符

補任　正八幡宮政所職事

藤原信祐

右以人、補任被職如件、符到奉行、故符、

弘安二年十一月　日

検校兼石清水權別當法印大和尚位(善法寺尚清)在判

法橋上人位

法眼和尚位

811

『仝』

在御判

寺家公文所下　　餅田村

補任　預所職事

藤原信祐

右以人、補任彼職、御年貢已下雑物等、任請文之旨、無懈怠、可致其沙汰之狀、依長吏仰、下知如件、

弘安二年十一月　日　　右衞門尉中原

812

「写在御文庫二番箱他家文書一巻中」

下　正宮公文所

可早任御下知旨、以藤原信祐爲政所職事、

右、信祐爲政所職、任先例、可致沙汰也、執印伊豫寺主院勝可成施行之處、参向于関東之間、依爲同事、令下知之狀如件、

弘安二年十二月七日

法眼和尚位在判

813

「仝」

下　正宮公文所

可早(任脱カ)御下文之旨、以藤原信祐爲餅田村預所職事、

右、信祐任御下文之旨、爲當村預所職、御年貢以下物等、任請文、無懈怠、可致沙汰之旨、所召仰也、執印可成施行之處、参向于関東之間、依爲同事、令下知之狀如件、

弘安二年十二月七日

法眼和尚位在判

814

『見于山田譜』

走湯山造營用途事、薩摩國谷山郡司資忠、背地頭催促、不致其沙汰云々、甚自由也、早可令催勤之状、依仰執達如件、

弘安二年十二月十九日　　相模守(時宗)在判

土用熊殿『山田氏二代忠真嫡子也』

「山田氏譜中写在山田七郎右衛門久通トアリ」

815

『比志島氏文書』

はこさきのさつまのくにのけちはん(結番)の事、十月より四月一日まて、つとめられ候了、

こうあん三年四月一日　　御代くわん信蓮(花押)

ひしゝま太郎(祐範)殿

816

『入來院氏文書』

譲与　所領等事

初童丸所『渋谷家四代重基幼名』

一所　相模國吉田上庄澁谷内清太入道西在家壹宇・同藤意内立野伍町　但四至堺者見本證文、

一所　美作國河會郷内下森自上山宮西　但四至堺者見本證文、

一所　薩摩國入來院内清色郷五分三北方

右、於所々者、正善重代相傳所領也、雖爲甥依有志、初童丸相副御下文并次第手継、所永代譲与也、於諸御公事者、守先例、可致其沙汰也、仍譲状如件、

弘安三年五月八日　　『重基叔父』沙弥正善(有重)(花押)

817

「越前島津氏六代忠藤譜中」

六代忠藤

又五郎

知行分所領事、於濫妨狼藉之仁者、爲處罪科、可被注申『交カ』吏名之状如件、

元弘三年五月廿八日　　源朝臣(足利尊氏)(花押)

嶋津周防又五郎入道殿

（本文書編年ノ場ヲ違エルカ）

818

「延時氏文書」

今年四月一日六波羅御教書今日六日到來、案文如此、如状者、薩摩國在廳種光子息種継申、御家人種忠押領名田屋敷由事、二位大納言家御消息副訴状具書、如此、且致沙汰、

且可注進之由、所被仰下候也、然者任被仰下之旨、爲致沙汰之、早速可被上府候、仍被副下候本解具書案、同然候、恐々謹言、

弘安三年七月六日　　少貳（経資）（花押）

延時三郎殿

819

『見于山田氏二代忠真譜』

御文委細承候了、

滿家沙汰事、具書共をゑり候へとも、あまりに忽々候て、悉も不撰出候、郡司職ハ、豊後前司入道給て候事、御下文顯然候、よて案文をかき候てまいらせ候、さいそか起請文等のほかの狀共の候しをハ、なにとして候やらん、引失て候、尼御前へ申て候へハ、滿家の證文共の候しハ、中務六郎に預候しかハ、定それ候覧と仰られて候也、猶々も文書中をゑり候て、さりぬへき狀なと候ハヽまいらせ候へく候、中務六郎かもとに預て候證文案文ハ、税所起請文案それならぬ具書共も、是ニて沙汰をせさて（せ脱カ）候ハんとて、預て候へハ、中務六郎に尋られ候へきよしを仰事候也、能々可有御尋候、證文案文已上五通候也、宮里の事もこの狀にみへて候、式部三郎にかきうつしてたひ候へく候、これらの五通狀ハ、正文ハ皆これに候也、恐々謹言、

「弘安三」七月廿一日　　「久経公也」修理亮（花押）

五郎大郎殿御返事　　久經

「到来八月廿五日」

守護所殿御札　谷山滿家具書等事　弘安三八月廿五到来

820

「写在御文庫二番箱他家文書一巻中」

藤原信祐譲渡子息童名觀音丸、得分田畠山野并所職等事、

一大隅國

正八幡宮正政所職已下得分并餅田村

右、件田畠山野所職等者、信祐之重代相傳之所職也、調度文書相具、限永代、童名觀音丸譲渡早、仍爲後日證文、譲狀如件、

弘安参年八月廿三日　　藤原信祐在判

821

「權執印文書」

平重峯謹言上

爲薩摩國八幡新田宮執印重兼以下所司神官等、得同國

住人在國司道氏語、令打擲刃傷神人由、構出無實、催
上重峯、爲訴人身、令在國、令延引沙汰、無謂事、
件(右脱カ)執印重兼子息重友者、爲在國司道氏聟、爰道氏乍爲地
頭(恩カ)息預人、令違背地頭、致濫訴之刻、重兼得道氏語、依
爲一社神官、執印相誘所司神官等、令打擲刃傷神人之由、
構出無實、致僞訴、申賜六波羅殿御教書於宰府、乍催上
重峯、彼濫訴之事(發カ)、令在國、于今未令上府之条、無謂者
也、是則無實濫訴、依無陳方、上訴事不實之罪科、爲令
遁避對決也、然者早差日限、被召上彼輩、尚以令難澁御
催促者、其子細爲有御注進、粗言上如件、

弘安三年八月　日

822

『臺明寺文書』

大隅國臺明寺衆徒等申山王冬祭田字宗曽利并阿弥陀講新
田・楠本田・息田(ママ)等作毛、被點定由事、訴狀副具書、如此、
早可被明申候、恐々謹言、

弘安三年十月十五日　　左衛門尉在判

右近次郎殿

「在口裏」
「藤内左衛門尉殿問狀案文」

823

「越前島津氏六代又五郎忠藤譜中」

播磨國下揖保東方地頭職周防又五郎入道覺善、當知行不
可有相違者、　天氣如此、悉之、以狀、
元弘(弘安)三年十一月八日　　宮内卿(中御門経季)(花押)

824

『蔵山田譜中』

嶋津下野守久時(三代久経公也)申新造御持佛堂廊用途事、背度々奉書、
代官逃下云々、　甚自由也、不日任傍例、可致其沙汰、此
上令難澁者、有後悔欤者、依仰執達如件、

弘安三年十二月十九日　　相模守(時宗)在判
式部太郎(忠真也)跡

「到来同四年四月五日」

825

「伊作氏久長譜中　正文在巻本トアリ」

「在文庫中」

ゆつりわたす、二なんやくすに(薬寿)
「信濃国太田庄」しなのゝくにおほたのしやうのうち
「神代郷」かしろのかう　「津濃郷」つのゝかう
「薩摩国」さつまのくにのうち
「伊作庄」いさくのしやう　「日置庄」たゝしへきのしやう　へきのしやうハはゝ　一この〻ち

一　六「条堀河」てうほりかわのち三（戸主）へぬし、ほりかわおもてみなミのハし也、

右、そりやうハ、くんこうのちなり、しそむさまたけあるへからす、たゝし、三郎（忠宗）なんしなくハ、やくすかの（そ脱カ）あとをちきやうすへし、又やくすなんしなくして、をんなこハかりいてきたらハ、しなのゝくにつのゝかうハかりをゆつるへし、のこりのそりやうをハ、三郎につくへし、又三郎なんしなくして、をんなこハかりあらハ、いかのくになかたのしやうハかりを、かのによしにゆつるへし、のこりをハやくすちきやうすへき也、又ふりよの事ありて、三郎かところめさるゝ事あらハ、やくす申給ハるへし、みくうしハ、こ入道（忠時）の時、まんところよりさためくたされたるしやうをまほるへし、のちのわつらひあらしためにに、しひちにてかきをくところ、くたんのことし、

弘安四年四月十六日　（花押）

このゆつりしやうに、おもひわすれて、しちみやうをかゝさるあひた、おくになのりをかきて、ハんをくハうるもの也、

久經（花押）

826　三代
久經
弘安七年閏四月廿一日卒、年六十、
└忠宗
　三郎左衛門尉　下野守　上總介
└一久長
　號伊作　初忠長　藥壽丸　彦三郎　左衛門尉
　下野守　大隅守
　受父之讓、領于薩州伊作庄、居住之、
└二宗久
　初清久　徳壽丸　左京進　大隅守

827　「伊作氏譜中」
元祖
久長
初忠長　藥壽丸　彦三郎　三郎左衛門尉　下野守
大隅守
高祖忠久四代之孫忠宗公弟也、領地伊作莊而號伊作、
爲當家藩籬將、非啻武名之鳴國家、於天下亦無所隱、
是以將軍家之御教書・御下文珍戴者幾多也、老父道忍

有所以讓与于兩男之次序厚薄者也、忠宗以爲嫡子讓畀守護職、忠長以爲二男、祖父忠時承久兵乱之時、属關東、渡於宇治川、施譽於天下、傳名於後代、其戰場所帯之旌旗寶刀号綱切、鞍鐙其外重器所以讓与也、

828

「伊作家久長譜中　写在巻本トアリ」

「正文在文庫」

（端裏書）
「ゆつりしやうとものもくろく」

一通　やくすとの（久長）ゝゆつり狀

一通　たひ〳〵の御くたしふミ、さうてんのてつきせうもんよふしよハ、そうやう（り脱カ）のもとに候よしの狀

一通　いさくのしやうの御下文のあん

一通　いさくへきのしやうの御下文のあん

一通　大納（藤原頼経）言入道殿あんとの御下文、ならひにふんこ（忠久）殿、大すミ（忠時）殿御ゆつり狀のあん

一通　やくすとの〻給はられ候あんとの御下文あん

一通　こけ（久経室忍阿）御せん、やくすとの、同せんす（久長妹）御せん、ならひにてつきの御けちのあん四つ、以上七つの御もんしよら、はたけやま（畠山）のあま御せんのあつからせ給ふうけとりのあん

一通　大すミとのよりところ〳〵を、すりのすけ（久経）殿にゆつらせ給ふ御狀のあん

以上八つ

829

「伊作家忠長譜中　正文在巻本トアリ」

「正文在文庫」

たい〳〵の御くたしふミ、さうてんのてつきせうもん、かた〳〵のゑうそともハ、そうりやうのもとにあり、よう〳〵の時ハ、そうりやうにあひたつねへき也、

弘安四年四月十六日　　久經（花押）

830

『比志島文書』

異國警固筥崎番役事、自二月二日至于五月一日、被勤仕了、恐〻謹言、

弘安四年五月一日　　右衛門尉（花押）

日四嶋代河田右衛門尉（盛實）殿（比志）

831

弘安四年辛巳

五月、鎌田尾張守清憲元の世祖大軍を遣はし本邦に寇する時き、拒きて筑前の博多に戦ひ死之、

六月二十九日、入來院平四郎有重亦同しく元の賊を壱岐島に拒き、戦て筑前の海上に死

せり、入來院平五郎致重同しき戦に死す、入來院四郎太郎重尚亦同しく死す、皆有重の弟なり、

832 『正本在權執印』(道風)

(花押)

大中嶋事、所被改易新左衛門尉成氏知行也、給主未補之間、所司神官相共致其沙汰、苧代・桑代・作稲・御年貢以下令收納之、可令注進員數、若得重兼并前使代官等語、於緩怠所司等者、追出其身、可被召上所職之旨、所被仰下也、仍執達如件、

弘安四年閏七月廿八日　　沙弥(花押)

新田宮所司神官中

833 『鹿屋氏系図』

弘安四年六月六日ヨリ同十三日ニ迄、元兵ト日夜連戰、海陸接戰數回、千餘ヲ殪シ、賊兵ヲ退ケ、十九日、筑前ノ今津ヲ侵シ、沿海ノ諸軍皆殊死シ戰ヒ、水陸並進シ、二十日、博多ニ強逼ス、沿海ノ諸軍我兵皆奮戰ス、

834 『鹿屋氏文書』

下　嶋津御庄大隅方鹿屋院

定補弁濟使職事

左馬允伴實兼『実包ノコトカ』

右人、令補任件職畢、御年貢以下恒例臨時御公事、無懈怠、可令致其沙汰之狀、所仰如件、以下、

弘安四年八月　日

預所法眼和尚位(花押)

835 『正文在國分八幡宮社司澤氏』

注進

處分帳

合

一　嫡女字長壽分譲与(花押)

最勝寺新阿弥(陀脱カ)堂御領西加礼川惣本公験参通事

國司寄文一通

聽宣一通

万得渡文一通

但於本公験参通者、字鬼次郎丸可譲与也、下村内邊木山村者、字伊王仁所譲与也、於四至者、處分帳之譲狀仁明白也、残所之下村者、併可被惣領也、(花押)

下村郡本年貢分(花押)

御佃米参石四斗、内京定二石三斗加賃八斗口米三斗定(ママ)(花押)

同年貢雑物代銭玖貫文、桑代絹陸領仟方也、

邊木山京進年貢者、併郡本仁請取、可京進也、

宮寺年貢分(花押)

修正餅百枚、内上下別伍拾枚、内参拾五枚可勤之、但

万得舛仁天 飯壹舛宛也、残拾伍枚者、邊木山村可勤之、

懸餅参枚、枚別飯伍舛宛也、上下各年勤之、同カラム

餅十八也、

毎年僧供六ヶ月内、壹ヶ月ハ邊木山可勤之、黒米壹斗

分也、

國絹貳丈伍尺、上下各年勤之、下村宛時四ヶ年壹ヶ度、

邊木山可勤、

四丈布壹段、上下各年勤之、下村時四ヶ年壹度、邊木

山可勤之、

苧参兩内加口苧定此内参分者、邊木山可勤之、

凡供米伍舛内、上下別貳舛五分、内五分ハ邊木山可勤

也、

大念佛温木参拾束、上下別拾伍束、内参束ハ邊木山可

勤之、

凡絹貳疋可勤之、手估(ママ)田勤也、

御放生會時鹿皮一枚、上下各年勤、下村宛時四ヶ年壹

度、邊木山可勤、

但阿弥陀堂修理可致丁寧沙汰也、(花押)

所從分(花押)

清大夫一類五人 子息福政 清三郎 鶴王 鶴次郎

次郎大夫子息黒次郎丸身代仁字得妙女弁之、則彼女ハ

自存生時渡畢、

一 伊王分讓与(花押)

邊木山村

四至 限東大川白木山道ヨリ安楽道、限南畑坂、限北二ヶ迫南山入口、限西畑坂道上立頭并辺木山西山彼多目上立二ヶ迫入口、(花押)

邊木山年貢分(花押)

御佃米、京定伍斗賃ニ二斗口米七舛五合 合七斗七舛五合、毎年可

勤之、

同雑物代銭壹貫文也、 桑代絹仟方也、

此色々年貢者、併可送本名、爲京進也、

宮寺年貢分(花押)

修正餅拾伍枚、万得飯舛宛也、

懸参枚、上下各年勤之、下村仁宛時四ヶ年壹度、邊木

山勤之、

毎月僧供六ヶ月内、壹ヶ月邊木山可勤之、黒米壹斗分
万得、
國絹貳丈伍尺、上下各年勤之、下村宛時四ヶ年壹度、
邊木山可勤之、
四丈布壹段、上下各年勤、下村宛時四ヶ年壹度、邊木
山可勤之、
苧參分、毎年可勤之、凡供米伍合、毎年可勤之、
大念佛温木參束、可勤之、(花押)
御放生會時鹿皮一枚、上下各年勤之、下村宛時四ヶ年
壹度可勤、
止上萩原田肆段、但田者、師匠長壽御房之手ヨリ依爲
最後給仕天、限永代讓与得畢、本坊處分帳明白也、大
示經田内也、但於所當公事者、本名留畢、賣券之狀仁
明白也、案文副渡事也、於本券者本坊留置也、又澤居
薗并北小薗石躰宮、毎月三ヶ日仁王講勤免、可勤丁寧
也、又、阿弥陀堂修理可致丁寧沙汰也、(花押)
所從分
究竟法師親子參人袈裟法師　袈裟次郎丸
又太郎冠者妻子ウラチ女、但於字犬子者、依爲養子、
暇給候畢、不可有後日沙汰、既覺順之放文取候畢、

一　亀石分(花押)
所從、字毗沙女親子參人倉太郎　倉犬女　但此女者、加礼
川百姓弥太郎別當所從也、然而彼弥太郎別當与聟千手
主兩人ッ天、鎮守祭田作天不勤ッ天逃失畢、又桑代絹并
所當米不弁ッ天失畢、仍其代召取家中服仕者也、又倉
太郎丸父弥藤太検校所當米并桑代不弁ッ天死畢、仍限
永代讓与畢、
右、件處分、姉妹相互如親子ッ天任讓狀之旨、無違乱可被
沙汰也、但各所領不可讓他人、不可□(法却カ)、若又背處分帳
有子息者、非覺順之子息、於自今已後者、可守抄帳之狀
也、又相互阿弥陀堂修理可致丁寧也、兼又惣公事出來時
者、上下之沙汰寄合、半分ッ、可勤也、仍爲後日沙汰、
注文之狀如件、(花押)
弘安伍年正月　日　　名主兼寺別覺順(当脱カ)(花押)
一　西加礼川上下御年貢公事注文事、
但下村分御佃米元參石、今加一石、京定二石八斗也、
修正餅百枚上五十枚下五十枚、懸參枚枚別飯五舛宛也、
上下各年勤之、カラム餅十八、各年勤之、
毎月僧供黒米壹斗分也、上下各月勤六ヶ月宛、潤月ハ
上下寄合勤、

國絹貳丈五尺、上下各年、四丈布一段、上下各年勤之、
苧肆兩内上二兩、下二兩、加口苧陸兩也、御放生會時鹿皮一枚、
上下各年勤之、
大念佛温木參拾束上十五束、下十五束、半分勤之、
此外公事出來時者、上下寄合可勤也、
右、公事大略如此、爲後日沙汰注進如件、（花押）
一　郡本与邊木山於惣公事者、以陸分壹ヲ邊木山可勤之、
不可有後日違乱之狀如件、（花押）

（花押ハスベテ覚順ノモノナリ）

836

『比志島文書』

薩摩國御家人比志嶋五郎二郎源時範謹言
欲早依合戰忠勤、預御注進子細事、
副進　自大炊亮殿（島津長久）所賜證狀案文
件條、去年六月廿九日蒙古人之賊船數千余艘襲來壹岐嶋
時、時範相具親類河田右衞門尉盛資、渡向彼嶋令防禦事、
大炊亮（『長久』）殿御證狀分明也、次月七月七日鷹嶋合戰之時、自
陸地馳向事、以同前、爰時範依合戰之忠勤、爲預御裁
許、粗言上如件、
弘安五年二月　日

837

久經
初久時　修理亮　下野守
高久（『長』）
號中沼大炊助　母同忠時、
信濃國守護代居住于當國、法名教佛、

838

『高岡士河上次郎左衞門家藏』

薩摩國御家人橋口次郎大藏家忠謹言上
欲早任祖母道阿弥陀佛讓狀、賜安堵御下文市來院内河
上名主職事、
副進　讓狀案文
件名主職者、自祖母道阿弥陀佛之手、寶治元年五月五日
被讓与于家忠畢、然者、早任彼讓狀、賜安堵御下文、爲
備向後之亀鏡、恐々言上如件、
弘安五　三　十一日

839の1

『調所氏譜祐恒傳』

弘安五年壬午三月十六日、祐恒授書、傳子息恒幸調所主
神司職等、今其讓狀欠殘莫知其詳、

839の2

□たねかしま□たゝのあひたの事□すけ□
人の□あひたや□たゝろにゆつり
□いちやう・きたのしけひさのそのいしよ□
くたんのことし、

弘安五年三月十六日　　主神司祐□(恒)□

840

『比志島氏文書』

當國御家人比志嶋五郎次郎時範令申□(蒙古合、異国合カ)戰之間事、去年六月廿九日、五郎次郎并親類河田右衞門尉盛資、相共罷乘長久之乘船、渡于壹岐嶋候事實正候、同潤七月七日、鷹嶋合戰之時、五郎次郎自陸地馳向候之条、令見知候了、若此條僞申候者、日本國中大小神罰可罷蒙長久之身候、恐惶謹言、

弘安五年四月十五日　　『号中沼大炊助』大炊助長久

「大炊助長久ハ久経公ノ弟、中沼氏ヲ号ス」

841

『臺明寺文書』

奉施入

臺明寺大念佛導師法服一具事

納袈裟并横被　表衣　裳

表袴　帷　檜扇　韈

已上　八

右、施入志趣者、爲學頭榮源且償年來之素意、且成滅罪之方便、以一具之法服、施三寶之福田之狀如件、

弘安五年九月四日　　學頭榮源

842

「延時氏文書」

正八幡宮御領薩摩郡万得内河原田枝□

栗野殿所

右、枝名女子分薗者、任親父讓之旨、無違乱可被領知、而於万雜公事并薗地利物者、如傍例之讓狀、尤可爲本名沙汰也、至于神領内畠地者、自今以後、不可背(違脱カ)之狀如件、

弘安五年九月　日　　正宮御使僧尊長(花押)

843

『末吉羽島氏文書』

讓与　字千与壽丸所

平忠重先祖相傳所領薩摩國薩摩郡忠重知行分所々事

成枝名内羽嶋浦田畠山野并本若松名田畠山野・是枝名

田島山野等事

右、件所々者、平忠重先祖相傳之間、依爲嫡子、相副次第證文、所讓与實也、関東御公事者、無懈怠可令勤仕也、至于子々孫々、無他妨、彼所々者可令領知狀如件、

弘安五年十二月二日　　平忠重在判

『薩摩平次忠持ノ四男、羽島・若松知行、若松四郎忠重』

（裏書）「□（於正）文者、依爲連券、封案文裏、所副渡也」

844

「延時氏文書」

若松四郎忠重申下六波羅殿御教書以条（候カ）々事、所詮、任先下知、止乱入狼藉、令安堵其身、被糺返作毛以下損物等之儀、於条々狼藉□（者糺カ）明兩方、可注申之儀、被仰下候之間、任御教書之狀、爲致沙汰候、其子細先日注申了、而忠重重訴狀寫書、然者子細既見狀、以貴殿（ママ）違背嚴重御下知、動抑（ママ）之討殺忠重之由、所訴申也、此条事實者、以外之次第候、尤任御教書之狀、令安堵忠重、被糺返損（ママ）之儀、於狼藉事者、早速可上府給候、糺明兩方可令注進候、恐々謹言、

「年間不詳」七月廿二日　　沙弥（少式資能）（花押）

延時三郎殿

「右前ニ十二月二日忠重ノ事有之、此ニ載置也」

845

「越前島津氏譜中」

三代 行景 左衛門三郎 ― 忠政 左衛門三郎

― 忠經 五郎 無子孫

五代 忠幹 左衛門六郎

姪忠政無子卒故、忠幹継家統、

846

沙弥行照解　申請　證判事

請任先傍例、殊給證判、爲公驗、播磨國下揖保庄地頭方文書紛失狀、

右、件地頭職者、高鼻和左衛門尉有景所領也、而息女越後局相傳之、子息左衛門尉忠行相續管領、其子兩輩（三郎 行景）六郎 忠幹 依令相論彼職、件庄代々證文等暫預置行照之處、去年十月之比、爲斗藪在京、同十一月廿四日夜、群盗令乱入行照之宿所、（持明院 北大路）、被盗取彼證文等畢、雖捜求不出來、仍以案文（元仁元年十二月廿五日 宛賜有景関東御下文）、仁治三年八月廿六日有景讓女子越後局狀、（但一期之後、豊後 三郎讓与所也云々）、寛元元年七月廿二日越後局安堵御下文、弘安二年七月廿七日越後局（法名 佛如）讓嫡子忠行狀、欲模正文、且如此之重書紛失之時、申請連署、備亀鏡者、先傍例也、向後若帶彼文書等、有沙汰之輩者、盗犯之科不可遁者也、望請、被給證判、爲用末代之公驗

勘事狀、以解者、

弘安六年八月　日

今加覆審、尤依有其謂、各所加判也、

散位平朝臣具繁(花押)

前周防守源朝臣惟行(花押)

前左馬助源朝臣仲忠(花押)

木工權頭平朝臣繁高(花押)

造酒正中原朝臣助友(花押)

助教中原朝臣師種(花押)

前刑部大輔高階朝臣經茂(花押)

人々證判分明、仍加署判、

左衛門少尉中原朝臣章有(花押)

面々證判頗可謂衆證顯、仍加署判而已、

右衛門大尉中原章継(花押)

群盗乱入之條顯然之上、文書紛失事、隣里連署相叶衆證、仍所加證判也、

修理左宮城判官左衛門少尉中原朝臣章長(花押)

文書紛失之條、面々證判足衆證、仍加愚署而已、

左衛門權少尉中原朝臣職隆(花押)

件文書爲群盗紛失之條、面面證判炳焉之間、所加判也而已、

防鴨河判官明法博士兼左衛門少尉中原朝臣明盛(花押)

「統目裏判」(花押)

847

『羽島氏文書』

讓与ちやくしあさな千世石丸所

あさなちよいしまろハ、ちやくしたるによて、ゆつりあたう平たゝ「忠永」なかせんそさうてんのそりやう、「薩摩郡」さつまこほりはしまのうら「羽島浦」のてんはく・さんや・うミはま、「郡本」こほりもと同さんや・かくらまのはま、をなしきかいほつてん、「花伞礼」はなむれ・ほんわかまつ「本若松」のてんはく、「惟宗」これむね「中島」のうちこけふん、きねくはたけ・ぬくたにのてらた、なかしまのそのこかそ、「成枝」なりえた・「成岡」なりをかのさうはくてん、ならひにこれえたのてんはく・さんや・かくらら(り脱カ)の事、「是枝」

右、件のそりやうらハ、「忠永」たゝなかちゝ「忠重」たゝしけのてよりゆつりうるところなり、くハしくハほんせうもん、ならひにちゝのゆつりしやうにミえたり、しかれハそのむねをまほり、ちやくしちよいしまろにいやうねんをかきて、ちきやうせしむへし、たゝしちゝのゆつりのうちのはい

もんは、ちゝのしやう『是ヨリ末紙接ヨリ切レナシ、弘安六年八月日忠永在判ノ文書ナラン、英時ノ下知状併セ見ルヘシ』

此状爲忠兼申□資家之自筆之条、承伏了、

元亨三年十月六日　　沙弥春寂（花押）

左衛門尉久義（花押）

於正文者、依爲連券、封案文、所副渡也、

忠兼（花押）

848

『肝付典膳文書』

肝付郡弁濟使職事

右、件所職者、阿佛之先祖相傳之地也、然間任親父故阿佛譲状、東方兼弘所譲得之領地分、於自今以後者、雖一塵至于子〻孫〻、不可致違乱之、但自宇郡伊下仁水田壹町止本所當米并万雑公事、付進兼石早、其外於臨時課役者、可懸之、如此令和与後者、兼石同子息孫与兼弘同子孫、相互不可有遺恨不審（腹脱カ）黒害心、於背此儀人者、不可有子〻孫〻之儀、若此条〻僞申候者、

上梵天帝釋四大天王　殊　日本鎮守天照大神　八幡大菩薩　當郡鎮守四十九所大明神　惣六十余州佛菩薩　大小神祇冥道御罰を可罷蒙候、仍和与状如件、

弘安六年十一月十七日　　伴　兼石在判

嫡子兼藤在判

849

『寫在國分正八幡宮社司澤氏』

奉寄進

正八幡宮御寶前

豊前國上毛郡勤原村地頭職事、爲

右、

聖朝安穏異國降伏、殊有御祈願、所被避進也者、依鎌倉殿仰、奉書（ママ）如件、

弘安七年二月廿八日　　正五位下行駿河守平朝臣業時在判

正五位下行相模守平朝臣時宗在判

850

ゆつりわたす

下つさのくに「相馬」さうむまの御くりやのうちくろさきのかうの事

右ところハ、さうむまのこ二郎左衛門殿（胤綱）たねつな、ならひにこあまこせんのゆつりしやうをそへて、下つけの三郎むねたゝに、ゆつりわたす也、しゝさかいハ、「康元」かうくゑん

くわんねん・こうあん（弘安）三年のこあまこせんのゆつりしやうにまかせて、たのさまたけなくりやうちすへし、もしこの所のうちを、ゆつり状ありと申さん人ハ、しそんにてハあるましく候、ほうそのとかに申あてられ候へし、よてゆつり状如件、

弘安七年三月廿二日　　たいらの氏（花押）

「右旧御番所御文書二番箱中、御外祖御譲状一巻ノ中ニ在リ」

851

『久經公御譜中』

浄光明寺鐘銘

島津庄内薩摩方鹿兒島郡造立梵宇名浄光明寺、嚴考前隅州禪定幽儀道佛第十三年之間、爲祈成等正覺、増進佛道之妙果、造此鐘、同抽慇懃之誠、成陶冶之功、和霜之聲遙期鷲峯之曉、經夜之響遠傳鹿苑之嵐、願以今功徳、上至佛界下及那落、先祖過去幽靈皆預餘薫、一切法界衆生、普得利益、仍爲後代、聊所記置也矣、

弘安七年甲申（歳次脱）閏四月己巳三日

大願主前下野守

藤原朝臣久經

852

「忠宗公御譜中」

『比志島氏文書』

法名道忍

鑄師太宰府住人丹治恒頼

滿家院内比志嶋分筥崎石築地事、五丈壹尺四寸、最前被勤仕畢、仍執達如件、

弘安七年後四月廿一日　　宗忠（花押）

比志嶋太郎殿

853

「久經公御傳中」

弘安七年甲申閏四月廿一日、卒于筑前州筥崎役所、享年六十、法名道忍、號義阿弥陀佛、浄光明寺殿、

854

「島津世家」

道忍公（諱久經　初名久時　称修理亮　下野守）

公嘉祿元年乙酉歳生、夫人伊達氏所生、（伊達判官入道念性之妹也、先公薨之後薙髪称忍西）、公有兄、曰式部少輔山田忠継、以非適夫人之子不継、文永九年　先公薨、　公嗣位、　公嘗使其弟大炊助

阿蘇谷久時爲守護代、當　公朝京師之日、乘其隙而欲奪三國守護事未就、　公已歸自京師、乃罷久時之守護代、初元皇帝屢遣使通我　日本、不納、元乃使鳳州經略使忻都（ヤント）伐　日本、忻都將兵數萬來攻對馬、無功而還、建治二年元使到長門室津浦、直到鎌倉、捕而斬之、前年（元年）公既奉　將軍惟康之命、城筑前筥崎守之、以備元寇、三年春、元又使杜世忠來聘、亦不報、且執於鎌倉殺之、於是元怒日本無禮而屢殺使人、乃命阿剌罕爲右丞相、范文虎・洪茶丘等爲右丞、李庭張拔都參知政事並行中書省事、率師十萬來伐　日本、時高麗王禃來朝元、願益兵併擊之、加禃行省右丞相俱往、阿剌罕卒于軍、元以左丞相阿答海（塔カ）代之、未至文虎等、四年七月已航海至肥前平戸島（通鑑作平壺島）、移軍於五龍山、我兵屯五龍山下距之、遇颶風敗舟、文虎等各擇堅艦乘之遁去、弃士卒十餘萬于島、糧舟敗沒、衆多飢餓、乃推張百戸者爲帥、方伐木作舟爲歸計、　公及筑紫諸將菊池・松浦等率衆、乘虛襲之殺之、殆盡其生獲者斬之博多、（一作八角島）、才縫于闔・莫青・呉萬五三人歸之、使語元皇帝、日本之彊、北條時宗使宇都宮貞綱、將中國之兵援筑紫軍擊元寇、往抵于備後、則聞元兵敗、然貞綱不肯班兵、而直到筑紫、益聚精兵以備元寇、故　公亦停守筥崎者數年、文治二年　得佛（忠久）公就國之始、鎌倉僧宣阿從俱共來爲立一寺居之、號松峯山無量壽院淨光明寺、（相模藤沢山清淨光寺末寺、一遍以前時衆宗也）、及　公之時、建治三年九月、一遍上人會過我薩摩國、　公聽其說而深信之、弘安七年甲申四月以適當　先公十三回、故更興作增廣舊制、此年閏四月二十一日　公壽六十而薨于筑前筥崎營、號道忍義阿弥陀佛淨光明寺殿、

855

『國分寺文書』

薩摩國一宮國分寺事、往古子細當時次第、并管領仁及免田等、分明可令注申狀、依仰執達如件、

弘安七年五月三日　　駿河守（兼時）在判

嶋津下野守（久経）前司跡

856

「町田元祖忠経弟久氏譜中」

弘安七年甲申、有大隅七郎久氏与薩摩國薩摩郡郡司孫太郎忠能相論同郡成枝名同名田之事、今按是年七月一日駿河守平重時、奉將軍惟康之旨、被附与件論所于　久經公之下知狀、載在　久經公舊譜、雖然、是年閏四月　久經公既已沒焉、蓋未聞鎌倉欤、頗可疑故、今改收之久氏譜、

857

『全譜中』「写指宿助左衛門尉蔵」

薩摩國薩摩郡一分郡司孫太郎忠能与惣地頭下野久經并舎弟大隅七郎久氏等相論条々

一成枝名五舛米事

一名田(同脱カ)参町五段下地事

右、訴陳之趣子細雖逾、所詮、島津庄三箇國(日向大隅薩摩)内、云本庄、云寄郡、云私領、所務各別也、本庄者領家一円之地、寄郡者半不輸、私領者領家地頭不相綺、仍代々給安堵御下文之由、忠能令申之處、代々惣地頭進止之旨、久經雖申之、如忠能祖父忠友給貞應二年四月日下知状并寛元四年十月廿九日御教書等者、郡司進止之条、無異儀欤、而帯忠能父忠國文永十一年四月日切符、先例惣地頭進止之由、久經雖申之、彼切符爲近年状之間、自往古地頭進止之条、實證不分明、隨如惣地頭代善心弘長三年十一月十二日和与状者、當名惣地頭不可相綺之由所見也、但依悪口之咎、可被付論所於久經旨、載状左之上、不及子細、次押領以後得分并作毛事、忠能雖申子細、依悪口之咎、被付論所於久經之上、子細同前、

一忠能親類所從等牛馬事

一同親類忠澄所從乘馬并身代二人鹿皮及殖竹事

自餘略之、

以前條々、依鎌倉殿仰、下知如件、

弘安七年七月一日　　駿河守平朝臣(業時)花押

「此文書、在久經公御譜中」

858

『在比志島氏』

大府宣　大宰府在廳官人等

定補薩摩國滿家郡々司(務カ)職事

御前勾當法橋重賢

右以人、爲彼職、可令執行郡務之状、所宣如件、府官等宜承知、勿違失、以宣、

弘安七年八月　日

都督藤原朝臣(中御門経任)(花押)

859

「蒲生士人山内某家蔵文書」

薩摩郡内平礼石寺内事、任故下野(久経)入道殿御寄進状、如先例、可被寺務之状如件、

弘安七年九月　日　　藤原久氏(花押)

「按ルニ、此年四月、三代久經公御逝去ナレハ、故下野入道ハ久經公

ノコトナラン、左アリテ、久經公ノ御末弟ニ七郎久氏ト云御方アリ、時代ヲ以テ考レハ当レリ、後考ヲ俟ツ」

860

『比志島文書』

沙弥導願辞

譲渡于孫彦三郎丸薩摩國満家院内比志嶋・河田・西俣・城前田・上原薗、已上伍箇所名主職事、

右、件田畠山野名主職、爲導願重代相傳之當知行無相違、而間　関東御下文已下調度文書等不残一紙之、譲渡于彦三郎丸畢、但於方々公物并御年貢等者、任先例、可令勤仕也、以此旨、永代無相違、可令領掌之狀如件、

弘安七年十一月十九日　　沙弥導願（花押）

861

『國分寺文書』

天満宮國分寺恒例不退御神事次第

正月分

一日、天満宮朔幣御供并十七社御供（聽役饗膳高城郡内吉枝名役）

二日、同宮御供并十七社御供聽役

三日、同宮御供并十七社御供（高城郡内時吉役 并修正寺役 壇供祁答院役）

四日、同宮御供并十七社御供高城郡内上村万得役

五日、同宮御供并十七社御供（同上村万徳役 講堂修正僧膳寺役 壇供寺領田役）

六日、同宮御供并十七社御供本領田役　歩射饗膳寺役

七日、同宮御供并十七社御供本領田役 白馬節會酒肴

八日、同宮御供并十七社御供高城郡内若吉役 尼寺薬師講僧膳寺役

同日、講堂（吉祥御願始御勤最勝講并修正大佛供　高城郡役油七合 加供料大桶三十口　松五十把　懸餅十枚大并五十枚　牛王析紙五帖　同役 祿凡絹一疋　同）

同夜、四天供阿闍梨秘法行之 壇敷浄衣析凡絹二疋

九日、天満宮御供并十七社御供（高城郡役并泰平寺修正壇供僧膳寺役　同夜講堂吉祥御願高城郡山門院役）

十日、同宮御供并十七社御供（高城郡役并同夜講堂吉祥御願薩摩郡市来院役）

十一日、同宮御供并十七社御供（高城郡役 同夜同寺吉祥御願牛屎院役）

十二日、同宮御供并十七社御供（高城郡役　同夜同寺吉祥御願入来院役）

十三日、同宮御供并十七社御供（高城郡役　同夜同寺吉祥御願日置并垣歌追儺　但追儺薩摩郡内成枝名役）

十四日、同宮御供并十七社御供（高城郡役　同夜同寺吉祥御願谷山郡役同前）

此六夜七日御勤参堂衆在廳并寺社所司三昧等毎夜皆参

吉祥御願次第

高城郡（飯一石 餅五十枚　炭一古　油七合　懸餅十枚　松五把　壁一間 佛供一坏）

薩摩郡（飯一石　餅五十枚　炭一古　油七合　松十把　懸餅十枚　壁一間）

入來院（飯八斗　餅四十枚　油五合　松四十把　炭一古　懸餅十枚　壁一間）

祁答院　飯八斗　餅四十枚　油五合　松四十把　懸餅十枚
牛屎院　飯八斗　餅四十枚　炭一古　油七合　松五十把　懸餅十枚　壁一間
山門院　飯八斗　餅四十枚　炭一古　油七合　松五十把　懸餅十枚　壁一間
莫祢院　飯四斗　餅三十枚　油五合　炭一古　懸餅十枚
伊集院　飯八斗　餅四十枚　炭一古　油七合　松五十把　懸餅十枚　壁一間
鹿兒島郡　飯八斗　餅四十枚　油七合　炭一古　松五十把　懸餅十枚　壁一間
谷山郡　飯一石　餅四十枚　炭一古　油七合　松五十把　懸餅十枚　壁一間
加世田別符　飯伍斗　餅廿五枚　炭一古　油七合　懸餅五枚　壁一間
十五日、天滿宮御供并十七社御供高城郡若吉役并粥
十八日、同宮御供并十七社御供講堂觀音講　僧膳寺役
廿五日、同宮月忌講　僧膳寺役
二月分、彼岸七ヶ日御勤　法花經僧膳寺役
一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供本領田役
二日、同宮御祭御供并十七社御供在舞楽僧膳寺役
三日、老松御祭御供饗膳寺役
八日、尼寺藥師講僧膳寺役并講堂鎮天王御読經佛供祈願役
十五日、御靈會御祭并十七社御供寺役　饗膳寺役　高城郡内若吉勤饗　宮里郷五十五前　在聽寺社所司三昧　三方會向御神事
十六日、泰平寺御靈會御祭并十七社御供高城郡内若吉役　饗膳諸郡郷院役一國大營

在聽寺社所司三昧馬上供奉三方會向御神事在舞樂

御靈會次第

高城郡　靈供米二舛前　次三十前　騎兵一人帯布一反　競馬一疋　相撲二人　廊一間　二立一
薩摩郡　靈供米二舛一宇　二立一前　騎馬一疋次十二前　騎兵一人　相撲二人　廊一間　楽所屋
入來院　靈供米一舛一宇　二立一前　騎兵一人次十二前　競馬一疋　相撲二人　廊一間　楽所屋
牛屎院　靈供米二舛前　次二十五前　騎兵一人　競馬一疋　相撲二人　廊一間　二立一
山門院　靈供米二舛立一前　次二十五前　騎兵一人帯布一反廻役　競馬一疋　相撲二人　廊一間　上祈二
莫祢院　靈供米一舛前　次五十前　騎兵一人　競馬一疋　相撲二人　廊一間　二立一
伊集院　靈供米二舛前　次二十前　騎兵一人　競馬一疋　相撲二人　廊一間　二立一
鹿兒島郡　靈供米二舛一人　笛吹一人　騎兵一人拍子打一人　競馬一疋殖女一人　相撲二人苗引一人　廊一間二立一　鼓打三十前
谷山郡　靈供米二舛廊一間　鼓打一人　騎兵一人拍子打一人　競馬一疋殖女一人　三立一前高足一人　上祈　相撲二人帯布一枚　饗膳二十五前　頓宮延十反廻役
給黎郡　靈供米一舛　騎兵一人　競馬一疋　相撲二人
指宿郡　靈供米一舛　騎兵一人　競馬一疋　相撲二人
日置南郷　靈供米一舛一前　次十五前　騎兵一人　競馬一疋　相撲二人　廊一間　二立
加世田別府　靈供米一舛二立一前　次十前　騎兵一人　競馬一疋　相撲二人　廊一間
智覧院　靈供米一舛　騎兵一人　相撲二人　競馬一疋

御神事次第十五六兩日此ゴトク

十八日、天滿宮御供并十七社御供并講堂觀音講僧膳寺役

廿五日、同宮御閑日會御供并十七社御供并櫻會并月忌講
在舞樂
三月分
一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供寺役
三日、同宮御供并十七社御供并節供寺役　饗膳寺役
八日、尼寺藥師講僧膳寺役
十八日、同宮御供并十七社御供寺役　講堂觀音講　僧膳寺役
廿五日、同宮月忌講僧膳寺役
五月分
一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供寺役
三日、寺忌僧膳寺役
五日、天滿宮御供并十七社御供并節供
同日、五月會御神事并十七社御供高城郡役　饗膳東郷内
大加食役（饗カ）　本宮御供　頓宮御供　還御供　在舞樂
五月會御神事次第
高城郡　粽三百丸　酒二瓶子　流鏑馬一番
薩摩郡　粽三百丸　酒二瓶子　掃除　流鏑馬二番
但、郡司一番　余名一番
入來院　粽百丸　酒一瓶子　樂所屋二間
祁答院　粽百丸　酒一久利
牛屎院　粽三百丸　酒二久利　埇一反廿　道一段　競馬
一疋
山門院　粽二百丸　酒二久利　道一段　國廳屋三間　埇
一反
莫弥院　粽百丸　酒一久利　埇一丈　道卅代　競馬一疋
伊集院　粽三百丸　酒二久利　道一段　埇一段　競馬一
疋　流鏑馬郡司一番　余名一番
鹿兒島郡　粽四百丸　酒三久利　道一段卅　埇一段卅
競馬一疋　殖女一人　鼓打一人　笛吹一人　苗
引一人　拍子打一人
谷山郡　粽三百丸　酒二久利　道一段　埇一段　競馬一疋　還馬一疋
殖女一人　拍子一人　笛吹一人
加世田別符　粽百五十丸　酒一久利　道卅代　埇二丈　競馬一疋　安
幕一間
日置南郷　粽二百丸　酒二久利　埇三丈　道三十代　競馬一疋　輔代一
人
八日、尼寺藥師講僧膳寺役
十八日、天滿宮御供并十七社御供講堂觀音講　僧膳寺役
廿五日、同宮月忌講僧膳寺役
六月分
一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供寺役
八日、尼寺藥師講僧膳寺役
十八日、同宮御供并十七社御供并講堂觀音講　僧膳寺役

廿五日、同宮月忌講僧膳寺役

七月分

一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供寺上分析國役

七日、同宮御供并十七社御供、廳役同節供饗膳寺役

八日、尼寺藥師講僧膳寺役

十五日、講堂御齋會佛供廳役　饗膳寺役　高城郡内若吉役

十八日、天滿宮御供、同十七社御供寺役講堂觀音講僧膳寺役

廿五日、同宮月忌講僧膳寺役

八月分、彼岸七ヶ日御勤、法花經僧膳寺役

一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供寺役

八日、講堂崇導天皇御読經佛供廳役　饗膳薩摩郡内是枝名役并尼寺藥師講僧膳寺役

十八日、同宮御供并十七社御供講堂觀音講僧膳寺役

廿五日、同宮月忌講僧膳寺役

十月分

一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供

八日、尼寺藥師講僧膳寺役

同日、同宮菊會御供并十七社御供高城郡内若吉役　饗膳阿多別府役　在舞楽

在廳并寺社所司三昧三方會向御神事

十一日、講堂法花會始、至十五日巳五ヶ日僧膳寺役

十八日、同宮御供并十七社御供講堂觀音講僧膳寺役

廿五日、同宮月忌講僧膳寺役

十一月分

一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供寺役

二日、同宮祭朔幣土祭并十七社御供廳役　饗膳役　在舞楽

三日、老松祭御供饗膳寺役

八日、尼寺藥師講僧膳寺役

十八日、同宮御供并十七社御供講堂觀音講僧膳寺役

廿五日、天滿宮月忌講僧膳寺役

十二月分

一日、天滿宮朔幣御供并十七社御供寺役

八日、尼寺藥師講僧膳寺役

十八日、同御供并十七社御供寺役　觀音講僧膳寺役

十九日、國廳佛名御願始至廿一日三ヶ日夜勤之、

廿三日、天滿宮御八講僧膳寺役　阿多別府役

廿五日、月忌講僧膳寺役

天滿宮長日御勤之事、但一日別御勤次第

一　大般若經　一　金剛般若經

一　法華經　一　仁王經

右、恒例佛神事等次第、大略注進如此、

弘安七年十一月　日　　都維那澄慶在判

寺主宗明在判
上座融嚴在判
讀師安内在判

862
「小川氏文書」
小河丞左衛門尉時仲申堺事、重訴狀遣之、兩度被仰下之處、不事行云々、所詮、明年二月中可令召進代官之狀、依仰執達如件、
弘安七年十二月十四日　沙弥（業時）（花押）
「ウラニ張紙」
「北条時政五代孫左近将監業時」

863
「島津國史」
道義公（名忠宗、道忍公之子也、称三郎左衛門尉、歴下野守、任上総介、法名道義、仲阿弥陀仏、）
弘安八年乙酉、滿家院比志島入道遣代官戍筥崎、自春正月一日至夏四月晦日而畢、（拠道義公旧譜、）秋七月三日、政所下文、使藥壽丸領信濃神代郷、薩摩伊作莊・日置莊、如　道忍公弘安四年四月十六日讓狀、（拠伊作家譜、）
九年丙戌、事缺不書、
十年丁亥冬十月二十一日、
後宇多天皇傳位於
伏見天皇、（拠大日本史、）

864
『權執印文書』
薩摩國田文事、前々雖令注進、不子細欠、神社佛寺國衙庄園、関東御領等、且注分地頭御家人、且又尋明領主之交名、來十月中可令注申之狀、依仰執達如件、
弘安八年二月廿日　左馬權頭（貞時）在御判
陸奥守（業時）同
嶋津下野前司（忠宗）跡

865
『比志島氏文書』
筥崎警固番役事、自今年正月一日至四月晦日、以代官被勤仕候畢、仍執達如件、
弘安八年五月一日　忠宗（花押）
滿家院比志嶋入道（祐範）殿
「此文書、忠宗公御譜中ニアリ」

866
ゆつりわたすてんはくの事
おゝくらのうちのによかせんそさうてんのそうりや

□□□のうち□□□たかわら六反卅つほ、にしつけてかきのき三反、そのひんかしのなかそのい所、

みき、くたのてんはくハうちのによかせんそさ□(う)てんのそうりやうなり、しかるお、によかあ□ニよほうしそニゆつりおはぬ、たゝしたかわら六反卅ニおいてハ、そう〳〵のそうたう、まんさうくし、りんしのくやくニいたるまてめんしおは□(ぬカ)、かきのき三反ハそうたうといひ、くしと申、ふんニしたかうて、つとんへきなり、そのか□はかりもちといひ、くしといひ、おなしにめんしおはん、しかれハゆつりしやうのむねにまかせて、さうゐなくりやうちすへきしやうくたのこと(ん脱カ)し、

こうあん八ねん八月十日　　おゝくらのさいあみたふ(花押)

(底本ハ題目ノミ記ス、今延時文書ニヨリ補フ)

867

「在文庫中伊作家文書」「伊作家譜中正文在手鏡トアリ」

將軍家政所下

可令早藥壽(久長)丸領知信濃國太田庄内神代・津濃兩郷、薩摩國日置庄(母一期之後、傳領之由載之、)同國伊作庄地頭職事、

右、任亡父前下野守久經法師(法名道忍)弘安四年四月十六日譲狀、(子細載之、)爲彼職、可致其沙汰之狀、所仰如件、以下、

弘安八年七月三日　　案主菅野

令左衛門少尉藤原　　知家事

別當陸奥守平朝臣(業時)(花押)

相模守平朝臣(貞時)(花押)

868

「正文在文庫伊作家文書」「伊作家譜中正文在巻本トアリ」

大すみの藥壽(久長)殿文書目六事

合

一通　へきの庄いさくの庄御下文

一通　しやう(城)殿(安達泰盛)御副文

以上二通

弘安八年十月十九日　　惟世(花押)

法橋御房

869

『比志嶋氏家蔵』

大隅大炊助入道代沙弥靜信謹言上

欲早賜御書下、奉付薩摩國守護所、被召出故右大將家建久九年二月廿一日御下文、賜御注進、令言上関東子

細事、

副進　一通御下文案文

右、如御下文之狀者、日向大隅、當國内南郷・宮里・滿家院所々七ヶ所之名字、雖爲各別、彼名田等引載于狀、宛賜豊後守忠久、所令拜領也、子息忠時令相傳彼領之後、件郡郷内於滿家院者、大炊助入道帯親父忠時之讓狀、知行無相違之處、爲税所篤秀當院郡司職并郡山以下村々掠申之、所押妨也、然者、早被召出於右大將家建久九年御下文、賜御注進、爲令言上関東、恐々言上如件、

弘安八年十月廿五日

870

『權執印文書』

薩摩國田文事、如去年弘安八年二月廿日関東御教書者、前々雖令注進、不委細云々、神社佛寺國衙庄園、関東御領等并領知之分、任被仰下之旨、且云次第相傳之由緒、且云地頭御家人領主之交名、注分分明、余田分限無偏頗、載起請文詞、來廿八日可令注申給之狀如件、

弘安九年正月廿一日　　大前道調在御判

藤原久氏同

社司收納使弁濟使御中

871

『在山田譜土用熊丸傳』

新造御所御持佛堂渡廊用途事、薩摩國谷山郡司資忠對捍云々、早任先例、可令催勤之狀、依仰執達如件、

弘安九年六月十一日　　相模守(貞時)在判

陸奥守(業時)在判

土用熊殿

872

『權執印文書』

薩摩國新田宮造營斬所々一(ママ)ヶ所可止國衙妨之由、先々被仰下、(畢脱カ)与(訴カ)動猶致其妨之間、社家祈申(而カ)候也、造營可停止之由、重殊可令加下知給之由候者、以此趣、可令申沙汰給之狀如件、

「弘安九」　九月廿三日　　按察使在判

参河前司殿

873

新田宮政所注進、爲蒙古用心、筥崎小松□洲崎石築地用途支配

合

勢万　六町二段廿中　　分錢七百十四文

益丸　十三町五段中　　分錢一貫五百四十文

千義　三町一段　分銭三百五十四文
得丸　三町一反卅　分銭三百七十六文
正岡　二丁六段卅　分銭三百八文
御供田　二町二段　分銭二百五十二文
宮男田　四町　分銭四百五十六文
市比野　十五町　分銭一貫七百十文

右、任支配之旨、今月中仁可被致其沙汰之狀如件、

弘安九年十月　日　執(行)印貫首紀

六名略ス

執印散位惟宗判

874

『写在指宿助左衛門忠鏡』

薩摩國薩摩郡一分郡司孫太郎忠能代禪意与惣地頭嶋津下野三郎左衛門尉忠宗代本性相論條〻

一同郡内成枝名下地事

右、當名所務條〻事、先度忠能与忠宗亡父下野守久經相論之時、忠能依令悪口久經之科、以所務條〻被付久經畢、而忠宗令混領御下知外下地之由、忠能依訴申、相尋子細於忠宗、可注進之旨、被仰大友兵庫頭入道道忍(頼泰)之處、如執(進)達兩方申詞記者、禪意則忠宗寄事於成枝名五升米下知、令押領下地捌拾町、令追出忠能親父忠國以下親類等之由申之、本性亦成枝名代〻惣地頭進止之旨立申之□、依忠能悪口之咎、被付論所於久經之由、被載御下知之上者、宛(可脱カ)給下地之旨、陳之者、守忠能訴狀名目、如所被成下之下知狀者、以成枝名五升米并同名田地山参町伍段下地、爲中嶋村園鵠栖田地福(ママ)代神田北山寺免田等下地以下所務条〻、被付于久經畢、而忠宗就于五升米下知名目、令混領彼下地捌拾町之条無謂、隨惣地頭佃耕作并長日厨雑事等事、可止過分之旨、載同下知畢、一向被付下地於惣地頭者、不可有此儀之由、忠能所申非無子細欤、而爲作人安堵御下知之旨、本性陳答不相叶理致、然則於先下知外之下地者、云忠能分、云親類等分、所被停止忠宗押領也、但至五升米者、任先下知可令弁濟、次押領以後郡司得分事、可糺返也、次忠宗令追出忠國以下親類等之条、狼藉之由忠能雖申之、本性論申之上、被返付下地之上、不及沙汰焉、

自余略之、

以前條〻、依鎌倉殿仰、下知如件、

弘安九年十一月五日　　相模守平朝(貞時)臣御判

陸奥守平朝臣(業時)御判

「此文書、忠宗公御譜中ニアリ」

875

『写在指宿助左衛門尉』

さつまこほりのうちなりえたみやうをそうちとうしまつ「成枝名」「島津」
のしもつけのさふらうさへもんたゝむねあふりやうせし「下野三郎左衛門忠宗」
むるあひた、よしとミとのと忠能と、くわんとうにして「吉富」
いちゝにそせうを申候によて、よしとミのみやうしんる
いのふんと御けちいしになりて候あいた、御けちをかき「一紙」
うつして、うらハんをくわへてまひらせ、しやうハんは
忠能もち候ところ也、よてのちのためにしやうくたんの
ことし、

こうあん九ねん十二月十一日　平忠能在判

「此文書、忠宗公御譜中ニアリ」

876

『樺山氏文書』

爲異賊警固、所下遣兼時・〻家於鎭西也、防戰事、加評
定、一味同心可運籌策、且合戰之進退、宜隨兼時之計、
次地頭御家人并寺社領本所一圓地輩事、背守護人之催促、
不一揆者、可注申、殊可有其沙汰由、可相觸薩摩國中之
狀、依仰執達如件、

弘安九年十二月卅日　相模守(貞時)在判　陸奥守(業時)在判

嶋津下野三郎左衛門尉(忠宗)殿

「此文書、御譜中ニミヘス」

877

『写在官庫』

爲異賊防禦事、鎭西地頭御家人并本所一圓地輩、從守護
之催、且令加警固用意、且可抽防戰忠功之由、先度被仰
下畢、而被定鎭西奉行人等之間、若不從守護命之族出來
欤、如然之輩、縱雖致合戰、不可有其賞、可被處不忠也、
早存此旨、可令相觸薩摩國中之狀、依仰執達如件、

弘安九年十二月卅日　相模守(貞時)在判　陸奥守(業時)在判『彈正少弼業時欤』

嶋津三郎左衛門尉(忠宗)殿

878

『比志嶋文書』

□関□(東)要□(須)之仁者、可□(下)遣子息親類、其外者、自身下
向之由□(被)定了、而未下向之輩有之云〻、可令注申之由、
同可相觸守護人、

弘安九年閏十二月廿八日

一守護人

遠江前司時定(北条)肥前國高木西郷山田庄領家惣地頭兩職

大宰少貳入道淨惠(経資)筑前國三毛北郷預所職

大友兵庫入道ゝ忍(頼泰)筑前國怡土庄志摩方三百町惣地頭職

一爲宗人ゝ

武藤四郎右衛門尉盛資筑前國療病寺并同國極楽寺地頭職

薩摩前司入道尊覺豊前國上毛郷内原井村、阿久封村、筑前國小山田村、金口六郎左衛門尉時通跡

草野次郎継永筑前國久重楽方地頭職　景資跡

白石六郎左衛門尉通武筑前國佐野次郎丸

澁谷河内權守重郷法師木工助三郎入道ゝ念跡筑前國今原号金井手地頭職

詫摩別當次郎時秀豊前ゝ司景資跡筑前國志土地頭職

嶋津大隅大炊助長久法師肥後國相良領少卿入道跡

戸次二(ママ)少右衛尉(門脱カ)重秀法師　人行地死去アノ重号跡

武藤五郎左衛門尉經平法師肥前國那久野村地頭職豊前ゝ司景資跡

竹井五郎入道豊後國岩手彦太郎跡

河邊次郎肥後國梁瀬宮提矢上孫三郎泰継跡

次同勲功賞

臼木七郎兵衛尉氏家子息等薩摩國鹿児嶋郡司職内十分一矢上孫三郎跡

米生又三郎種盛子息同前十分一

田尻次郎種宗子息同前十分一

同三郎子息同前十分一

同四郎種継跡同前十分一

米生九郎種有子息同前十分一

矢俣兵衛尉跡信成子息同前十分一

野中左衛門三郎宗通法師同前十分一

香西又太郎定度跡同前十分一

田尻輔房親賀子息河邊弥(孫)二郎配分跡十丁

斑嶋又太郎跡神崎庄配分残十丁

此外薩摩守護人跡御教書一通

去年岩門合戰勲功人事

武藤四郎右衛門尉盛資筑後國竹井庄領家職

薩摩太郎左衛門尉盛房壱岐瀬戸浦預所職

筑前國御家人野介次郎右衛門入道ゝ蓮筑前國水城村水城左衛門尉跡

江戸民部六郎景忠豊前國安吉ゝ久ゝ友三ケ所兵庫次郎兵衛尉跡

白石美野又次郎通継肥前國松浦庄内甘木村兵庫馬三郎能範跡

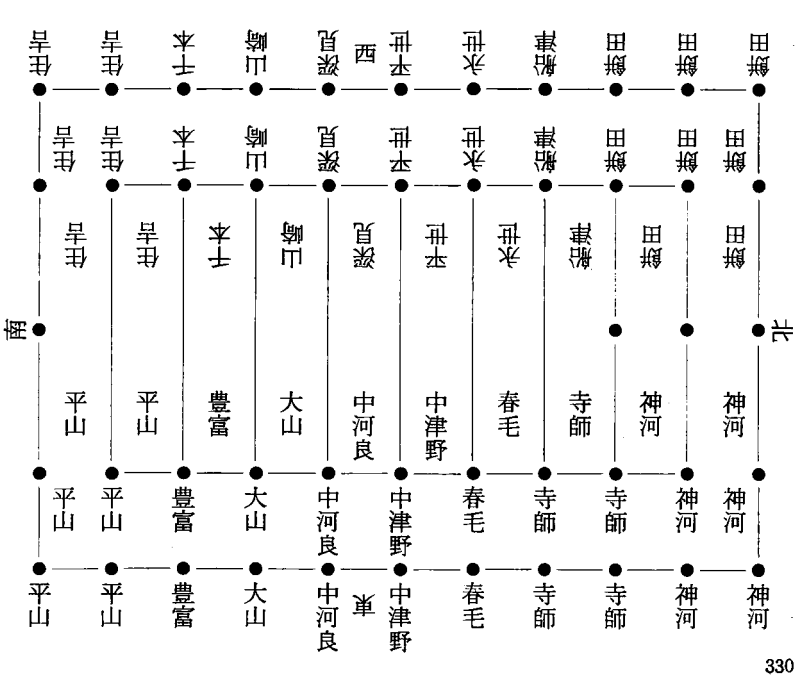
土ゝ呂木又六家直肥前國松浦庄内石垣村同跡

小濱弥藤三郎幸爲筑前國下座郡内燈油田畠武藤四郎左衛門尉跡

神田五郎糺筑前國乙犬丸三分一宮崎執行成直跡

綾部左(右)衛門三郎重幸同三分一同前

土〻呂木四郎左衞門入道爲能同三分一同前
同七郎家基筑前國蒲田別府倉永名
相神兵衞六郎家弘筑前國那珂東郷岩門十分一金田六郎左衞門尉跡
住吉神主佐伯政秀同前
多比良五郎入道尊聖同前
斑嶋左衞門三郎同前
塞永井源三郎同前
青木九郎頼平字有憚　同前
三原八郎種能同前
八樂弥藤次郎重俊同前
打橋平内左衞門尉泰幸同前
古飯三郎兵衞入道同前
松浦次郎延肥前國松浦庄内加〻良嶋田在家兵庫馬三郎跡
古飯次郎資景筑後國三毛庄北郷内田在家永利二郎兵衞尉重時跡
打橋越前法橋能賢筑前國犬垣小本入道種阿光利貿地等　後家明藤次
曽祢崎經弥法橋慶増豊前國佐野次郎丸兵庫馬二郎兵衞入道跡
宇良金崎次郎入道〻眼豊前國東濱田地　同前
田中七郎入道善光豊前國時紀名田地　同前
相神浦次郎入道妙蓮豊前國阿弥陀佛寺大通新開田地神實決院佛性田　同前
倉上弥藤次兵衞入道豊前國賀テ入道正行跡青木別所符田戸数



880

定　宮侍守公神結番事

一番　蒲生若宮政所　孫四郎入道　永里源太
二番　栗野郡司　在河綾太夫　覺定房後家
三番　姶良得丸　太郎太夫　諸太郎
四番　姶良牧山　嶋四郎　諸次郎大夫
五番　姶良末次　蒲生南三郎　平四郎馬（簿カ）
六番　蒲生米丸　蒲生西役（俣カ）三郎　大宮司
七番　蒲生内村入道　後藤大夫　源次郎
八番　脇本三郎大夫　源三兵衛尉　棚司
九番　廻大和入道　長法橋跡　毗沙王
十番　小河郡司入道　左近大夫　廳免三郎

右任先例、番役如件、

弘安十年七月　日

881

一守公神御侍疊事

一長疊三十二帖　小疊六十二帖　帖佐之役也、一ヶ村分三帖也、一帖分代三十文

一小舎人（姜）將束四具、帖佐之役也、

一濱殿借屋分役所之事

西妻一間、曽野恒見疊三帖、日隠萱莚一枚、簾一間、次中一間、帖佐恒見疊三帖、日隠萱莚一枚、簾一間、次中一間、蒲生・久得・西俣疊三帖、日隠萱莚一枚、簾一間、

次中一間、栗野・北里疊三帖、日隠萱莚一枚、簾一間、東妻一間、栗野疊三帖、日隠萱莚一枚、簾一間、

一大宮疊七十一帖、青ヘリ三十帖、紫ヘリ半疊二帖、二重ヘリ二帖、此内十二帖ハ三昧役口食一斗口食餅五十枚

一公文所守公神御疊二十五帖、

一御放生會之時、小舎人之冠修理用途四百文、自調所出之、

一濱殿借屋之疊廿四帖、同借屋之ラヒシ十二合、スエ瓶子一具、其外酒肴用意、三斗入筒一、借屋作之役也、

一橘皮五十貫、長一丈、貫糸之苧一兩、橘皮之袋絹一兩、自調所出之、

一庭草分一ヶ年分四ヶ度、帖佐之役也、

四月二日　六月廿五日　十月十日　十二月廿八日

右、注文如件、

弘安十年二月　日

882

當山新田石築地役事、賜御申狀候之間、令執申候之處、御外題如此候、令進覽之候、恐々謹言、

弘安十年七月廿五日　　守護代僧唯道判

謹上　臺明寺衆徒御中

「在口裏」「博多石築地免除狀」

883

『臺明寺文書』

臺明寺衆徒等謹言上

欲被殊且爲敬神歸佛、且任行賢芳躅、寄進小新田、祈大御運子細事、

副進

行賢聖人當寺被寄進大念佛僧供田二季彼岸佛聖燈油日吉祭田無盡米粢温釜等狀案

右、當寺者、獻鳳笛之貢御、學鷲王之教法、然而依爲無緣之巖崛、更無住侶之依怙、常變麋鹿之苑、屢爲狐狸之居、爰行賢聖者、憐佛寺之荒癈、傷僧徒之退散、被寄進上件新田等狀文分明也、不遑羅縷、自其以降、法燈鎭挑、僧徒繼踵、抑當御代宿因内動、護威外呈、社務重國務、堂上如花、神恩交朝恩、門前爲市、臺明寺又公家武家之貢御祈所、行賢聖人歸依之砌也、然者每仰彼古跡之嚴、盡望此新恩之忝、若所請有御許容、被寄進小新田者、齊代於先賢、留名於後世、於戲佛神廻眺、護御運之長久、衆徒合掌、祈現當之御願、仍勒子細、乍恐言上如件、

弘安十年八月　日　　臺明寺衆徒等

「口裏」「平山殿御社務時望新田申狀案」

「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中ニ一巻アリ」

884

「山田家文書」

『正文』

薩摩國御家人谷山郡司五郎資忠与當郡内山田・別符兩村地頭大隅式部太郎忠實（實字有憚）、子息二郎丸（宗久）代養父大隅五郎太郎久親法師（法名道知）相論条々、

一當郡内地頭屋敷事

右、如大宰少貳經資法師（法名淨惠）弘安三年十二月五日注進狀并所取進訴陳具書等者、子細雖多、所詮、資忠則於下地者、郡司進止也、地頭屋敷者、惣領土用熊丸讓得之畢、而稱二郎丸分、可構屋敷由令申之条、無其謂云云、如久親申者、地頭屋敷爲一所事者、地頭一人知行一郡之時事也、既分讓于子息等之上、無屋敷者、居于何所、可致所務沙汰哉云云者、地頭屋敷事、久親雖申子細、於下地者、郡司進止条無相論欤、至屋敷者、土

用熊丸爲惣領之間、讓得之畢、分讓村々於子息之刻、面々可構屋敷之由及訴訟之条、爲非據之旨、郡司所申非無其謂欤、仍地頭訴訟不及其沙汰矣、

一代官事

右、資忠則帯承元御下知狀、不可用數輩代官之由申之、久親不領主各別之時、補代官一人之際(条カ)、非制限之由申之、爰如資忠所進承元二年三月日御下知狀者、下嶋津庄地頭代等所仰条々事、一、地頭代補面々小代官之間、各依致非法、住民不安堵云云、事實者不便、早任先例、郡院一兩人之外、可停止也云々者、如彼狀者、代官一兩人者可令補由、被仰下畢、然則二郎丸代官一人非制限矣、

一殺害事

右、資忠則弘安元年十月十九日被殺害資忠下人藤太郎男畢、此條守護使泥屋左衞門尉・宮内左衞門次郎以下輩見知畢、可被行罪科云々、久親亦彼殺害事不實也、資忠令殺害地頭下人矢藤太男畢、爲塞自科、及濫訴之条、無謂云々者、地頭令殺害郡司下人之由訴申之處、至十一箇月、久親不及散狀、爲遁自科、郡司又有殺害科之旨、及不實濫訴之条釁謀也、地頭下人矢藤太男者、於當村沙汰人王平太入道倉、自身押殺之由申之者、地頭致殺害事、守護家人見知之由、郡司依令申、欲被尋問、亦守護人爲敵人由資忠申之、此上無指證據之間、資忠訴訟非沙汰之限欤、次郡司殺害地頭所從由事、爲承伏之由、久親雖申之、有所存者、即可申子細之處、經數十月之後、及陳狀之時、始申出之上、狼藉事、即相觸守護人之旨、久親申之、殺害事爲實事者、訴訟何可及遲々哉、云袷云恰、共以無指證據之間、不及沙汰矣、

一悪口事

右、資忠則爲恩顧仁之由、久親載訴狀畢、爲悪口之由申之、久親亦資忠先祖忠光得當郡代官職畢、何可爲悪口哉之旨申之、爰如久親所進忠光七月八日付延応二年狀者、谷山地頭御方御代官職事、如本所申請也、御代官職給天候波牟間波、別御忠仁代官一人立候天、時々者御送向申候天、番宿直勢佐勢可候、暫毛候天難過候波牟時者、申暇天可罷出候云々者、帯此狀久親申子細之處、爲案文之間、難被信用之由資忠申之、於正文者、惣領帯之、可被召出之由地頭雖稱之、如狀者、爲請所證文之由所見也、必難稱恩顧、地頭亦帯此狀申子細之条、非指過

言之間、同前、

一苅田狼藉事

右、資忠則苅田事、地頭承伏畢、可被行罪科之由申之、地頭亦御公事用途等、一向難澁之間、爲催促雖立點札、苅田事者不實也、名主一向押取地頭所務、致狼藉畢、可被行其科之由陳之者、立點札之由、久親承伏畢、可被行罪科之由、資忠雖申之、爲催促公事、一旦立點札欤、依此咎忽難被行罪科、於自今以後者、可令停止、又郡司押取地頭所務之由雖申之、無指證據之間、同前、

一久親父蒙御勘氣由、資忠構申不實由事

右、久親雖申子細、爲父被不孝之條、進證文畢、如彼狀者、以諏方入道申入子細之由、所見也、帶此狀資忠一旦申之欤、此條非指過言之上、相論之趣、頗無其詮欤、仍同前、

一所務事

右、郡司則地頭条々有罪科之間、任被定置之旨、可給別納御下文之由申之、地頭亦郡司犯其咎畢、可被付于地頭之旨陳之者、相互雖申子細、罪科事兩方所申無指實證之間、共以被弃置、此上守先例、可致所務沙汰矣、以前条々、依鎌倉殿仰、下知如件、

弘安十年十月三日　　前武藏守平朝臣(宣時)(花押)

相模守平朝臣(宣時)(花押)

『続目裏判二所ニ在之』(花押)　(花押)同

885

『水引執印文書』

つねみのれいりようのめむてんの事(常見)(例立用)

やまとのゐんのつのりあし七石五斗のうち、へふたゝの(山門)(院)(募足)(別府多田)

ふん、そうりやうのきりふにまかせて、八ふん一のそたうまい、いちねんのふん九斗三舛七合五夕にあひあたり候、しこんいこハ、まいねんニ、ミしむたいかんあるへからす、たゝしけんち三ねんよりこうあん十ねんまて、(建治)(弘安)

拾壹ヶ年かみしん貳石一舛七合候ニよて、上そニをよひ候といへとも、かつハしんもちそのをそれ候、かつハしやうさいハ、かり候あいた、このみしんニをきてハ、こんねんちうニけたいなくわきまへ候へし、かのめんてんニいたりてハ、しこんいこたいかんをいたすへからす、よてこ日のために、しやうくたんのことし、

弘安十一年五月廿一日　　別府多田名主代行蓮(花押)

886

「貞久公御譜中」

「校正了」

かハちのくにゝしのしまハ、道智せんそさうてんしりやうなり、むすめなゝこ(名ゝ)せんニゆつりたれとも、けんさいのはゝなれハ、ゆつりまいらせ候、たのさまたけなくちきやうすへきなり、(如円)

こうあん十一年六月十三日　道智在判

「右旧御番所御文書二番箱中、御外祖御譲状一巻中ニ正文在リ」

（表紙）

忠宗公　自正應元年
貞久公　至永仁六年

前編舊記雜錄　卷九

「國史」

正應元年戊子、是年四月改元正応、自三月以前猶是弘安十一年、夏四月二十八日改元、拠大日本史、

二年己丑秋九月、北條貞時廢惟康親王、冬十月、立久明親王爲征夷大將軍、拠大日本史、将軍家譜、

三年庚寅、四年辛卯、凡二年、事缺不書、

【正応】五年壬辰冬十二月二十一日、公賜冠嶽別當住僧等書曰、關東教書至、使薩摩國一宮・國分寺及諸寺社壓勝異國者、茲特告示、拠道義公旧譜、冠嶽在串木野、有三州権現祠、一宮猶云第一位宮、蓋謂神社之最尊者、聖武帝時詔天下、每州立国分寺、薩摩水引郷有国分寺、号護国山、大隅国分郷有国分寺、号太平山、並係聖武帝時所立、而日向国分不詳所在、蓋或在他国界中云、初阿多北方領主二階堂行久、以其女妻兄孫隱岐守行景、生隱岐守泰行、行久且死、以阿多北方爲行景妻湯沐邑、行景死、妻爲尼、法名忍照、行景之死、泰行尚幼、忍照尼相家事、當是時、北條氏當國專權、幕府故家遺族、往往因事獲罪、忍照尼以爲居於鎌倉非子孫計也、仍請携泰行如阿多北方、以備海防、許之、拠二階堂氏系図文書、二階堂行久為阿多北方地頭、見第三巻建長元年、

【□書固事□御教書正文正応六年三月廿一日□見于古目録】

永仁元年癸巳、是年八月改元永仁、自七月以前猶是正応六年、春忍照尼及泰行寔來而處北方、由是、二階堂氏遂爲薩州人、拠二階堂氏家譜、夏四月二十日、公賜新田宮執印氏書曰、關東教書至、使以劔一腰神馬一匹告禱一宮、壓勝異國者、因献劔及馬如命、君謹奉之、拠執印久馬文書、新田宮在薩州水引郷、諸家大概記、古者朝廷歲遣使者祭新田宮、号執印職、其後以鹿児島藤内康友為執印職、世領其事、因以為氏、康友二子、長曰康兼為父後、少曰友久為国分氏、按此時執印氏与開門社祝官争一宮、未決、公以新田宮多近例故、献劔及馬、其記見公書中、秋八月五日改元、拠大日本史、

二年甲子至四年丙申、凡三年、事缺不書、

【永仁】五年丁酉、北条貞時・宣時、永仁五年十二月十日、遣上総前司書曰、忍照尼請令其子泰行如関東、幕府許焉、先史載此書於是年、蓋以上総前司為公也、按道義公旧譜、公初任下野守後任上総介、有前上総介永仁六年四月六日遣下野守殿書、永仁七年鎮西引附、称金沢上総前司代一番島津下野守忠□、下野守皆謂公也、則是年尚称下野守明矣、大日本史久明親王傳、永仁四年以北条實政為鎮西探題、諸家大系図、北条實政称金沢上総介、則是年書云上総前司、乃北条實政也、若以為公則謬矣、若以為實政、則此書与公有何交渉、故删之、而書其説於此云、

六年戊戌秋七月二十二日、
伏見天皇傳位於
後伏見天皇、拠大日本史、

888

「原本志布志士人鹿屋權兵衛兼治藏書」

島津御庄官等謹言上
欲且依代〻　政所御下知、并庄号以後二百六十餘歳不
勤例、大隅國　正八幡宮御造營當本庄不勤子細、
副進
一通　普賢寺禪定殿下政所御下文案、承元二年九月日
狀云、於無舊記者、神人等今案計也、舊跡之外可令停
本庄新儀支配云云、
一通　同政所御下文案建暦三年六月廿七日狀趣、以同前、此外貞
應二・嘉祿三・正嘉・弘長年間御下文御教書等數通、
又弘安元年十二月廿八日狀、云造正八幡宮島津本庄役
事、
一通　同二年六月九日同断、
一巻　當御庄寺社繪圖、
一巻　同年中行事、
右、謹考故實、正八幡宮御垂跡者、和銅年中、正殿已下
社屋不残一宇、被支配三州圖田日向大隅薩摩之間、既五百余歳
御造營、敢所無相違、島津本庄者、萬壽年中、以無主荒
野之地、令開發庄号、令寄進　宇治関白家以降、長元年
中奉崇伊勢太神宮依神告号神柱、宇佐八幡、庄号以後二百餘歳
者、彼寺社造營之外、無余事之處、神官等建仁三年始雖
掠賜宣旨御庄官、以下略、
於當本庄圖田之跡、爲無主荒野開發地之間、停止新儀、
以下略、
右正應元年之言上狀欽、「季安按此十字、後人所追書也、自万寿三年至正応元年為二百六十三年、自長元元年為二百六十一年、則拠荘号以後二百六十余歳云、以書之可推知也」
（本文書、季安自筆写「博採堂」ノ罫紙ニ記ス、後出八九三号文書ノ抄出ナリ）

889

「管窺愚考附録中ニアリ」

右の原本は、志布志士人鹿屋權兵衛兼治か藏書にて、前
に載せし慈鎮和尚か愚管抄に、宇治殿の時、一の所の御
領〳〵とのミいひて、庄園諸國にミちてとあるに、能く
符合せしにて、考ふれは、島津の御荘の開發を述たる古
證、此文書より善きものを、季安いまた外に見當らす、
故三巻の中にて、屢荘官上疏と引用るも、皆是なり、此
を鹿屋か家藏せしを考るに、肝属兼石が三男宗兼、父の

讓りを承け、鹿屋院の弁濟使と爲りて分族し、またその姉婿觀阿より、男なしとて三俣を傳られ、此と併せけるよし、系圖に在り、然あれと、觀阿も、鹿屋の弁濟使に還補せしこと、永仁四年の執達狀にあれは、觀阿より受たるそ近からめ、さありて正應元年は、永仁より九年まへなれは、右の文書に謂へる御庄官も、觀阿等に當なるへし、のちに宗兼その姉より憎まれて、鹿屋のミを領して、家号とせり、それより三俣は、姪乃八郎兼重に讓りて、高城にをり、三俣殿と呼ること、鹿屋系圖をよひ聖榮自記等ニあり、永仁より四十四年を經て、暦應二年の八月に至り、畠山直顯に攻られて落城し、それより五十年ほとすき、嘉慶二年に至り、また鹿屋周防守忠兼に、恕翁公より、當院の長田を舊封とて下されたり、忠兼は宗兼か曽孫にて、　公の惣奉行（即今御家老）　なり、老て玄兼と更む、所著の自記あり、後に載す、此書も彼家に遺れるならん、

890

「仝」

一愚管抄云、延久の記錄所とて始て置れたりけるハ、諸國七道の所領の宣旨官符もなくして公田をかすむる事、一天四海の巨害なりと、聞食つめて有けるか、（此ハ東宮と坐しほとの事を申せり、聞食つめてと云へるを、深く思ふへし、）すなはち宇治殿の時、一の所の御領〳〵とのみいひて、庄園諸國にみちて受領のつとめ堪かたしなど云を、聞し食し持たりけるにこそ、さて宣旨を下されて、諸人の領知の庄園の文書を召れけるに云云といひ、（此に文書と有は、風土記なるへく所思たり、）

891

「仝」

一愚管抄にいえる宇治殿の時、一の所の御領〳〵とのミいひて、庄園諸國にミちて國〻のつとめ堪かたしなと云へる、當時の威權をよく〳〵おもひ知りて、鹿屋氏に藏めたる島津御庄官等か島津本庄者、萬壽年中に、主も無き荒野を開發せしめ、庄号をつけて宇治関白家に寄進せしと、言上しける狀を併せ觀れは、今庄内の郡本あたりに開墾して、延喜の頃より、驛に立たる地名の島津を其庄号となし、世〻近衞家の家領にて、彼殿下より知行せらるゝ庄園となりしには疑ひなし、よて左ニ表章す、併せ考へきなり、

892

「参考」

一自和銅元年至萬壽元年三百十七年、又自和銅元年至正應元年五百八十一年、

一基通公六世祖宇治攝政關白賴道(通)公、則萬壽元年當三十三歳之時也、自萬壽元年至正應元年二百六十五年、而萬壽五年七月十五日爲長元元年、自其至建仁三年百七十六年、

○道長 太政大臣 摂政 従一位 号御堂殿

賴通 号宇治殿

正暦三壬辰誕生、寛仁元・三・四任内大臣、同十六日攝政詔、同日得長者、同廿三日辞大將、賜左近衛府生各一人、爲隨身輦車、寛仁二・四・廿二上表不許、同三年十・廿一上表不許、同十・二・廿二日又上表、上攝政關白、同廿八日宣旨、官奏辰事以攝政儀令降行者、同四年七・十九日上表不許、同五年正・七叙從一位、同年八・十宣下太政大臣、寛徳二年正月十六牛車、康平二・二・十一上表并兵仗、同年重上表辞大臣、無勅答、同七月十五表辞大臣、以男師實卿任内大臣、治暦四年三・廿三依病上表、辞退政、同年四月十七勅答、延久四・四・廿九出家、權

律師長茨爲戒師、法名蓮覺改寂覺、延久六年二・二薨、八十二、

師實 太政大臣 号京極殿 摂政 従一

師通 内大臣 関白 従一 号二条殿

忠實 太政大臣 号知足院殿 摂政 従一

忠通 太政大臣 摂政 従一 号法性寺殿

近衛院 基實 摂政 従一 太政大臣 号六条

基通 号普賢寺

治承三年十一月十三日任大臣關白、四年二月廿二日改關白爲攝政、四月廿二日從一位、壽永二年四月廿七日上表、辞内舎人隨身、八月廿五日又爲攝政、十月廿被停之、義仲故也、三年正月廿二日復攝政、十月十九日賜内舎人二人近衛等、文治二年三月十一日被止攝政并(氏長者)、、、牛車兵仗如元、同五年正月十一日爲攝政、建仁二年十一月廿五日止内覧、十二月廿五日止攝政、承元二年十月五日出家、法名行理、天福元年五月廿九日薨、七十四、

893 嶋津御庄官等謹言上

欲且依代々政所御下知、并庄号以後二百六十餘歳不勤

例、且任　院宣関東御教書旨、被經御奏聞、被下　綸旨、令言上関東、被究淵底、永被停止神官等新儀濫訴、大隅國正八幡宮御造營、當本庄不勤子細事、

副進

一通　普賢寺禪定殿下政所御下文案、［基通］［戊辰］［忠久公御代］承元二年九月日

狀云、於無舊記者、神人等今案計也、舊跡之外、可令停本庄新儀支配云云、

一通　同政所御下文案、［基道］［忠久公御代］建暦三年六月廿七日［癸酉］

狀趣以同前、

一通　同政所御下文、［基道］貞応二年八月日［癸未］

狀云、於本庄者、可依先例、且任度々證文等、停止宇佐宮作析催云云、

一通　將軍家御教書案、嘉祿三年八月十四日

狀云、造宇佐宮用途、日向國役大概懈怠之由注申之間、守護人遣別使尋沙汰之處、注進狀案如此、此内穗北郷・鹿野田郷・國富庄事者、直被遣御教書畢、於島津本庄者、帯禪定殿下政所御下文不勤云云、非沙汰人之懈怠欤云云、［基通］

一通　遷宮宣旨案、貞応元年社家被下之、

一通　岡屋殿政所下文案、［兼経也基通ノ孫］正嘉元年十月日［丁巳］

狀云、可早依先例、且任承元・建暦［二年九月］［三年六月廿七日］兩度政所下文、停止彼新儀正八幡宮造營役事云云、

一通　関東御教書案、弘長元年四月十八日

狀云、不及関東御沙汰之由、可申之旨所候也云云、

一通　同御教書案、同二年八月十二日　狀云、造正八幡宮嶋津本庄役事、先度被下院宣之時、任宣下狀、可致沙汰之由、被加下知之處、近衛殿御文（副庄官等申狀二通畢）、如此之事、何様可候哉之由、可令申入富小路殿云云、

一通　六波羅殿御奏聞狀案、同年十月四日

狀云、造正八幡宮嶋津本庄役事、就去八月十二日関東御教書、先度申入候畢、其間子細、以幸澄・清継令言上候、以此旨、可有御披露候云云、

一通　正八幡宮神官等奏聞狀案、建仁三年九月日

狀云、先神官等造營役、嶋津庄爲先例之由、全不經奏聞云云、

一通　院宣案、弘安元年十二月廿八日

狀云、造正八幡宮嶋津本庄役事、雜掌解奏聞之處、彼造營并未（木カ）作事、自関東被仰付、賴泰其沙汰候、所詮、件役本庄無勤仕之例者、直可被觸仰関東候、定

被尋究欠之由、御氣色所候也云々、

一通　院宣案、同二年六月九日

狀云、造正八幡宮嶋津本庄役事、武家所進関東狀案如此、此事以御使、可被仰関東之由被申候、彼左右何様候哉之由、御氣色所候也云々、

一巻　當御庄寺社繪圖、

一巻　同年中行中、（事カ）

右、謹考故實、　正八幡宮御垂跡者、和銅年中、正殿已下社屋不残一宇、被支配三州圖田（日向大隅薩摩）之間、既五百余歳、御造營敢所無相違也、嶋津本庄者、萬壽年中以無主荒野之地、令開發、庄号令寄進　宇治関白家以降、長元年中、奉崇伊勢太神宮（依神告号神柱）、宇佐八幡已下五社爲鎮守、令建立七堂伽藍、稱其題額於常樂寺、此外諸寺諸山御願寺其數惟多、仍公町分五六者、被宛行供料免田、天長地久之御願薫修畢、舊靈驗弥新、安置本尊者無雙靈佛、擬有世上子細之時者、自佛身流汗、示奇特之瑞相事、自昔于今無退轉、御祈禱之次第、具于年中行事、庄号以後二百餘歳者、彼寺社造營之外全無余事之處、神官等建仁三年始雖掠賜　宣旨、御庄官依申披不勤之子細、普賢寺禪定殿下御時、可早任先例、止新儀之由、承元・建暦兩度御下知嚴重也、隨至神社者、舊例爲先事　公家武家御沙汰一同也、凡數百歳本役難遁之間、神官等任先例令造畢、貞應元年九月九日被下遷宮宣旨、速被遂其節畢、此上者不及子細之處、建長五年堂社炎上之時、立彼不勤宣旨於根元、構謀案、掠給　宣旨之間、正嘉年中、令言上岡屋禪定殿下政所之日、任承元・建暦兩度御下文之旨、可停止新儀之由、被成下御下知畢、爲本所被知食往古之先規故也、而神官等重申成　宣旨、及種々濫吹之間、賜本所御教書、御庄官令言上関東之處、如弘長元年四月十日御返事者、不及関東御沙汰云々、而付神官等訴、同二年二月雖被成御施行、御庄官等参関東依申披之、同年八月十二日改先御施行、見于嚴重御教書、其子細六波羅殿御奏聞狀明白之間、成庄家安堵之處、社家訴謀之餘、猶以依致濫訴、重賜本所御教書、令言上関東之時、如建治元年七月廿日御返事者、宜在聖断之由、先年言上畢、仍不及関東沙汰云々、付之被經　奏聞之處、弘安元年十二月廿八日　院宣云、本庄無勤仕之例者、直可被觸仰関東候、定被尋究欠之由、御氣色所候也云云、本所雜掌令申入関東之處、此院宣者、本所御返事也、對関東不給之間、御沙汰可爲何様哉之由、奉行人矢野玄蕃令申之處、同二年六月九日院宣云、造正

八幡宮本庄役事、武家所進関東狀案如此、此事以御使可被仰関東之由被申候き、彼左右何様候哉之由、御氣色候也云云、此條公家者依本所之御執達、被聞食披之間、可被尋究之由、勅定嚴密也、武家者對関東不被下院宣者、難及御沙汰之由被仰出之、其後無殊子細之間、雜掌自然送年月之處、大友兵庫入道補官使職依掠申之、自関東令執申給之間、正應元年七月廿一日本所御下文云、造正八幡宮嶋津本庄役事、相尋之處、無勤仕例之由、庄家雖訴申、武家度々執申之上者、早可下知之旨(脱アルカ)一乘院僧正候畢云云、庄家之理訴、不勤之次第、雖爲顯然、関東之御計難被黙止之間、及御下知□、雖然、庄家之愁訴猶敢不令休止之處、自去五月十日至于同廿日、大友使并官使等引率百余人、大勢兩度令入庄、及種々苛(賃カ)□条、庄家之牢籠難廻時日乎、凡役所有限課役無增減、隨件御供所者、無本庄一度造勤之上、漏今度之炎上早、當時現存之上者、眼前之横法也、抑當御庄之鎮守伽藍者、歳霜相積、朽損及大破之間、令言上子細於兩御方(本所地頭)御造營最中之處、去年十一月廿四日依不慮之難、若宮八幡宮御炎上畢、世及澆季、庄家之力衰、難合期之間、令注進事由之處、剩以彼本役所、始而於被付隅州正八幡宮者、莫大伽藍、數百歳靈神靈社、速疾之破滅無疑、公(家脱カ)武家爭可不被垂御哀憐哉、謹案事情、大菩薩者、忝示御誓於正直、爰神官等背神意令隠密、五百余歳之本役所、令新儀濫訴之条、更難協冥慮、且難澁自役、且貪利潤爲渡世、所秘計也、其上可停止官使入部之由、雖被下院宣、無御還宮之裡者、稱可入部、背勅命、官使已下國使等乱入三州役所、号例錄引出物并大雜事小雜事、責取重輕(マヽ)、其外稱別雜事、鳥追等成□道断之次第也、而御領□郡(寄カ)□所者、依□役之間、領家御加地子米一段加一斗二升、地頭□於一圓本庄者、御加地子米段別四斗・加徴米一斗、□其□色數濟物等□也、而今於被相懸新儀之造營者、無止領忽令荒廢、若干神社佛寺破滅、御庄官・庄民令逐電、至無物于取喻、云本所、云地頭、尤可有御計者乎、就中袖(神)如建(官脱カ)仁三年申狀者、彼造營嶋津庄爲先例之由全奏聞、依本社宇佐宮之例、可被支配之由云々、件(宮カ)□九州二島課役、正八幡宮者三州所役也、於當本庄圖田之跡、爲無主荒野開發地之間、停止新儀、可任先普賢寺禪定殿下政所御下文、被守先規之上、嘉祿(本マヽ)十八日関東御教書、無御奇(弁カ)置本所政所御下文之条、仍庄号以後數百歳、于今不勤仕之、本社之例如此、所詮、神不禀非禮、然則、御庄家之不勤与社家

□尤有御明察憲政、早被垂遺迹、且任度々院宣并御下文、且依庄号以後數百歳不勤之例、被經御綸旨、令言上于関東□□□停止神官等非分之□□（濫訴者、弥カ）奉□□致天長地久之御祈禱□主□（庄カ）

肆拾□肆□

□應四年鹿屋院地頭新儀外□条々申狀案、（正カ）（元カ）

「此文書、万寿中、長元年中ノコトアリ、此ニ入レテ考ニ供ス、島津庄ノコト参照スヘシ」

894の1

黄門白石問答

新井筑後守源君美　問

野宮前黄門藤定基　答

庄園、庄と申もの古にハ聞へ不申候、中比より相聞へ候て、庄官・庄司なとゝ申もの、別當を置なとゝ申候事相聞へ候、東鑑の中、こゝかしこに庄名多く見ゑ、當時諸國に庄と申もの散在仕候、郡にもあらす、郷にもあらす、其地界も今ハたしかならす候、昔庄と申もの、出來たることの起り如何御座候哉、答、是ハ今知行所と申す、其起りに候、庄ハ俗字にて荘字にて候、韻會に舍也と、又正字通にも唐崔群知貢擧歸、妻乘間令置田、群曰、我荘三十所と、園ハ説文に所以樹菓也、今案に、荘園と申候ハ、其始め人の讓たるか、又私に買得たる地も有之候、以不封地賜田稱荘園、さるによりて、新立荘園なとゝ申候、末の世に給ふ事を得候へとも、先王の法にあらす候、故ニ地ハ廣けれとも、俗に下やしき畠屋鋪なとゝ申こゝろにて、庄園と申候、此起りにて申すなり、事長〳〵しく、まつあらまし申入候、我邦上古の王制、李唐均租調之法也、以戸計口、以口班田、戸とハ一軒の家にて、一軒に主人以下子弟奴婢十人なれハ十口と立て申、一口に付田を賜り、男ハ田二段、女ハ減三分之一、一段の田に稲五十束を得申、束を舂て五升を得るの由、令義解に見へ候、されハ尊は太政大臣、卑ハ奴婢ニ而も、おしなへて口分田を受け申候、口分の租ハ一段に二束二把を出して、男ハ九十五束余を一人の養に給り候、是によりて上下貧富ひとしく、その中尊は用途ひろきゆゑ、位田・封戸等の品を立てゝ不足なき様に設け置るゝ大法にて、其位田・職田等も、封戸とてもミな一段二束二把の租を出し申候、位田とは五位以上、位階に依て田を給り候、令に正一位十町と此類にて候、職田ハ大納言以上は職重きゆゑ、別に又田を賜り候、令に職分田太政大臣四

十町と有之類に候、封戸とハ太政大臣封戸千五百戸と申す類に候、前に申候千五百軒を給るにて候、封ハ封地封國の字の意に候、如此なれハ、上ハ節倹にして用足り、下ハ豊饒にても暴富驕奢なく、國治り俗うるハしく候、此外に賜田と申ものハ、是ハ令曰、凡別勅賜人田者、名賜田と、この田ハ后妃湯沐の料、功臣報勞の田にて候、令所謂大功世不絶、上功傳三世なと有之、皆その限り有之、かの位田・職田もその身薨卒の上ハ返還申候て收公す、口分も死没して收公す、又あとより出生出身にて班給す、仍て班田の法ハ六年一班と令に見ゑ候、又輸地子田と申もの有之、しかるに是ハ公私雜用の外多く余りたる田にて、是を民に授て耕作して其租を擧るなり、この法ハ毎國品差不同候、これ延喜の定にて、この田も六年に一度返進す、か様なれハ、實に六十六州錐を立る程も主田ハ無之候、凡王制の法は、殊の外上苦むゆへ、おのつから政ゆるまり、班田の法も怠かちになり候、かの后妃湯沐の料を外家に讓り給り、功田ハ子孫寺に施入す、惠美押勝大職冠の功田を以て、山階寺維摩會料に施入する事國史に見得候、かの后妃湯沐の料の外家へ授け申てハ、湯沐の所とハ稱しかたく候、功田も施入の後ハ、寺にて功田とハ申されぬゆへ、かの畠やしきと申すやうの意にて、是を庄園と名けて後〻ひろくなりて、剰へ庄園多くもちてハ富有なれハ、近隣の荘園を買得て、彼是兼あハすゆゑ、富ハ益富ミ、貧ハ益貧にして、豪民恣に買得て、豪民國〳〵に出來候、末世の事なれとも、伊藤祐親くすミ・河津の荘持候も是なり、一端の例ニ申候、かやうなれハ、下民奢申候故、後朱雀院寛徳年中に新立の荘園停廢の宣下有之候、ゆゑハ、無富民の由なり、後三條院延久の初政に、記錄所を置るゝもこの停廢のこと第一の義なり、其後代〳〵の聖王も、政の第一ハこの事のミなれとも、跡〳〵より止ミ不申候、これを申せば、下官先祖の事をそしり申候ニ似候得共、下官か先祖ばかりにもあらす、多くの人のことにて候、往昔執政大臣もとかく田地を貪るゆゑ、辞にハ被停廢の事を申せとも、忽ニ失損ある事なれハ、何かにことつけて、この庄園をはなち不申候、しかのミならす、尚新立を企申候、延久より長承までハ六十年許にて、知足院関白宗忠公に談せらるゝ事、中右記に見へ申候、此より甚しきハ、後〳〵の人主停廢のこと宣下せられなから、御讓位の後ハ院の御領と稱せられて、定れる御封の外ニ田園を貯へられ、剰

へ崩御の後、遺命を以て男女親王にわかち給り、得寵の女房・常侍(掌カ)女官等に分ち下され、是を院の御所分と申候、ヶ様なれハ、庄園常になりて爭論出來候よし舊記ニ見へ申候、元久の比、京極黄門定家卿の所領、江州吉田庄を三位局に掠られ、度〳〵訴詔に及候事、明月記に見へ候、如此風俗になれハ、私領と申候こといよ〳〵盛ニなり申候、義家朝臣、武衡・家衡を擊て三ヶ年戰ひ、勝利を得られ、勢に乘て東國の豪民を麾下に招かれ、御家人を建らる、義朝平治逆乱も是よりひゝきたると被存候、賴朝卿流人にて兵を起さるゝも、時政の類、三浦一黨、かの豪民御家人にて是を助けなし申候、されハ寛德・延久の政に、つとめて庄園停廢のこと申候ハ、誠ニ後代の弊を思ひはかる處遠く深く、恐なから存候事ハ、このゆゑニ庄園ハ私領なれハ、郡にもあらす、郷にもあらす、ひたすらに買得れハ境界の定もなきものニ候、或ハ庄園主人もなくおとろへ、子孫斷絶なれハ、つぶれ申候なり、又ハ往昔は富て貯へ置くも、貧になりおとろへ申て、何となく在名になりたるものニ候、さて庄園ハ私領にてハ國法にもかゝわらす自由ニ働申、是を戒るに名をかして賴朝卿地頭を置かれ、遂ニ六十余州を手に入られ、かの庄園の内の土も土産も、皆其領主ニ受納し、其奉行人を莊司・庄官・別當なとゝ申候て、私に召置ものニ候、此趣諸記雜集の旨を以て見れハ、僅にかやうニ見へ申候、御厨、當時も諸國ニ御厨と申地名散在仕候、是ハ神戸なとゝ申候如く、伊勢・加茂等の神領たる様ニ申ならハし候、如何御座候哉、

答、庖厨の意にて、御贄を奉る所か、伊勢太神宮ハ我か宗廟にて各別の事ゆへ、昔ハ六十余州ニ一所ツゝ神宮御厨とて被置候、賀茂も御厨を被置て所〻ニ有之候得共、神宮のことく被置事無之候、是宗廟社稷の差別たるへく存候、御厨も神領なれ共、神戸と申す時ハ租税之方にて、御厨ハ御贄の方に候、神社にかきらす諸司ニ厨町と申す事、拾芥抄に見ゑ候、是もその司〳〵の官人の酒食を設る所ニ候、

別當・勾當、此二ツハ如何分ち心得可申候哉、

答、別當・勾當同しやうなる事にて、假令ハ賀茂・春日にてハ神主と申候を、御靈今宮にてハ別當と申候、此類も序なから申候、少しむづかしき別當有之候、齋藤別當實盛なり、此別當を人毎に不審申す事候、是ハ秘説有之由、下官常〻申候事ニ候、かの實盛は魚名公の子孫に

て、かの孫にハ齋藤・安藤・近藤と申四十八藤有之由申候なり、然るに、實盛ハ小松内府の家人にて、かの内府の庄園武藏の長井の庄の別當になりたるにて候、是を本義に申せは、長井庄別當藤原實盛なり、職に氏をそゑて申すゆゑ、齋藤別當なと申候、かの實盛の譜にも、實盛もと越前のものにて候ひしを、近年御領に被附て、武藏の長井に居住仕て候と有之にて分明に聞へ候、一笑〳〵、此外前後ヶ条略于此、

以上管見之至、僻案可有之候得共、愚存之趣聊書付申候、難被信用候欤、返〻赤面ニ候、

野宮前中納言

新井筑後守殿

894の2

「伊地知季安問答文中朱書左の如し」

按、長承ハ四年ニ改元アリテ保延トナル、保延年中ヨリ島津庄ニ新立庄七百六十町立タルコト建久の圖田帳ニ見ヘレハ、知足院関白ヨリ談せられしと云ふ事は、必す嶋津庄に尚新立庄を企られし時の談合にそあるへけれハ、此ニ云ふ中右記をハ、山〳〵尋見まほしき物なり、決して七百六十町の新立したる來由も明白ならんと、此に標識しおく、按、此實盛の事にて考ふれは、秩父武綱か父武基を秩父別當と書き、畠山重忠の父重能を畠山庄司と書きたるも長井庄と同し例にて、秩父も畠山も誰ぞの私領庄園の別當庄官たる事ハいよ〳〵疑ひなし、然あるうへ、重忠、近衛家より其私領島津庄なとに御下向ども、取はからハせ給ふ、

忠久公の御加冠なと勤めたる事とも考合すれハ、重忠ハそも〳〵近衛家の庄官ならんとおもわるゝ事なり、何そ古語無之ニもあらさるべし、博く考ふる人もあれがしと、かく標註する事也、

以上問答、島津御庄ノ引證ノ爲、補入し置也、

895

『比志嶋氏家蔵』

『ウラニ』

「重追進状具書二」

篤秀重代相傳領薩摩國滿家院内郡山中俣以下六箇村下地事、就于惣地頭方訴訟、雖及數遍訴陳、相互令存隱便儀、奉和与事、

一郡司得分米伍拾石事、院内村〻配分狀在之、任彼狀可致其弁、但自今年件米可弁之矣、

一七箇所請析小袖三兩可奉弁之、

一厚智寺巻誦用途參貫文可奉弁之、
一塚田・蒲原事、
右、件所〻者、奉辞地頭方畢、此外於自余村〻者、任
先例、相互不可申違乱候、仍和与之狀如件、
正應元年六月七日　　藤原(税所)篤秀在判

896
『正文在水引權執印』
「□裏ニ
□木野後家如阿申　正応□」
(串)

薩摩國御家人串木野太郎忠行後家尼如阿謹言
欲早任度〻院宣・國宣・大府宣・大宰府宣以下代〻□
□且被停止當國新田宮所司神官等濫訴、如元□
庸莚、且被召決雑掌程、被止當時平(苛カ)責子細事、
右、當村御年貢者、大宰府尊崇十五社神事法會之□用
途也、謂之庸莚、爰代〻院宣・國宣・大府宣・府施行
□也、仍彼具書等先日備進之、則所被召置于御奉行所
也、□掌擬被糺明是非之處、彼雑掌依謀書執筆之咎、
被□令延引之刻、執印所司等、稱掠賜當所御奉書、御
代□被苛責之條、無術之次第也、縦雖爲理運、飢饉之
上、爲□其苛責者政道也、何況於當村者、爲庸莚析所
之間、院宣嚴重也、隨而如雑掌所帯院宣案者、未賜國
宣、不□(ママ)自閑所令申出欤、云彼云此、爭可被致理不盡
之責哉、且任先例、且任證文之旨、被召決雑掌之程者、
欲被止御苛責之、言上如件、
正應元年六月　日

897
『入來院氏臣岡元氏文書』

可令早平重(渋谷)村領知相模國吉田庄上深谷郷内田在家、美
作國河會郷内亀石土師谷兩村、薩摩國入來院内副田村
已上名字
堺載讓狀、事、
右、任舎兄重継弘安九年六月八日避狀、可令領掌之狀、
依仰下知如件、
正應元年六月廿七日
【関東執權大仏宣時】
前武藏守平朝臣(花押)
【北条貞時】
相模守平朝臣(花押)

898
『入來院氏臣岡元氏文書』
「あんとの御下文あん」
(本文書ハ八九七号文書ノ案文ニツキ省略ス)

899
『頂峯院文書』

狀欤、奉祈禱聖朝外朝天長地久、殊國吏在廳官人等安穩泰平也、永止國衙之煩、以榮英之流、至于將來、無向後違乱、可令師資相承也、綺也、佛事也、後司爭令後悔哉、仍奉免如件、

正應元年六月廿八日　　左衛門尉源在判『本書モ在判トアリ』

永仁貳年正月　日

從五位下行河内權守平朝臣重郷『高城氏』法名本佛

900

『正本在水引權執印』

[第六]新田宮雜掌申當宮造營用途事、重訴狀具書如此、子細見狀、所詮、止歸國之儀、可被終沙汰之篇候、仍執達如件、

正應元年七月廿五日　　本佛在判

鹿兒嶋郡司矢上弥五郎殿

901

[第七]新田宮雜掌申當社御造營用途、國□正税物事、重訴狀副具書、如此、如狀者、背六ヶ度召文、不及參決云々、此条太自由也、所詮、今月十八日以前、可被參對、若猶無參決者、就難澁篇、可被裁許候、仍執達如件、

[正應元]八月十五日　　本佛在判

鹿兒嶋西方郡司弥五郎殿

902

『肝付兼石譜中』

正應元年戊子、初幕府以名越尾張前司入道道鑒、爲肝属郡地頭職、疑此時章見上建治二年、地頭尾張守殿亦蓋同人也、按大系図、時章称名越尾張守、前此二十六年、弘長三年入道名見西云、然拠將軍譜、見西則其子尾張守公時法名也、公時前此十七年、被殺於文永九年、又時章兄曰北条越後守光時、後此十三年、正安二年六月入道名蓮智、其年七月探題於鎮西、拠此等、則此云尾張前司入道道鑒必時章也、大系図以時章為見西、疑公時之誤爾、而公時子美作守時家書云、当院惣地頭名越尾張孫次郎殿亦疑高家子高邦小字也、大系図則高邦為名越尾張左近將監、而無孫次郎時家、為名越兵庫介、而無美作守、蓋此疏漏也爾、道鑒乃使左衛門尉信行肥後氏古系図、肥後守信基三男藤内左衛門信行疑即此人、爲地頭代、以景行等爲代官職、莅而治之、當是時也、兼石老矣、子兼藤代父攝辨濟使職、與景行等犬牙接堺、各掌其職、而景行等爲人貪戾、蔑法虐民、民至困窮、兼石・兼藤屢諭以法、不從、乃諮談議所、決之是非、景行等却逞凶虐、於是兼藤以聞宰府、是年四月朔日、宰府少貳命地頭代等、停其非法、且報兼藤等曰、既或犯罪必告守護、以隨其法、至如罪人、非談議所所得知也、既而景行等猶不自新、故兼藤又聞宰府、七月二十九日、宰府沙弥疑是少貳、致地頭信行等書、令各守汝職、輯寧郡民、勿貪虐民以利於己、其書曰、

903

『古本末吉人検見崎權右衛門家蔵』

嶋津庄大隅方肝付郡弁濟使兼石代子息兼藤申、背関東度

〻御教書、宛催臨時役、押取百姓身代、致刈田狼藉由事、三ヶ度相觸之處、不及是非散狀上、致訴訟於談議所、重押取身代、令押領所帯等、結句被追出住宅之由、兼藤就訴申、先可令安堵之由、去四月一日相觸之處、不被叙用云〻、爰被上府彼兼藤日、犯科子細之旨、雖被申之、於犯過事者、不及談議所沙汰之間、於守護方可致沙汰之由、令問答畢、所詮、度〻觸申之處、終以無陳狀上、沙汰最中、重押取身代、追出住宅之条、無其謂、然者、先令安堵本職并住宅、可被糺返損物、猶以不被叙用者、載其子細、可注進候、仍執達如件、

正應元年七月廿九日　　沙弥（少弐経資）御判

肝付郡地頭殿

904

「國分宮内澤氏蔵」

宛補　検断具官職事

田所検校永兼

右以人、補任彼職如件、

正應元年十月二日

905

『國分寺文書』

勲功配分狀

弘安四年蒙古合戰勲功賞筑前國早良郡七限郷地頭職配分事

一人薩摩國分寺留守備後次郎友兼「筑前先生ト系図ニアリ」

田地参町

當郷内

上ムギ一所　七段半内六段六十歩西依

下ムギ一所　九段

道下一所　貳段

上ギノ田一所　八段

一所　一丁内四段東依

屋敷二箇所

七限郷内

一宇行貞

三奈木庄冨永名内

得四郎跡

一宇弁宦

白地六段

長淵庄内

七保

一所一段二丈中　太郎丸
一所三段　　同
一所一段二丈中（元二丈内南依）八段坪
右、就孔子配分如此、有限佛神事本所年貢、守先例、不可有懈怠狀如件、
正應元年十月三日　　（少弐経資）沙弥在判

906

『入來院氏文書』

弘安四年蒙古合戰勲功賞筑前國早良郡比伊郷地頭職配分事

一人澁谷平四郎有重法師跡（孫子亀王・亀鶴、養子平次・公重法師後家）

田地拾町

行武名
横枕
一所一反半
松本
一所九反
薗
一所九十歩
月田
一所三反
下河原田
一所二反大
柿田
一所一丁一反
坂本
一所五反半
タウシタ
一所二反大
打越北
一所半
打越
一所三反
同上
一所五十歩
今山入道薗
一所六十歩
若國名内
打越
一所三反
同上
一所三百歩
フル道
一所小
ヤカタカ浦
一所四反
同上
一所一反小
ナソエ
一所半
キヘナ
一所二反
カキソイ
一所半
門田
一所二反
河原田
一所三反
坂本
一所六反
フル河
一所小
フツ原
一所六十歩
墓本
一所一反小

ツカミカト
一所一丁三反
中ヲサ田
一所八反
石崎
一所三反
春田
一所二反小
西大手田
一所三反
麦田
一所三反
柳田
一所八反半内二反三百歩東依
屋敷四ヶ所
行武名内
一宇　惣検校入道
一宇　六郎
長淵庄内
弥藤三
一宇　米光名
一宇　同名
畠地一所八段
若國名内
中嶋
一所四反
ヤカタカ浦
一所二反
長淵庄内
南田
一所七反一丈元八反内西依金丸
一所四反四丈元丁内東依元下河原
右、就孔子配分如此、有限佛神事本所年貢、守先例、不可有懈怠之狀如件、
正應元年十月三日
(少弐経資)
沙弥(花押)
(大友頼泰)
沙弥(花押)

907
『入來家臣武光氏文書』
(端裏書)
「七」
弘安四年蒙古合戰勲功賞筑前國早良郡七隈郷地頭職配分事
一人　薩摩國武光三郎師兼
田地参町
當郷内
下ハカマ
一所　七段大内六段西依
橋爪
一所　八段半
フチ田
一所　丁
クキ田
一所　八段小内五段半東依
屋敷二箇所
比伊郷上乙王丸名内

一宇　　蓮成房
三奈木庄井上名内
一宇　　弥平三
畠地六段
七隈郷内
武清一所　三段二丈
長淵庄内
セトロ一所　一段　安与
上座町一所　一段三丈元三段四丈内南依　冨光
右、就孔子配分如此、有限佛神事本所年貢、守先例、不可有懈怠之狀如件、
正應元年十月三日
沙弥（少弐経資）（花押）
沙弥（大友頼泰）（花押）

908　『頂峯院文書』
譲渡冠嶽靈山寺領寄田浦内塩入壹町事
出羽阿闍梨榮増所
合水田壹町内早田五段荒田五段者
右、於水田者、往古靈山領也、仍榮英彼塩入壹町於方々申立之處、雜掌用途於巨多榮増被助成之間、限永代所譲与也、然者停止万雜公事、至于子々孫々、無向違乱可被「後ノ字脱カ」領知也、但朝家御祈禱大般若經轉讀之時、一季春季僧饍料米許於可被備進當山別當也、爰彼水田仁於致違乱之輩者、不可令知行別當職、仍無自門他門之違乱、限永代可被領掌也、譲狀如件、
正應元年十月五日　冠嶽靈山別當榮英（花押）
僧榮海（花押）

909　『頂峯院文書』
權現領坪付
薩摩郡之内
大牟田　一町
數余木　一町
鵜田々　一町
右志趣、爲子孫繁昌也、
正應元年十二月　日　沙弥玄久（氏久）（花押）
『包紙』
謹上　冠嶽別當御坊　御中
（本文書、実ハ至徳元年十二月日ノ作成ナリ）

910

『入來院氏臣岡元氏文書』

（端裏書）

「尼壽阿置文案取要、弘安十（正）十一　正應元十月日平四郎入道跡」

（渡谷有重）

平四郎入道之あとのそりやう御公事等はいふんおき文の事

一河會郷内本郷中村・上山下村

公田四丁八段大十九歩内

（公重）

平次入道　一丁一反三百十分

（性覚）（重高）

せうくわん房　一丁三百九分

おくのこせん　一丁二反

たきのこせん　一丁四反

自余略之、取要、

一入來院内きよしきの北方ハ、平次入道・平三郎入道・せうくわん房ちきやうすへし、さかいハゆつり狀にみあたり、

取要、自余条々略之、

正應元年十月　日　　壽阿弥陀佛在判

911

「別紙置文安養寺寄進内」

（一野）

いちのゝハ、せうくわん房のふんにて候へし、かの所のとくふんのきぬいつゝハ、これの御堂分也、よてしやうくたんのことし、

弘安十年正月廿一日　　母尼判

912

下　細工所少（ママ）沙汰者宗弘所

可早任先例、致其沙汰、細工所少沙汰者并少（ママ）屋敷等事、右職、宗弘重代職云々、然者、任先例、可致其沙汰之狀如件、

正應元年十二月十一日

執印大法師（花押）

「此正文、在國分宮内澤氏」

913

『正文在水引權執印』

薩摩國八幡新田宮雜掌重言上

爲莫祢郡司入道覺也代行蓮、不相待御沙汰左右、令逃下間、任傍例、可蒙御成敗旨、訴申處、重雖被下日限召文、猶以不及參上、奉令違背御奉書上者、任先例、可遂検注由、欲蒙御成敗事、

副進　先度御奉書案

右、子細言上早、而行蓮令無音逃下之上者、任傍例、可蒙御成敗之處、重雖被下召文、猶以不及參對、日限以後、

既送數日畢、所詮、當院検注事、文永目錄分明也、然者早任院宣并先例、可遂検注之由、爲蒙御成敗、重言上如件、

正應二年二月　日

914

『池端文書』

ゆつりわたす、そく女まつこ[松]せんに、大すミのくにね[祢]

しめのミなミまたさ[佐沈]たのむらのうちのてんちやしきな[南]寝

らひに御くたしふミいけのせうもんらの事、

ミきのてんちやしきらのミやうしつ(名字)ほつけハ、ちかつな[親綱]

のわけしやうにミゑたり、しかるにか□(のカ)ちにおきてハ、

うちの女かちうたいさうてんしりやうなり、こゝにらう

せうふちやうのあいた、さやきてまつ御せんに、ゑいた

いをかきりて、しやうくんけの御くたしふミいけのせう

もんらをあひそへて、ゆつりわたすところなり、よてこ

日のためにゆつりしやうくたんのことし、

しやうおう[正応]二ねん二月十日

たけんへ[建部]のうちの女(花押)

915

『臺明寺文書』

奉寄進　臺明寺衆集院

　　噌吠郡須惠浦香剩(ママ)田貳段事

副進

　　證文四通

右、件田者、故臺葉御房之持佛堂香剩田也、但毎年二束宛、雖然相傳次第之間、覺胤領知之、爰當山温室勤仕之輩、夏間食物尤乏、仍五六七月殊難堪也、然者彼田所當米山舛三斗三十人仁各壹舛宛欲被下行之、依功被蒙三寶之感應、遂九品之往生而已、謹奉寄如件、

正應二年三月十五日

學頭兼別當法橋上人位覺胤(花押)

『口裏』「須恵香田寄進」

916

「蒲生士山内某文書」

薩摩郡内平礼石寺内事、任故大隅殿御免除狀、停止方々使者之濫妨、土民等可令安堵之狀如件、

正應貳年四月廿九日

沙弥性有(花押)

917

『正文在權執印』

八幡新田宮命婦建部氏女重言上

爲入來院清色内下村地頭代弥源次入道（不知実名）、令召籠無指誤氏女并神人守友間、依成神慮恐欤、乍令進宮氏女許、不遂行清祓、就不被糺返追捕物等、就訴申子細刻、雖被遣氏女申狀彼（於脱カ）入道許、依難遁自科、不及一言陳詞上者、任先傍例、欲被經御沙汰子細事、

件条、先度具言上早、爰弥源次入道、依令召籠無指誤之命婦神人、成嚴重神威恐欤之間、雖令進宮氏女許、不遂行清祓、就不糺返追捕物等、訴申子細之刻、雖被遣氏女申狀於彼入道許、依難遁自科、敢而不及一言陳詞之上者、所詮、任先傍例、被遂行清祓、爲被糺返追捕物等、重言上如件、

正應二年七月四日

918

「在山田式部三郎忠光譜中」

薩摩國八幡新田宮所司神官等与當國宮里郷地頭大隅式部三郎忠充相論免田以下事

右、如宰府註進狀者、子細雖多、所詮、於當宮堅義御供析并二月二日御祭饗膳析等免田者、自往古所引募當郷也、而忠充押領彼免田之上、放入使者於神領、押取身代、令沽却之由、神官等訴申之處、忠充背度々催促、不及請文云々、尤難遁其科欤、然則於件免田者、如元可引募當郷、至身代者、爲忠充之沙汰、可令糺返也、次忠充狼藉科事、可被付鎮西寺社修理者、依鎌倉仰（殿脱カ）、下知如件、

正應二年八月二日　　陸奥守平朝臣（宣時）在御判

相模守平朝臣（貞時）在御判

「上書ニ有之」

「関東御教書案文」

「裏有之」

「限之城」

919

『肝付兼石傳』

正應二年己丑、景行等虐政不已、兼石使兼藤復聞宰府、三月十八日、宰府以告鎌倉、於是地頭名越道璽、遂罷信行等職、故八月十一日、宰府沙弥贈兼石等書、令安堵窮民各得其所、年貢徴逋守文永令、新舊群吏克懋汝職、若或違之、罪當傾覆、其惟欽哉、

920

『古本末吉士検見崎權右衛門家蔵』

嶋津庄大隅方肝付郡弁濟使兼石代子息兼藤申、兩条□（宰）府下知事、

□在國地頭代背彼狀云々、依其科改代官職畢、早任宰府下知、令安堵本職、可糺返臨時課役色々損物也、

文永兩度下知事

同不叙用之云々、太招罪科欤、早任彼狀、可致其沙汰、年々所當年貢者、遂結解、有未進者、明年中究□(済カ)之、可執進請取狀也云々、□前兩度於損物以下未進者、可爲前司沙汰、至向後□務者、前司新司固守此旨、無違乱可致沙汰、若猶□(致カ)違乱者、可改所帯之狀、下知如件、

正應二年八月十一日　　沙弥(少弐経資)御判

921

「權執印文書」

薩摩國上野太郎忠將以下輩等、破當國新田宮夏越鎭齋、依□傷在廳等、御神事延引由事、尤非無其恐欤、然者於狼籍者、尋明實否、可令注進関東也、至御神事者、相觸在廳等、先如元可令遂行給候、仍執達件、(如脱カ)

正應二年八月十七日

前因幡守(大友親時)
沙弥(少弐経資)

在國司殿

922

『正文在國分正八幡宮社司澤某』

守護御狩左手右手書分事

合　左手馬

税所介　　惣検校

曽郡司　　河俣大掾【又太郎重朝入道禅心コトカ、見後十五年嘉元二年】

重久加賀房【朝時】　　向笠諸次郎兵衛尉

【弥次郎清種ならん】

祢寝郡司　　佐多弥四郎

佐多九郎　　田代七郎入道

伊佐敷大掾　　栗野大進太夫

修理所

合　右手馬

【又六氏平欤、彦二郎政平欤】

加治木郡司　　上木田大掾

【裏ニ宝治ヨリ正元ハ十二年トアリ】

下木田大掾　　小河郡司

東郷郡司　　羽坂藤七太夫

切手又次郎　　姫木弥四郎

【文和三年交名注文ニ木房太郎ト見ユ】

木房大掾　　田所小大夫

牧山大掾　　國修行

右、任先例、書分狀如件、

正應二年八月廿一日

右、任先例、被注申候之間、与判早、仍各無緩怠之儀、

【裏ニ宝治ヨリ四十二年】【正応是ヨリ三十三年也、元亨本書ノミニ次第ニ前後書之欤トアリ】

可被勤仕狀如件、

同年同月同日　　守護代僧唯道

923

『仝』

守護御狩踏馬之事

税所介十疋　惣検校五疋

重久加賀房【朝時】四疋　河俣大掾五疋

曽郡司三疋　向笠諸次郎兵衛三疋

東郷郡司五疋　羽坂藤七入道五疋

切手又次郎三疋　姫木弥四郎三疋

祢寝郡司十疋　佐多弥四郎五疋

同九郎二疋　伊佐敷大掾三疋

田代七郎入道五疋　小河郡司六疋

栗野郡司六疋　修理所五疋

加治木郡司十疋　上木田大掾五疋

下木田五疋　木房大掾五疋

牧山大掾三疋　田所小太夫五疋

國修行三疋

右、先例（任脱カ）、踏馬次第如件、

正應二年八月廿一日『自正応二年己丑至弘化四年丁未五百五十九年』

右、任先例、与判早、仍各無緩怠儀、可被勤仕狀如件、

同月同日　守護代僧唯道在判

「唯道ハ道忍公ノ時御家老ナリ」

924

『正文在國分正八幡社司澤其』

御家人分雇狩人之事

税所介百人　惣検校五十人

河俣大掾五十人　同藤三郎【河俣也】三十人

向笠諸次郎兵衛卅人

東郷郡司四十人　羽坂藤七太夫四十人

姫木弥四郎二十人　切手又次郎三十人

修理所四十人【文和三年大隅国交名注文ニ修理所弥太郎一族トアリ此類属カ】　小河郡司五十人

木房大掾四十人　田所小太夫五十人

右、任先例、支配狀如件、

正應二年八月廿三日

右、任先例、与判了、無懈怠可被勤仕狀如件、

守護代唯道在判

木原朝追立宿事

東手引

二追渡瀬　五郎男　三郎太郎　三十人案内者　左右六　源太郎　八郎

栗野屋形　野口藤内　源三郎　二十人案内者　成佛　溝口諸太郎

後邊　河俣領分弥次郎　藤三郎　二十人案内者　【清敬帯二字敬】紀藤次

（ママ）允　十五人案内者十郎

西手引

折尾ホカラノ峰　二十人案内者馬衆藤次　弥次郎

カイナサヽケ　栗山殿源藤次　三十人　弥次郎官衆

一坂　十郎　三十人案内者平六藤四郎

守護狩目錄次第事

右、代々雖有目錄、先如此、然者、長領爲知行分、彼狩人以下案内者、堅所申沙汰也云々、穴手皮任先例、取進之候条、文書明白之上者、可守先規候欤、但近年者狩庭之鹿子并皮之事、行事爲私用事、國面々存無相違也云々、守護代官方狩沙汰申談趣如此、爲後代於私注置之間、毎年二ヶ度之御狩之時、當守護可申上者、不可有子細者欤、

沙弥圓也

925

『肝付兼石譜中』

二十四日、幕府惟康親王使執權北條相模守貞時・北條陸奥守宣時、以御教書命兼石父子、速革苛政以治郡民、一如宰府令可也、

926

『古本末吉士検見崎權右衛門家蔵』

大隅國肝付郡弁濟使兼藤申、當郡地頭尾張前司入道々鑒代左衛門尉信行代官景行等押領所職、令□(追)出由事、右、如宰府今年三月十八日注進狀者、可令安堵本職并□宅之由、雖相觸、景行等不叙用之旨載之、仍擬有其沙汰之處、道鑒令改易信行之上、任宰府下知、令安堵本職、可糺返臨時課役色々損物等之由、今月十一日書与□(狀カ)於兼藤畢、此上者不及別子細者、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應二年八月廿四日

【鎌倉執權】【宣時】陸奥守平朝臣御判

【全】【貞時】相模守平朝臣御判

927

「正文在文庫」「伊作家譜中正文在巻本トアリ」

(端裏書)「雑掌与地頭和与状」

嶋津庄薩摩方内伊作庄就領家与地頭所務相論、雑掌預去弘安貳年二月十五日御下知處、地頭依不叙用彼御下知、可被行違背罪科由訴申間、任彼御下知、令和与条々、

一　下司名得分事

中原名居屋敷并一門輩居薗廿六ヶ所、此外所々名頭薗拾壹ヶ所、此者下司一圓也、此外百姓上家分作麥　作大豆　藍　狩　番入物　田畠所出物等并苅取作稲、地利得分、此者建治二三・弘安元分、可糺返者也矣、

一　百姓名事

任弘安御下知、可致沙汰矣、

一　身代事

如弘安御下知、任員數可糺返矣、

一　逃亡百姓跡稲事

同可任御下知矣、

一　弘安元年色々年貢事

百姓　作麥　作大豆　藍　取藺　莚　薦　簾　桑代

苧代　入物等也、任御下知、可令糺返者也矣、

一　領家御米事

建治二三・弘安元分、遂結解可令糺返矣、

一　検断事

可任弘安御下知矣、

一　寺社事

地頭補任以前分勘新者、任御下知、可糺返者也矣、

一　狩倉事

同可任御下知矣、

一　井牟田事

同可任御下知矣、

一　野畠事

同前矣、

一　下司給壹町所當事

於年々抑留所當者、任雜掌解、可糺返者也矣、

一　地頭屋敷内仁堀籠當庄一宮々薗壹所分可打渡事

右、件条々於所務者、任弘安御下知旨、可致其沙汰者也、次於令抑留之色々御年貢御米、下司名得分身代等者、於宰府御使前遂結解、於半分者、明年五月中仁可致其弁、若雖爲一塵、過約月者、可被申行御下知違背之罪科、今残半分者、相當于彼御米御年貢并下司名分色々得分等之程者、雖爲何箇年、可令立用地頭加徴米并色々得分等、兼又越訴事、彼抑留物等致半分弁而、取雜掌請取之後、雜掌与地頭代、諸共仁可令参上者也、不取雜掌請取之程者、可閣越訴、若出雜掌請取之後、至于四ヶ月不令参上者、以訴陳可被經御沙汰、此等之次第、雖爲一事於令變改者、可被召地頭職之由、被訴申之時、不可及一論、仍和与之狀如件、

正應貳年十一月十七日　　下司平正純（花押）

雜掌僧勝道（花押）

地頭代等

僧祐範（花押）

928

『比志嶋氏文書』

沙弥了意（花押）

要害警固役事、三箇月、西俣又三郎勤仕候了、恐々、

正應二　十二月十五日　忠宗（花押）

比志嶋孫太郎殿

「此文書、忠宗公御譜中ニ在リ」

929

「伊作家譜中」

「正文在手鏡」

薩摩國伊作庄雑掌与地頭下野彦三郎忠長（久長）相論所務条々事

右、就大友兵庫入道（頼泰）々忍所取進之訴陳狀、欲有其沙汰之處、任弘安二年御下知条々、可致沙汰之由、去年十一月十七日、兩方出和与狀畢、然則任彼狀、可令致其沙汰也者、依鎌倉殿（仰脱カ）下知如件、

正應三年二月十二日

陸奥守平朝臣（宣時）（花押）

相模守平朝臣（貞時）（花押）

930

「伊作家譜中」

「正文在手鑑」

嶋津下野彦三郎忠長（久長）代了意与越後彦三郎政國代光高相論信濃國神代郷地頭職事

右、訴陳狀子細雖多、所詮、大隅前司忠時領也、讓与子息久經父忠長之刻、後家尼西忍一期之程可知行之旨載之畢、而忠長則久經先西忍死去之時、讓給忠長之間、給安堵御下文之由申之、光高亦西忍存生之時、不相待一期、忠長及敵對之間、經訴訟畢、依之令讓政國之旨稱之者、西忍存生之時、致敵對之由、光高雖申之、無指實證、其上西忍者一期知行領主也、以彼讓狀難備亀鏡、於忠長者、就本主讓、次第相傳之条、無相違之由所見也、然則可令忠長領知之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應三年五月十二日

陸奥守平朝臣（宣時）（花押）

相模守平朝臣（貞時）（花押）

931

薩摩國宮里郷地頭大隅式部三郎□

爲當國新田宮執印重兼入道并同社所司神官等差隠御下知、被付地頭職由、或構出謀案、或差向神人等、無是

非追出忠光、忽令管領地頭職間、去七月比雖申付御奉書、敢不及請文陳狀、爰大別當長榮適依爲當參、可被召決由訴申刻、以下向儀、可明申旨、以奉行所御使、雖被相懸、不□催促、逃下上者、任傍例、欲預御注進事、

件陳狀云、以何故令押領地頭職、可被追捕狼藉哉云々、此条希代之謀陳也、不令押領地頭職者、何差向神人等、無是非追出忠光哉、又何致地頭所務、可苅取作麥哉、且以大紀太(ママ)入道、爲執印之代官、差置當郷之条顯然也、相貽御不審者、當郷之郡司名主等仁、以起請文有御尋之日、可有其證、次社家者、可被糺返損物之由、令問答許也云々、此条於國披露御下知之儀、一切無之、就何、可經問答哉、隨而於爲問答許者、何百余人神人俸(捧カ)白杖、帯鉾賢木、發向于地頭所、可令追出忠光哉、此□子細猶以相貽御不審者、高城郡地頭代馬二郎・楠下地頭代九郎三郎・薩摩郡光冨領主相良又二郎・當國御家人東郷在國司三郎、及武光二郎入道等、以起請文有御尋之時、尤可爲□(明カ)鏡者也、次御供饗膳賈人等不可□返之由、構出之、押領地頭職之旨、及偽訴云々、如載先段、於在國者披露御下知之令無之上者、忠光爭白(ママ)不令存知之、御□、不可返質人之由、可申之哉、首尾相違之陳詞也、次居宅放火事不覺悟云々、神人等追出忠光之後、其跡之居宅於燒拂之条、併彼等之所行也、爭可論申哉、次教長注文不實由事、件神人發向之日者、忠光希有而遁出其難之許也、家内之資財併爲神人被追捕取了、早任員數欲被糺返、次召籠定光妻女、所課於當社由事、存外也、當宮御造營者、祈(新カ)所又々現在之上下□押領地頭職、可被付所課之由、令申候条、水火之愁訴也、抑重兼入道爲御家人之由、募申欤、然者何可被自由出家哉、是又屬京家、替面奉掠関東之条、罪科難遁、忠光云異國合戰、云警固已下御公事、有忠無怠之處、依件重兼非據之濫吹、被押領地頭職、忽及侘傺之条、希代之愁訴也、所詮、長榮有御催促逃下上者、爲賜御注進、重言上如件、

正應三年九月　日

932　『比志嶋氏文書』

要害警固番役事、勤仕如件、

「正応三」十二月十五日　　忠宗(花押)

比志嶋孫太郎殿

「此文書、御譜中ニアリ」

933

『國分氏文書』

警固番役事、三箇月勤仕如件、

正應三年十月一日　　忠宗在判

國分掃部助殿

934

『正文在櫃執印』

今年二月三日関東御教書今日到來、如狀者、異國降伏御祈事、薩摩國〻分寺、一宮并爲宗寺社、殊可抽丹誠之由、可被相觸、且毎月可令執進巻數云〻者、任被仰下之旨、專抽御祈禱誠精、毎月無懈怠、可被進巻數也、仍執達如件、

正應四年三月六日　　左衛門尉(忠宗)(花押)

新田宮執印殿

935

「案文在山田七郎右衛門久通」

あつかりおき候御せうもんらの事

壹通　大隅殿御讓　谷山地頭職事

壹通　同忠眞讓狀

壹通　よろいの讓狀同忠眞狀

此外壹通　御教書津宿直事同守護所者副文

壹通　依鎧事覺兼房書狀

右、あつかりおき候旱、但文袋に封をつけられ候ところ也、

正應三年三月十三日　　道智(宗久養父大隅五郎太郎久親)

谷山式部四郎殿　御文書請取案

936

『水引執印文書』

(本文書ハ九三四号文書ト同文ニツキ省略ス)

937

『比志嶋氏文書』

薩摩國滿家院中俣介七郎祐秀代蓮信申、當村事、重訴狀如此、如狀者、爲訴人之身乍召上論人、在國之間、先度雖被成召符不參云〻、太自由也、所詮、爲究眞僞、來月十五日以前可參向博多、若於過期日者、任被定置之旨、就難澁之篇、可有其沙汰之由、相觸導蓮、可令申分明散狀給也、仍執達如件、

正應四年三月十八日　　前因幡守(大友親時)(花押)

沙弥(少弐経資)(花押)

滿家院地頭代殿

938

『臺明寺文書』

在御判

當國臺明寺衆徒等申寺領田畠事、或有國免之地、或有寄進之所、無縁之寺、以如此之地利、支佛聖燈油、奉祈天長地久之處、動切宛非分之課役、令煩寺僧等之間、長日不退之勤、其妨出來云々、事實者、尤不便之次第也、早任先例并證文道理、可有其沙汰之由、依國宣、執達如件、

正應四年四月十三日　　散位重眞奉

大隅國臺明寺々僧等中

『口裏』「國宣案」

「此原書ハ、旧御番所御文書二番箱中ニ一卷アリ」

939

『比志嶋氏文書』

大隅國吉原又次郎俊平申薩摩國滿家院内比志嶋・西俣以下村々事、可注申知行由緒之由、觸孫太郎可召給散狀之旨、先度觸申之處、于今無音云々、何樣事哉、可承左右候、仍執達如件、

正應四年五月廿七日　　前因幡守(大友親時)在判
沙弥(少弐経資)在判

謹上　下野三郎(忠宗)左衛門尉殿

940

『比志島氏文書』

大隅國吉原又次郎俊平申比志嶋・西俣以下村々事、重御奉書并訴狀案文等如此、々事先度相觸之處、于今不及散狀云々、何樣事哉、早令參對、可被明申之狀如件、

正應四年六月四日　　左衛門尉(忠宗)在判

比志嶋孫太郎(忠範)殿

941

『水引執印文書』

鎭西爲宗社修造事、四月廿五日関東御教書并御事書、昨日十六日到來、各案文如此、早任被仰下之旨、爲致沙汰、不日可令上府給也、仍執達如件、

正應四年六月十七日　　前因幡守(大友親時)(花押)
沙弥(少弐経資)(花押)

新田宮執印殿

942

『入來院氏臣岡元氏文書』

(端裏書)「関東御下知案」

澁谷平五郎致重女子辰童与同妹弥陁童相論、亡父致重遺領相模國吉田庄内藤意立野、美作國河會郷内下村半分、薩摩國清色村、筑前國下長尾田地事、

右、就去年十二月十一日宰府注進、欲有其沙汰之處、去二日兩方令和与畢、然者守彼狀、向後無違乱可令領掌之狀、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應四年八月廿八日

陸奥守平朝臣(宣時)御判

相模守平朝臣(貞時)御判

943 『國分氏文書』

要害警固役事、三箇月、以代官大學入道被勤仕候、仍執達如件、

正應四年九月晦日　　忠宗在判

國分掃部助殿

944 『池端文書』

將軍家政所下

可令早領知大隅國祢寢院南俣内用松名并下直□(世)村地頭職事

右、任亡父清綱正元ゝ年閏十月五日、文永四年十二月廿四日、建治二年正月卅日參通讓狀、爲彼職、守先例、可致沙汰之狀如件、以下、

正應四年十月十六日　　案主菅野

令左衞門少尉藤原　　知家事

別當相模守平朝臣(貞時)御判

陸奥守平朝臣(宣時)御判

945 『仝』

大隅國祢寢院南俣内用松名并下直世村地頭職事

右、任今年十月十六日関東御下文之旨、爲彼職、守先例、可致沙汰之狀如件、

正應四年十一月四日　　丹波守平朝臣御判

越後守平朝臣御判

946 『臺明寺文書』

下□(永)井□(村)三段　上□(永)井□(村)二段　□(隨樂作力)二段

矢頭木二段　岩本二段　正実作二段

口町四段　倉原三段重枝名　長谷六段

女嶽三段　上女嶽二段　十樂作二段

已上七丁七段内

六丁九段、万得御名、行賢執印寄進山下五段重枝名、

相善房教弁寄進倉原三段、理性房覚明与衆徒、相博於倉原山

下等者、警固用途弁之、

衆集院燈油田一丁三段万得御名、行賢執印寄進、公事無之、

一日吉田一丁一段、佛聖田七段已上一丁八段、万得御名、行賢執印寄進、公事無之、

同燈油田下河津留五段神領恒次名、在國免、

性乗房覚芳寄進、可為山王田由、建久ニ賜國免間、正治御造営時、不籠本名令勤仕別役、然自去年警固用途國衙御所作并ヤナ可打由、自本名依被催促、去年無沙汰ニ雖弁之、於當年者、此等子細ヲ令問答不弁之、

宗曽利田三段私領開発、公事無之、命婦綾氏女寄進、性成阿闍梨妻

字小開発山王田三段重枝名公事無之、

今ハ山王御供田、守護代免状在之、

一忌日田

別當分一丁八段

堀切六段重枝名、長寿御房寄進、警固用途弁之、國免在之、

迫田六段重富名、備前房寄進、内侍給三百、警固用途、九月九日國懸菓子三合弁之、

小山田四段重久名、相善房寄進、警固用途厨家米弁之、

小綾二段重枝名、相善房寄進、十五日田、本證文ニハ雖令停止万雑公事、於今者自本名依被催促、諸公事勤仕之、

已上別當分也、

北迫三段重枝名、橋口入道忌日、公事同小綾、

寄田四段智得経田、理性御房忌日、公事無之、

常樂會田四段小河、智能、姫木、聖西入道寄進、公事無之、

字平隈田玉丸八段宮永名経田、佛阿弥陀佛并ニ妙阿弥陀佛寄進、御願膳所入物、東郷郡司方ニ検田雑事、段別二升弁之、

萩原五段糸丸経田、真悦房寄進、公事無之、

字中俣佛性會田三段得丸名、國領、田中入道念西寄進、於公事者、雖載切符、不被催促之、但御放生會陣頭行事一人勤之、

大坪五段重富名、相模法眼御房寄進、公事無之、

上樋渡五段重武内、清正、加治屋土佐公寄進、雖有國免、國懸御所作勤之、警固用途弁之、

下樋渡五段本名上同、加治屋土佐公妻、上樋渡同、

溝副五段経田、智得名、若葉御房忌日、公事無之、

固尻四段宮永名経田、永海妻陀阿弥陀佛寄進、公事無之、(智松)

造花田三段恒次、楽阿弥陀佛寄進、公事無之、

副柳五段曽野郡智能経田、成寿房忌日、公事無之、

白土二段重富名、円勝房寄進、警固用途弁之、但夏中ノ燈油田也、

青木五段重富名、堅者玄栄忌日田、公事無之、

下橋口四段重武名内、清正、宗房田所寄進、在國免、

河原田二段弟子丸名、國領、西阿弥陀佛寄進、真性ノ祖母、於公事者佛性田同、但今学頭田、

竹原田五段主丸名、円明房寄進、公事無之、今者学頭田、「主丸名円明房」

地藏講田一丁主丸名、在國免、円明房寄進、公事無之、

十五日田一丁二段内恩徳名、行祐寄進、一丁息田、在國免、二段楠本田、

八講田四段経田、智得名、真智阿闍梨寄進、在國免、公事無之、

若宮田二段経田、智得名、若葉御房寄進、公事無之、

三昧田一丁八段内在國免、
　　菅生六段重枝名、本證文ニハ雖令停止万雑公事、自今年始
　　警固用途、依被苛責弁之、
　一丁二段内万楽、経田七段、智得、経田五段、眞乗房寄進、公事無之、
温田二段経田、智得名、学頭法橋賞胤寄進、公事無之、
堅義田一丁重冨(名カ)門、篤用寄進状ニ在國免、
　　其上義祐状、社國守護両三方之万雑公事臨時課役一向免除之、
　　雖然警固用途使、付于使於百姓、依被苛責、為百姓沙汰、銭二
　　貫文弁之、但乍責取用途、返抄不出之、又御廳御所作勤仕之、
夏田九段内上橋口四段、清正、宗房田、所後家寄進、
　大荆五段、万楽経田、在小河、院阿弥陀佛寄進、公事無之、
八曼荼羅田七段御館分、法乗房安弁寄進、在國免二通、自税所殿
　　警固用途、雖被催促、称為御館分不令勤仕之、
推鐘田五段公事無之、
採燈田二段公事無之、
山王燈油田、谷上園開發田二段
　　已上
右、注進如件、
正應四年十一月　日

947
「越前島津氏三代行景譜中」

三代 行景 ―― 四代 忠政
左衛門三郎　　左衛門三郎

948
將軍家政所下
　可令早惟宗行景領知播磨國下揖保庄半分地頭職本御下文以下
　　状等紛失之子細見加賀入道行照状、事
右、任亡父左衛門忠行六月十日付建治二年、譲状、爲彼職、守
先例、可致沙汰之狀、所仰如件、以下、
　正應四年十二月七日　　案主菅野
令左衛門少尉藤原(花押)　　知家事
別當相模守平朝臣(貞時)(花押)
　陸奥守平朝臣(宣時)(花押)
「旧時編集ノ譜中ニハ、正文在嶋津又助忠清ト各通共ニ片書アリ、薩州家ニ伝ハリシモノ考察セラル」

949
『比志島氏文書』
要害警固役事、西俣六郎殿被勤仕候了、恐々謹言、
「正應四年」十二月廿三日　　本性(花押)
　　比志嶋孫太郎殿

950
「權執印文書」
薩摩國開門宮雑掌申、相語守護人被押取御剱并神馬由事、
去年十月二日関東御教書副訴状具書案、如此、早任被仰下之旨、

爲致沙汰、可令出對博多給也、仍執達如件、

正應五年二月五日　　前因幡守（大友親時）（花押）

新田宮執印殿

951　「大口高城氏蔵」

奉讓与

薩摩國入來院水田畠地村薗山野江河等弁濟使職事

右、於件所職者、割分當院五分壹、自本主種嗣手、限永代、被讓与師員畢、而師員分内又割分貳拾壹、種嗣讓狀写案加裏判、限永代所奉讓与讀師弘範也、於色〻御年貢者、隨分限可被進濟也、然者至于後〻將來、無他妨可被相傳領掌之狀如件、

正應五年三月十四日　　伴師員（花押）

952　『肝付兼石譜中』

五年壬辰、初和泉左衞門尉保道有二男、長曰圖書允保連、法名導澄、次曰左衞門次郎保在、或作保有、法名法有、保道以世所傳和泉新莊惣領職傳之保連、至是三月十三日保道以椙村賜保在、而又割田拾八町及山野等傳次子保在、乃四月七日操書授之、保道和泉右兵衞尉保久之子也、保久見上宝治二年、

953　『仝』

讓与次郎保在所

薩摩國和泉新庄惣領職内田畠在家并山野等事

合

枌村　永野　折小野　鍋野　宇津野

一山野四至限東深谷限南祁答堺紫尾平尾限西大平河　限北大河　但君田河ヨリ下

副渡

田地坪付御公事足拾捌町定

右、件田地村〻山野等者、保道重代相傳所領也、然所讓与次郎保在也、京都関東御公事者、任御公事足田數、自惣領令支配者可勤之、惣領若致違乱者、各別仁可勤仕之、雖可副渡関東代〻安堵御下文、渡惣領之間、書案文渡先年早、任此讓、無相違可令領知之狀如件、

正應五年卯月七日　　左衞門尉保道（花押）

954　「伊作忠長譜中」

「正文在手鏡」

嶋津大隅前司忠時法師（法名道佛）、女子尼忍覺代入蓮与甥下野彦三郎忠長（久長）代了意相論、信濃國大田庄神代郷内腰中村田在家事、

右、訴陳狀具書子細雖多、所詮、於惣郷者、道佛文永二年六月二日、雖讓与于忠長亡父道忍（久経）、至彼田在家者、同日給与忍覺、同四年、申与安堵御下文之由所見也、而忠長押領之旨、入蓮令申之處、讓給于道忍所領内除仁立留田在家者、付于道忍之由、同八年、書置後判狀畢、件狀者、道忍嫡子忠宗（忠長舎兄）所令帯也、可被召出之旨、了意依令申、於引付之座、召出正文、令披見之處、彼狀者置文也、非讓狀之上、悔返忍覺所得腰中村田在家之由、無所見之旨、入蓮雖申之、如狀者、久時仁（道忍俗名）讓与所領内於除者、久時仁付之由、書載之上、不及子細、而忍覺當知行經廿余年之旨、入蓮又雖稱之、當郷者、就道佛文永二年讓狀、後家尼西忍一期令知行、正應二年死去畢、仍不過年記之由、了意所申有其謂欤、然則、於件田在家者、任道佛文永八年狀、忠長知行不可有相違者、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應五年四月十二日　　陸奥守平朝臣（宣時）（花押）

955　『臺明寺文書』

當國臺明寺衆徒申刃傷狼籍由事、去年三月十六日関東御教書（副綸旨以下御狀具書）、案文如此、如交名注文者、祐範弟子道印爲狼籍人云々、任被仰下旨、爲致沙汰、相具彼仁、可被上府候、仍執達如件、

正應五年五月十九日　　筑後守在判（少弐盛経）

臺明寺少輔御房

『在口裏』「到来正応五□」

臺□少輔□　筑後守盛経」

相模守平朝臣（貞時）（花押）

956　「臺明寺文書」

大隅國臺明寺雑掌申刃傷狼藉事、加賀房朝明就五ヶ度催促令上府、乍番訴陳、無音歸國間、所被下日限奉書也、仍訴狀遣之、早付之、可被執達請文候、仍執達如件、

正應五年六月三日　　筑後守在判（少弐盛経）

牛屎院郡司殿

957　「正文在文庫」

嶋津御庄薩摩方内伊作庄同日置北郷領家与地頭所務相論条条和与事

一　桑代事

右、木者拾本内、領家方七本、地頭分参本之条、度度御下知分明也、而年貢者、木別貳拾文令宛取之處、地頭押取肆拾文云々、為安堵百姓等、向後木別可為参拾文也、若背此狀者、可被申行御下知違背之科者也矣、

一　検断事

右、竊盗口舌輕罪者、為庄廳之沙汰、可令安堵土民之由、嘉祿・弘安・正應関東度度御下知分明之上者、為庄廳之沙汰、可被安堵土民者也、若又雖有此外之犯科、不糺定犯否輕重之程、地頭無左右取質身代、致非分之沙汰者、可被行御下知違背之由、被訴申之時、不可及一言論者也矣、

一　地頭得分雑掌下司抑留等事

右、条々和与之上者、地頭永令停止訴訟畢矣、

一　建治二三・弘安元二三、御米并色々御年貢、寺社勘析身代、下司名得分等地頭抑留事、

右、条々和与之上者、雑掌可止訴訟者也矣、

一　入藍事

右、領家方、任先例、以参尺五寸圍縄、被徴納之上者、地頭同不可相違者也、此外藍間以下事、可任先例、若地頭致非法者、可被申行罪科矣、

以前条々、和与如件、凡當庄所務事、弘安二年二月十五日、雑掌預御下知之處、地頭令違背之間、就雑掌之訴、正應二年兩方和与畢、而地頭違犯彼狀之旨、雑掌被訴申之間、雖被申賜関東御注進、条々相互重令和与畢、向後於所務条々者、守正應二年并令和与狀、雖為一事、不可令違犯、若於令變改者、可被召地頭職之由、被訴申之時、不可及一論者也、又雑掌寄事於左右、雖經訴訟、非沙汰之限、仍和与之狀如件、

正應五年十一月卅日

地頭代沙弥了意(花押)

雑掌僧勝道(花押)

(裏書)

「為向後證文、奉行人所加判也、

采女佐三善(花押)

沙弥(花押)」

「続目裡判右同」

958

「正文在文庫」

嶋津御庄薩摩方内伊作庄同日置北郷領家与地頭下司名主兩職相論和与事

右、件下司名主兩職者、可爲領家進止之由、建長弘安関東御下知分明之處、地頭致越訴之間、雖番訴陳、以和与之儀、下司名主兩職之越訴、地頭永止之畢、但、又就和与之儀、被避与宮内伊与倉今田参箇名名主職於地頭者也、至有限之所當年貢課役等者、任先例、地頭可令弁濟于領家方者也、若雖爲一塵致懈怠者、相觸正員之刻、不被叙用之者、領家被悔返件名〻等之時、不可及一口之論者也、但、於宮内名神主職、宮薗神田寺田等者、爲領家進止之間、地頭敢以不可相綺者也、此外田所惣公文屋敷田畠等之地、本依爲領家進止之地、同地頭不可相綺者也、又件宮薗神田寺田并田所惣公文屋敷田畠等之境者、可任先例、此外至薗等之苧代桑代者、領家被避与于地頭畢、今残伊与倉今田名内寺田神田等、同地頭不可相綺者也、乍出此和与狀、若地頭猶於企越訴者、可被申行地頭於御下知違背之罪科也、其時不可及一口之論者也、又雑掌寄事於左右、雖經訴訟、非沙汰之限、仍和与之狀如件、

正應五年十一月卅日　　地頭代沙弥了意（花押）

959 「伊作家久長譜中」
「正文在手鏡」
（本文書ハ九五八号文書ト同文ニツキ省略ス）

960 「伊作久長譜中」
「正文在巻本」
（本文書ハ九五七号文書ト同文ニツキ省略ス）

961 「在伊作久長譜中」
「写在巻本」
（端裏書）
「ふすまへのあんもん」

さてもこのいたわりなんきに候て、たすかるへしともおほえす候あひた、申おき候、あちうのふすまへのほうの事、下ふすまへハ、たうちきやうして候へとも、とくふんも、うみやう（有名無実）むしつニ候うあ、しゆこのうちニ候ける山田と申候ける仁、いらんをなし候よし申候、上ふすまへの事ハ、ほんしゆさりわたさす候しあひた、御けうしよを申なして候し、かやうの事とも、子共候へとも、か

雑掌僧勝道（花押）

いく〳〵しきわかたうなんとも（若党）候ハす候、いよ〳〵しやうたいあるましく候あひた申候、いつれも〳〵御さた候て、御ちきやう候て、こともふちし候て給候へく候、御下文の正文まいらせ候、御さいきやう（在京）候へハ、ハんしたのミたてまつり候、いたわりくわきうニ候て、くハしからす候、恐〻謹言、

「年間ナシ」一月十九日　「朱カキ『山田式部少輔』」忠継

伊作三郎（久長）左衛門尉殿

962

「在道鑑公御譜暦應四年」

「正文在田布施衆二階堂三左衛門定行」

「本マヽ」校正了

異賊警固事、嚴蜜有沙汰之上、任申請、可令差下子息三郎左衛門尉（久長）於所領阿多北方狀、依仰執達如件、

正應五年十二月七日　陸奥守（宣時）

相模守（貞時）（花押）

隱岐入道後家

「右文書ノ綱目ニ有之」

「於此正文者、恐海路之難、可留國之間、被正校案文、可封裏旨、就所望、加判形了、

暦應四年十月五日　沙弥道鑒（花押）」

963

「伊作久長譜中」

「正文在手鏡」

薩摩國伊作庄雜掌勝道与地頭下野彦三郎左衛門尉忠長（久長）代了意相論所務事

右、就大友兵庫（頼泰）入道〻忍去年十月廿日注進狀、欲有其沙汰之處、去月卅日兩方出和与狀畢、然則、任彼狀、兩方可令致沙汰也者、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應五年十二月十六日

陸奥守平朝臣（宣時）（花押）

相模守平朝臣（貞時）（花押）

964

『頂峯院文書』

異國降伏御祈事、去十月廿七日関東御教書今月廿日到來、案文如此、如狀者、薩摩國一宮國分寺宗寺（為脱カ）社、殊可致精勤之由相觸之、可令執進巻數畢者、任被仰下之旨、可被致御祈禱忠候、仍執達如件、

正應五年十二月廿一日　『四代忠宗公』左衛門尉（花押）

冠嶽別當住僧御中

「此文書、御譜中ニ在リ」

965

「伊作久長譜中」

「正文在手鏡」

薩摩國伊作庄地頭下野彦三郎忠長(久長)代了意与雑掌勝道相論下司名主兩職事

右、庄務条々、就雑掌訴訟、有御沙汰、弘安二年被裁許之時、彼兩職依被付領家方、地頭越訴之間、重有其沙汰之處、去年十一月卅日、兩方所進和与状也、如状者、彼兩職者、地頭永止訴訟訖、但、宮内伊豫倉今田三箇名々主職者、除佛神田神主職并公文田所屋敷田畠等、所避与地頭也、年貢課役不可懈怠云々者、此上不及子細、相互守彼状、向後無違乱可致沙汰也者、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應六年正月十三日　　陸奥守平朝臣(宣時)(花押)

相模守平朝臣(貞時)(花押)

966

「伊作久長譜中」

「正文在手鏡」

雖未入見参候、自小嶋入道殿、慇懃ニ蒙仰候之間、無左右令申候、御名國司事、関東御教書正文を六波羅殿入見参候て、以奉行人被進　公家候之条、御沙汰法候、以案文申沙汰、無先例候、忩々請正文、御代官雖無御在京候、以下部給候ハヽ、申沙汰仕候て、可被進聞書候、小嶋入道殿御口入之上、禅門御方へ、無内外申承候之間、一切不可存等閑候、恐々謹言、

二月一日　　「朱カキ「無判形」」沙弥寂一

謹上　下野彦三郎(久長)左衛門尉殿

967

「藤野氏本在貞久公御譜中」

正八幡宮神輿事、所被下　綸旨也、依嶋津本庄役、可奉動神輿之由、所司神人等結構云々、若有御入洛事者、薩摩國守護地頭御家人等、可奉留之状、依仰執達如件、

正應六年二月七日　　陸奥守(宣時)(花押)

相模守(貞時)(花押)

下野三郎左衛門尉(忠宗)殿

(張紙)「此二月七日ノ正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ」

968

任此状、可令領掌之由、依仰下知如件、

文保二年三月廿三日　　相模守(高時)在判

武蔵守(貞顕)在判

(本文書、文保二年三月十五日島津道義譲状ノ外題ナリ)

969

『臺明寺文書』

曽野郡中田井事、先度雖令寄進當寺、依掠申、朗院法橋聊雖令相違、今度上洛時、令申子細於本家之處、被聞食披之際、重奉寄之狀如件、

正應六年二月廿五日　　法印在御判

臺明寺衆徒御中

970

『樺山氏文書』

異賊防禦事、鎭西地頭御家人并本所一圓地輩、從守護之催、且令加警固用意、且可抽防戰忠功之由、先度被仰下畢、而被定鎭西奉行人等之間、若不從守護命之族出來欤、如然之輩、縱雖致合戰、不可有其賞、可被處不忠也、早存此旨、可令相觸薩摩國中狀、依仰執達如件、

正應六年三月廿一日　　陸奥守（宣時）在判　相模守（貞時）在判

嶋津三郎左衞門尉（忠宗）殿

「此文書、御譜中ニあり」

971

『正文在村田太右衞門尉』

爲異賊警固、所下遣兼時（時頼孫北条越後守、此年為探題、永仁三年六月帰鎌倉）〻家於鎭西也、防戰事加評定、一味同心、可運籌策、且合戰之進退、宜隨兼時之計、次地頭御家人并寺社領本所一圓地輩事、背守護人之催促、不一揆者、可注申、殊可有其沙汰之由、可相觸薩摩國中之狀、依仰執達如件、

正應六年三月廿一日　　陸奥守（宣時）（花押）　相模守（貞時）（花押）

嶋津下野三郎左衞門尉（忠宗）殿

（張紙）「右為異国警固云〻正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之中ニアリ」

972

『肝付兼石傳』

六年癸巳（即永仁元年）初兼石領本郡田地百七十町及山野狩倉民居等、皆如國典、間歲、國典（ヤヤユルミ）弛、爲地頭代等動被侵奪、失永吉名以下九十餘町地、至山野民戸等、亦被掠租調、只有七十餘町而已、兼石乃使兼藤條陳其實、以請宰府、至是四月三日、兼石及地頭道鑒、成脩嘉文（嘉禄文永）之令、歸我侵地九十餘町、乃盟之曰、自今以後無敢負焉、

973

『古本末吉士人検見崎氏蔵』

嶋津庄大隅方肝付郡弁濟使兼石（在領家挙状、）子息兼藤申□（條カ）條

永吉名事

牟多田事

右、於公田跡者、可濟年貢之由、度々雖加下知、依田數未□（定カ）不事行之由、兼藤所訴申也、所詮、爲断向後相論、□（任）兼藤申請、以見作田百七十町内（七十余町者、兼石当知行云々、所残九十余町可返付本名也、）□平民守庄例、兩方可致沙汰矣、

野稲畠事

右、守嘉祿御下知、任文永下知、可致沙汰矣、

在家事

狩倉事

右、停止地頭代押領、任文永下知、兩方可致沙汰矣、

地頭代雇仕鎭守神人事

右、可停止過分之儀也矣、

地頭代引籠數ヶ所屋敷由事

右、於平民跡者、可返付本名之由、度々加下知畢、不可有相違、且兼石堀内小薗一ヶ所地頭代押領之云々、事實者、不日可返付也矣、

□（以カ）前条々如此、向後更不可違此狀、仍下知如件、

正應六年四月三日

『名越尾張前司入道道雲』沙弥御判

974

「在貞久公御譜中」

正八幡宮神輿事、注申之趣披露了、嶋津本庄役、急速可被仰下之由、重所經　奏聞也、可被存其旨之狀、依仰執達如件、

正應六年四月五日　　陸奥守（宣時）（花押）

相模守（貞時）

下野三郎（忠宗）左衛門尉殿

「右ノ正文、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之中ニ在リ」

975

『水引執印文書』

爲異國降伏御祈、御釼一腰、神馬一疋可献一宮由事、今年二月十一日関東御教書今月廿日到來、案文如此、於當國一宮者、新田宮与開門社御相論之間、先度令申子細於談議所之處、就近例、先可致沙汰之由被仰出之間、新田宮依被帯近例、令進宮畢、而開門社司雖及訴訟、御成敗未断之間、任先日沙汰篇、所令進献當宮也、依之不可有一宮治定之儀、且存其旨、且可被進請取候、仍執達如件、

正應六年四月廿日　　『忠宗公』左衛門尉（花押）

薩摩國新田宮執印殿

976 『比志島氏家蔵文書』

石築地以下要害構事、自関東度々雖被仰下、無沙汰云々、不日可終其功、於難澁所々者、可注申之旨、可被相觸薩摩國中候、仍執達如件、

正應六年四月廿一日　　越後守(兼時)御判

下野三郎(忠宗)左衛門尉殿

977 『仝』

宮崎石築地以下要害構事、今月廿一日越後守(兼時)殿御教書案如此、度々所相觸之加佐三尺并裏芝及破損事、來五月廿日以前可終功、若猶令違期者、可令注進、仍執達如件、

四月廿三日　　左衛門(忠宗)尉在判

薩摩國地頭御家人御中　進申

978 『肝付兼石譜中』

五月廿四日、幕府惟康使北條貞時・北條宣時以御教書命兼藤父子及地頭道鑒和平、使道鑒歸我侵地、如四月三日和与狀、更勿違焉、

979 『古本末吉検見崎氏家蔵』

大隅國肝付郡弁濟使兼石代兼藤申當郡所務條々事

右、就宰府正應二年三月注進狀、擬有其沙汰之處、地頭尾張前司入道々鑒止違乱之由、出狀之間、同八月被成下知畢、而背彼狀之旨、兼藤依訴申、今年四月重出和与狀畢、然則、任件狀、向後更不可有違乱者、依鎌倉殿仰、下知如件、

正應六年五月廿四日

陸奥守平朝臣(宣時)御判

相模守平朝臣(貞時)御判

980 『延時氏文書』

薩摩國御家人延時三郎大藏種忠、去月三日就関東早馬下着、令騒動候之由、於在國承及候之間、令馳参□(候カ)、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正應六年六月六日　　大藏種忠上

承了(兼時)(花押)

981 『比志島氏文書』

薩摩國御家人比志嶋孫太郎忠範、去五月三日就関東早馬

下着事、令騒動候之由、於在國雖承及候、遠國候之上、
折節所勞候之間、不馳参、于今遅々仕候、所勞依減少仕
候、令参向仕候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正應六年六月十三日　　源忠範

承了(兼時)(花押)

982

「指宿文書」

讓渡

薩摩國指宿郡々司職并田畠山野河海同開門新宮宮司職
等事

右、於兩職以下田畠山野等者、平忠連先祖相傳所職所領
也、然間、副調度證文等、限永代、所讓与子息彦鶴丸實
也、向後不可他妨、仍讓狀如件、

正應六年五月廿四日　　平忠連判

「忠連ハ郡司ニテ又次郎ト云、忠連ノ子彦次郎入道成栄ニテ、幼名彦鶴丸ト云」

983

『國分氏文書』

筥崎警固番役三ヶ月、以代官被勤仕候、恐々、

永仁元年九月卅日　　忠宗在判

國分掃部助殿

984

『比志島文書』

警固番役事、三ヶ月被勤仕了、仍執達如件、

永仁元
十二月晦日　　忠宗(花押)

比志嶋孫(忠範)太郎殿

「此文書、忠宗公御譜中ニ在リ」

985

「蒲生士山内氏文書」

(忠宗)(花押)

薩摩郡内平礼石寺事、任故下野入道殿免除狀、停止方々
使者之濫妨、土民等可令安堵之狀如件、

永仁貳年四月　日

「按ルニ、此御花押ハ御四代忠宗公ニテ、故下野入道ハ久経公ナルヘシ、比志島氏文書正應三十二月十五日忠宗公御花押等見合ヘシ」

986

「蒲生士山内氏文書」

ひられいしのくわんおんに、たゝなをのきしんしたてま
つるしようもんニまかせて、

右、かのてらハ、わうこのこんりうたるうゑ、たゝなをのもんしよにまかせて、たゝたうかしそんすゑ〳〵ニいたるまて、またくいらんをなすへからす、たゝし、このしやうハ、めくり殿ニたかひニ申うけ給ハるあいた、かきしんし候、このうゑハ、たゝたうかしそんニをいて、かのしない(寺内)にいらんをなさんニいたてハ、たゝなをのもんしよのむねにまかせて、またくたゝたうかしそんニあるへからす、よてしやう如件、

永仁二年四月廿日　　平忠仁(在カ)(花押)

987
「町田元祖忠経譜中」
永仁二年甲午七月晦日、　太守忠宗公賜忠經書、以勤戍筑前博多津之事、時謂之参津、亦以備元寇也、

988
『町田氏蔵』
警固事、就皆参、自五月被勤仕候畢、仍執達如件、

永仁二年七月晦日　　忠宗御判

大隅五郎殿

989
『國分氏文書』
警固役事、自六月到七月、被勤仕候、仍執達如件、

永仁二年七月卅日

『本書宛ナシ、國分掃部助殿宛ナルヘシ』

990
『比志島氏文書』
警固事、自六月至七月、被勤仕了、仍執達如件、

永仁二　　忠宗(花押)

七月卅日

滿家比志嶋太郎殿代

「此文書、御譜中ニ在リ」

991
「正文在西俣氏」
警固役之事、就皆参、自五月致勤(被カ)仕候旱、仍執達如件、

永仁二年七月晦日　　忠宗(花押)

西俣又七郎殿

992
『水引執印文書』
警固役事、自六月到七月、被勤仕了、仍執達如件、

永仁二　　忠宗(花押)

七月卅日

新田宮執印殿代

993

「写在指宿助左衛門尉」

警固事、就皆参、自五月被勤仕候畢、仍執達如件、

永仁二　七月晦日　　忠宗在判

吉富二郎殿代

「忠宗公御譜中ニ在リ、永仁四年八月卅日忠宗公遺願經状同文」

994

「執印蔵」

（本文書ハ九九二号文書ト同文ニツキ省略ス）

995

『比志島氏文書』

被下　関東御教書異國警固事、自去六月廿四日迄今月廿四日、博多津番役被勤仕候了、恐々謹言、

『年間不詳』七月廿五日　　覺惠（少貳資能）（花押）

薩摩國千嶋太郎殿代河田右衛門尉（盛資）殿

996

「在道鑑公御譜暦應四年」

「正文在田布施衆二階堂三左衛門定行」

校正了

薩摩國阿多北方年貢事、當所之外無知行地之處、依異國警固、差下子息云々、仍所有御免也者、依仰執達如件、

永仁二年十二月廿七日　　陸奥守（宣時）在御判

相模守（貞時）在御判

隠岐入道後家

「右文書之統目ニ有之」

於此正文者、恐海路之難、可留國之間、被正校案文、可封裏旨、就所望、加判形了、

暦應四年十月五日　　沙弥道鑒（花押）

997

「羽嶋氏文書」

注進　永仁貳年分羽嶋地頭（ママ）撫目錄事

合

見作田柒町捌段卅

損田参町

得田四町八段卅内除田中地頭用

定得田四町八段廿中

分米貳石四斗貳升五合内壱斗西願可為弁也、弐斗谷山女子可為弁、

残米貳石壹斗五合定又七反被加才十分米三合定

此外論田見作六段十才二反廿イ田三反卅被加定分米壹斗九升定

直木(ママ)殿

右、太略目錄如右、

永仁三年二月十日　　光有(花押)

景遠(花押)

998

『正文在水引執印氏』

警固番役事、今年春分、以代官被勤仕候了、仍執達如件、

「永仁三」四月十六日　　忠宗(花押)

新田宮執印殿

999

『正文在水引執印氏』

薩摩國新田宮執印三郎兵衛入道〻教(重兼)申所職并名田畠事

訴狀如此、相觸本所、可被執進雜掌陳狀也者、依仰執達如件、

永仁三年五月六日　　陸奥(宣時)守(花押)

相模(貞時)守(花押)

丹波守(北条盛房)殿

刑部少輔(北条久時)殿

1000

『水引執印文書』

(花押)

當宮執印職事、道教(執印重兼)犯用造營用途、依令抑留年貢、自去年五月被改易候了、仍被補任時經之處、諸司神官等令違背時經、同心道教、不從度〻下知云〻、太自由也、且被改易道教上者、於令同意之輩者、任注申、永可被改易其職也、將又雖被下　綸旨并武家施行、不叙用之由有其聞、是又頗狼藉也、不日相觸所司神官等、御年貢已下無懈怠、可致其沙汰之由、被仰下也、仍執達如件、

永仁三年七月十一日　　左衛門尉朝員奉

新田宮所司神官等御中

1001

「伊作久長譜中」

「正文在手鏡」

大工宗仲与嶋津下野三郎左衛門尉忠長(久長)代景光相論御所造營用途事

右、訴陳之趣子細雖多、所詮、建治三年御所造營時、忠長父下野前司(久経)于時修理亮、所課用途二百五十三貫七百文、致未進之間、以所領信濃國大田庄内津野郷、大工宗親宗仲父、三箇年可知行之由、令契約畢、如證文者、一年中年貢二百貫、三箇年之間所入置也、一年中二百貫有相違者、今二箇年

可被知行云々、就彼狀三ヶ年知行條、宗仲無論、爰所濟不足于二百貫之間、任證文、所殘二ヶ年可知行之由、宗仲雖申之、如景光所進弘安四年三月廿一日下知狀者、信濃國津野郷事、以新造御所御持佛堂廊用途不足、久經代限年紀去与宗親畢、而宗親雖申子細、知行三ヶ年無相違上者、可返給于本主久經云々者、非下知狀之由、宗仲雖申之、就相論被是非之上、不及異儀、且弘安四年之成敗難改替之間、宗仲之訴訟、旁非沙汰限之狀、依仰下知如件、

永仁三年七月廿九日

右近將監藤原(花押)

散位藤原朝臣(花押)

前出羽守藤原朝臣(花押)

1002

『入來家臣武光氏文書』

吉枝名内河俣入道殿御分薗々、孫滿丸仁令打渡事、

合

一所蒔崎唐坊薗 限東彦次郎殿垣根 限西今分堺在之、限北八講田波多 限南大河

一白石山崎薗 在外薗、但北、一所成佛薗 在薗之内堀町、

一庄屋内權三郎外薗一所

此外庄屋内籠々并荒野等者、寄合隨分限、可有配分也、又於地頭押領田薗等者、相共致沙汰、可配分之、右、大略配分如件、

永仁三年十一月四日

伴師兼(武光)(花押)

1003

『國分氏文書』

警固番役事、以代官被勤仕候、恐々、

永仁四年十月六日　忠宗在判

國分掃部助殿

1004

鹿屋院弁濟使職事

右者、入道觀阿夜打殺害間事、申披候之上者、於向後者、可令還補之由、依　院家御氣色、預所殿下知候也、仍執達如件、

永仁四年十一月廿日　僧榮擢(マヽ)

謹上　鹿屋院弁濟使殿

1005

『臺明寺文書』

うりわたすすへくちた貳段事

右、件田ハ、こしやうかいの御ハうより、ゆつられ候おわ

ん、しかりといへとも、よう〳〵あるによて、ほんせうもんをくそくして、とかミの十郎検校ニゑいたいをかきて、よね十貳石ニうりわたし候事しつ也、たゝしこの田ニつけて田別ニミつくた米四舛あてつゝ、御さうえいのくしとてハ、きやうしやにいろふはかりなり、もしこの田ニいらん候ハん時ニハ、ほんハうちをゆつられ候、ちやくていのりさうハうのさたとして、あきらめ候へく候、あきらめゑす候物ならハ、ほん物をかへし候へし、よてうりけんの状如件、

永仁四年十二月十六日　　助明在判

助範在判

『ロ裏ニ』「りわうのハうのうりけんのあん」

1006

「正文在文庫」『伊作久長譜中ニ在リ、正文在巻本トアリ』

（端裏書）「へきのしやうおほかた殿より給状」

（日置）へきのちとうしきの事

（久経）こしもつけの入道のゆつりしやうならひにくわんとうあんとの御くたしふミにまかせて、あまいちこかほとハ、

（久経子久長）ちきやうしてのちにこそ、それのそりやうにてハあるへきにて候へとも、（宰府警固）さいふけいこなんとせられ候へハ、いかうにうちまかせたてまつり、ゆつりしやうにハ、あまいちこののちとこそ候へとも、けいこ大事の事に候へハ、いまよりゆつりわたし候ところ如件、

永仁五年三月十八日　　比丘尼忍阿（花押）

1007

『水引執印文書』

（花押）

薩摩國新田宮執印并五大院ゝ主職事、就関東御教書、任重代相傳、被還補了、兼又御年貢事、無懈怠可被致其沙汰之由、所被仰下候也、仍執達如件、

永仁五年六月　日　　左衛門尉朝員奉

執印三郎（道教）兵衛入道殿

1008

『水引執印文書』

（本文書ハ一〇〇七号文書ノ案文、同文ニツキ省略ス）

1009

「山田家文書」『伊作久長譜ニ写在山田七郎右衛門久通トアリ』

嶋津庄内知行分事、所被止領家一乗院所務也、於有限佛神事用途并本家年貢者、任先例、可致沙汰之状、依仰執

達如件、

永仁五年七月五日　　陸奥(宣時)守在判
相模(貞時)守在判

嶋津式部丞殿
同下野彦三(久長)郎左衛門尉殿

1010
「國分宮内澤氏蔵」

下　安樂寺御領日向國馬関田
定補預所職事
左兵衛尉惟宗友時

右以人、補彼職、令執行庄務、寺役以下有限御年貢御公事等、無懈怠可被致其沙汰之狀、所仰如件、庄民等宜承知、敢勿違失、故以下、

永仁五年七月　日

1011
「正文在文庫」「伊作家久長譜中ニ正文在巻本トアリ」

警固番役事、先々分不被取書下云々、所詮、毎年勤仕之条、無相違之上者、不及子細欤、可被存此旨候、恐々謹言、

「永仁五」八月十五日　　忠宗(花押)

下野彦三(久長)郎左衛門尉殿

1012
『正文在岸良氏』

奉寄進
観世音菩薩佛生(ママ)析田事
一所柳迫入牟多、四至東限嶋津田寺田西北南限野際

右、寄進志者、爲　天長地久、殊地頭御方御祈并郡内安穏、別故道阿聖靈頓證佛果、乃至法界衆生平等利益、寄進之狀如件、

永仁五年八月廿八日　　左衛門尉(花押)

1013
「山田家文書」

嶋津庄内知行分領家所務事、関東御教書今日到來、案文進之候、恐々謹言、

永仁五　八月晦日　　忠宗(花押)
式部孫五郎殿

1014
『國分氏文書』

警固番役事、以代官被勤仕候、仍執達如件、

永仁五　九月卅日　　忠宗在判

『此宛國分掃部助殿ナルヘシ』

1015

『臺明寺文書』

肥前國水上寺事、有其沙汰之處、爲関東御祈禱所依帯御下知、被准御家人畢、當寺訴訟事、被存知此旨、可被致沙汰候、仍執達如件、

永仁五年十月廿六日　　家綱(安東)在判　景員在判

平岡右衛門尉殿

『□裏』「水上寺事」

1016

鳴田五段寄進事

寄進狀者、永仁四年五月十一日、衆徒等請取候事者、同六年十月十八日、此者存日寄進、存今程者毎年所當温舛貳石五斗可進之云々、

1017

『冠嶽文書』

奉免

薩摩郡串木野村内冠嶽南山(『両』)神領田畠山野等事

右、當所者、熊野垂跡之砌、大權薩埵之栖、爲長日不退御祈禱所之間、於件田畠山野等、領家御方地利物以下者、任先例、依仰所奉免如件、

永仁五年十月廿八日　　又六(花押)　沙弥道意(『伊作大隅守久長入道』)(花押)　大江景遠(花押)

『忠宗公御代守護代本田左衛門次郎入道道意ト云アレハ考ヘシ』

1018

『水引執印文書』

(端裏書)「ゆつり状」

「此内雖段歩、於令沽却者、一家寄合、不可令承引之狀如件、(道教)(花押)」

永仁五年十一月十一日、新田宮執印職并五大院々主職内、田畠并免田等を重友(ニ脱カ)ゆつりあたふる所也、但一身同心の思ひをなして、をの〳〵ちきやうせらるへし、もしこのゆつり狀をそむきて、ことをさうによせて、惣領そしあひたかひに、わつらひをなすへからす、よてきやうこうのゐらんをたゝんかために、しひちをもておく事如件、

永仁五年十一月十一日　　沙弥道教(花押)

1019

「在忠宗公御譜中」

「正文在田布施衆二階堂三左衛門定行」

懐嶋隠岐入道後家申、子息三郎左衛門尉泰行、暫可参関東由事、所有御免也、可被存其旨之状、依仰執達如件、

永仁五年十二月十日　陸奥守(宣時)(花押)

相模守(貞時)(花押)

上總前司(実政)殿

1020

『正文在官庫』

「雑抄」

嶋津大隅前司(忠時)入道道佛遺領事、無實子之子息跡者、惣領下野前司(久経公)入道道忍可領知之由、所書置之文永八年九月十五日道佛譲状、同年十二月廿四日安堵御下文令披見候了、恐々謹言、

永仁六年四月六日　前上總介(北条実政)(花押)

下野守(忠宗公)殿御返事

「此文書、御譜中ニあり」

「此正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之中ニあり」

1021

下　嶋津御庄大隅方鹿屋院

定補　弁濟使職事

沙弥觀阿

右人、定補任件職畢、兼世沙汰所御年貢以下恒例臨時御公事、無懈怠可致其沙汰状、所仰如此、以下、

永仁六年五月三日

預所(花押)

1022

「正文在文庫」「伊作家久長譜中正文在巻本トアリ」

警固番役事、夏三ヶ月被勤仕候了、仍執達如件、

永仁六　七月十日　忠宗(花押)

下野彦三郎(久長)左衛門尉殿

1023

『入來院文書』

(端裏書)「いしついちはいふん」

入來院分筥崎要害所石築地

裏加佐　追切未(未)俣　小松原崎　國堺　等配分

合拾四丈五尺二寸五分内

清色　三丈八尺六分　楠本三分一加定

塔原　三丈八尺六分　同前

中村　三丈八尺六分　同前

倉野　一丈九尺三分　同前
楠本　一丈二尺四分　除三分一

右、任御教書并注文、來月廿日以前、可令勤仕給之狀如件、

永仁六年七月廿日

（裏書）
「楠本三分一配分事
塔原一尺六寸二分〃〃
中村一尺六寸二分〃〃
清色一尺六寸二分〃〃
倉野九寸一分〃〃〃〃
永仁六七廿」

1024

「写在御文庫二番箱他家文書中」

薩摩國伊集院上神殿次郎太郎祐継令申候當村内田地等事、就四月八日御教書案、請文先進候旱、子細令載申彼狀候旱、所詮、質券買得地事、就今年関東御教書并御事書、自六月中不及御沙汰候之上者、彼掠訴、不及御許容候哉、此等之子細、上野平九郎入道禪意可令言上□、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

永仁六年八月十日　　僧俊助（花押）

進上　御奉行所

1025

「正文在文庫」「伊作家久長譜中正文在巻本トアリ」

伊達判官代入道念性女子尼妙海代定佛与嶋津三郎左衞門尉忠長（久長）代景光、相論信濃國大田庄神代郷内中尾村事、

右、訴陳狀子細雖多、所詮、如妙海所進大隅入道道佛（忠時）正嘉二年十一月廿四日狀者、南殿仁親久於者志候之上、志深久見佐世給候倍者、信濃國大田乃神代乃中尾乃沙汰者世佐世可給候、所乃物共此様於可存知也、穴賢〻〻、如狀者、一旦計付當村事之由所見也、難稱讓狀、而道佛後家尼西忍者、依爲妙海之伯母、以彼狀、自正嘉至于正應四年、三十余年知行之由、妙海令申之處、道佛娘尼忍覺扶持妙海之間、不限當村、充給自余屋敷名田之上、西忍一期依令領掌、中尾村爲芳恩、自然雖送年月、正應二年西忍死去之後、改易之由、忠長申之、妙海不得別田屋敷、無扶持儀之由雖稱、如忠長所進妙海書狀等者、件村事、令懇望之、忠長亡父下野前司久時（久経）忍覺等、依相親同家之由、妙海承伏之間、旁以爲芳恩之由、忠長所申非無謂、仍妙海之訴訟、非沙汰之限者、依鎌倉殿仰、下知如件、

永仁六年九月三日

陸奥守平朝臣(宣時)(花押)
相模守平朝臣(貞時)(花押)

1026

「伊作家久長譜中」
「正文在巻本」

中尾村事、八月廿八日御引付問答仕候、九月三日合御評定、無別子細、被下御下知候了、仍案文令書進候、是にての御沙汰共者、御文書等存知之分者、相沙汰仕候て、御下知申給候了、國にての御沙汰、何躰候らんと、無心本相存候、伊作庄御沙汰者、御下知下事候間、ゆゝしき御大事候、能〻御了簡候て、可有御番候、如先〻ニ僻義なと申候ハん人〳〵、難治御事候、所務事、御下知顯然ニ候に、御代官非法仕候之由承候事、歎存候、能〻可有御斟酌候、以此旨、可有御披露候、恐〻謹言、

(永仁六年)九月廿五日　左衞門尉盛景(花押)

進上　姉崎八郎右衞門入道殿

1027

『調所氏譜祐恒傳』

永仁六年戊戌十月朔日、祐恒授書以世所承職邑、傳諸恒幸、國守許之、(亦書残欠莫知其詳、)

1028

□母之處分所〻、不可違乱□□乱時者、不可有子息之儀□□不可有相違之狀如件、□

「右躰如存知」永仁六年十月一日　主神司□

□所

「永仁六年十月廿三日鹿児嶋郡安堵御下文原文写入ルヘシ」(本文書ナシ)

1029

『權執印文書』
(端裏書)「新田宮權執印代重申永仁六十廿四」

薩摩國八幡新田宮權執印妙慶代僧榮仙重言上

同國伊作庄地頭彦三郎左衞門尉忠長被拘惜妙慶所從二郎女童間、雖申付談議所七箇度奉書、終依不被糺返、就訴申、十月十五日以前、召具生口可參決由、雖被下兩度御教書、不及請文散狀上者、任相傳道理、可糺返由、欲蒙御成敗子細事、

副進　二通御教書案　一通先進早、

件條、前〻巨細言上事舊畢、而忠長無理至極之間、不能參陳之上者、早任相傳服仕之旨、可糺返之由、爲蒙御成敗、重言上如件、

永仁六年十月　日

1030

『比志島氏文書』

警固番役事、以代官被勤仕候了、仍執達如件、

永仁六

十二月一日　　忠宗(花押)

比志嶋(忠範)孫太郎殿

（表紙）

忠宗公　自正安元年
貞久公　至嘉元四年

前編　舊記雜錄　卷十

永仁六　【後伏見】正安三　【後二条】乾元一　嘉元三　徳治二
【花園】延慶三　應長一　正和五　【是ヨリ下巻】
自正安元年二年庚子
至嘉元四年正和五年
四代忠宗公

1031

正安元年己亥、是年四月改元正安、自三月以前猶是永仁七年、夏四月二十五日改元、拠大日本史、
二年庚子、事缺不書、
三年辛丑春正月二十一日、
後伏見天皇傳位於
後二條天皇、拠大日本史、
乾元元年壬寅、是年十一月改元乾元、自十月以前猶是正安四年、冬十一月二十一日改元、拠大日本史、
嘉元元年癸卯、是年八月改元嘉元、自七月以前猶是乾元二年、秋八月五日改元、拠大日本史、
二年甲辰、事缺不書、
三年乙巳秋八月七日、幕府命北條宣時・北條貞時傳旨、
使　公領土黒平太左衞門尉法師道忍舊邑、拠道義公旧譜、土黒道忍旧邑不詳所在、

1032

下　嶋津庄大隅方鹿屋院
定補　弁濟使職事
沙弥觀阿

右人、定補任件職了、兼世之處、雖補定心、爲重代之間、令計補觀阿了、定心去年於納取分者、忿可糺返也、御年貢以下恒例臨時御公事、無懈怠可致沙汰之狀、所仰如件、以下、
永仁七年二月一日
預所（花押）

1033

『國分寺文書』

九州大社以下修造遲怠、恒例佛神事凌夷事、去年十二月一日関東御教書并事如此、任仰下之旨、可令興行之由、相觸薩摩國中院主等、且濫悪不法之輩者、不日可被注申交名也、仍執達如件、

永仁七年二月廿四日　　前上總介在判

下野守殿

1034

『國分寺文書』

九州大社以下修造遲怠、恒例佛神事凌夷事、去年十二月一日関東御教書并御事書、同年二月廿四日御施行如此、早守被仰下之旨、可被致沙汰也、仍執達如件、

永仁七年四月一日　　下野守在判

1035

『臺明寺文書』

依買得御沙汰、當山析田分税所介篤秀代阿闍梨行秀申狀案加一見候處、条々□實相違之間、粗令注申事子細候、

一彼申狀云、被停止當國臺明寺衆徒等濫妨狼藉、篤秀重代相傳所領内質券沽却田地等事云々、

此條狼藉者、其色目何事乎、不審也、凡者篤秀掠籠事於関東御事書、守護御代官賀嶋四郎左衛門尉季村在國之時、可被打渡當山往古析田等之由捧申狀、頻雖訴申、件析田等者、爲嚴重佛聖燈油田之上、爲正八幡宮御神領、文永・正應兩度賜関東御下知御教書等、令安堵田地等也、隨御事書無相違之由、載于請文狀、陳之旱、仍所申有其謂欤之間、季村終以不打渡□上府旱、爰聞、二月之比爲篤秀、同析田恒次名内下河津留五段、付于作人、致譴責々取所當米旱、此条乍致訴訟、無御成敗已前、猥責取所當米之間、衆徒等雖含愁欝、社家御沙汰最中之上者、謹奉待上裁之處、返致濫妨狼藉之由、訴申之条、行秀不實爲顯然者乎、

一同狀云、質券沽却田地等云々、

此條、當山析田等中、質券地無之、此又不實也、尤可有尋御沙汰欤、

一同狀云、彼所々者、篤秀先祖相傳所領内、爲質券沽却地之間、篤秀令知行之處、乍号関東御願所、衆徒背御徳政、致濫妨云々、

此條紆謀申狀也、其故者、如先段申、季村在國之時、篤秀雖致訴訟、不遂其節、季村上府之上者、爲當時析

田無相違之處、篤秀令知行之由、訴申之条存外次第也、以前条〻、行秀不實申狀大略如斯、抑當山是自　天智天皇御宇以來、被置定青葉鳳笛貢御所、自右大將家御代以後者、奉致　將軍家御祈禱之間、以上件析田等備佛聖燈油、奉祈　公家武家御運子細、云社家所進申狀、云守護所進請文、具言上先早、不遑羅縷、仍行秀不實申詞、粗勘錄如件、

永仁七年卯月廿一日（即正安元年也）

將軍家御祈禱所大隅國臺明寺衆徒等

1036

『比志嶋文書』

源忠範謹辞

譲渡嫡子彦一丸薩摩國滿家院内比志嶋・河田・西俣・城前田・上原薗、已上五箇所名主□（職事カ）

右、件五箇所名主職者、忠範之重代相傳所領也、然間、調渡（ママ）文書不残一紙、彦一丸仁譲渡□（畢カ）、但於有限御年貢・召物等者、任先例、可令勤仕也、以此趣、無永代相違、可令知行之狀如件、

正安元年八月　日　　源忠範（花押）

1037

『仝』

ゆミやとる身ハ、おほやけわたくしにつけて、定しせんの事いてきたるあひた、そんちのために（かき脱カ）をく所也、よく〳〵このむねをそんちあるへし、

一　せいの御めにたかいまいらすへからす、ようさくてん事ハ、たうしニたかふへからす、御一このほとは、御はからひにしたかふへき也、

一　中はらのあま御せんの御事、もしの事もあらん時ハ、ひしゝまの内下しやうふたにの水田、ならひにそのさんやらにおきてハ、あま御せんの一このほとハ、ようさくてんにまいらすへき也、但そのハほりの内たるあひた、せんれいより、御くうしあひいろはす、水田さんやのはう〳〵のなし物ハ、ひこいち丸かさたとして、わきまへかわるへき也、但大事のさくれうなんとのいてきたらん時ハ、あんないを申へし、

一　女房の分、くきの山五段・白木山五段・上しやうふたに五段卅・同所のさんやハ、年來つくりきたるふん也、又ゐそのにハ、いや二らうかやしき・せいたらうめかその、かのその〳〵ハ、ねんらいのほりのたるうゑハ、御公事あひいろはす、水田にをいてハ、かきり

ある地頭米・かちし・さくれうまてもはふきあつへき也、但もしふほうのきあらハ、はうれいにまかせて、あつへからす、

一　所存あるによて、おとゝにわうまろ・いもうとゝものなかにも、一段たりといへとも、わけあたへさる所也、もしかれらか中に、わうけんのしんいてきたて、自筆の狀とかうして、子細を申といふとも、もちうへからす、この狀よりほかハ、いさゝかのせうそくまても、たれ〳〵の中にも、かきおかさるもの也、

一　五かミやうさうはくの事

こほけうの御ハうの狀文にめいはくなりといへとも、そんちのために申おく所也、あん内をしらさる人ハ、はしそうりやうと申なり、そのきにハあらす、ひらた□くわんとある事、ゆつりしやうのほか、内〻かきおかれたる物候にミへたり、かつハこほさつハうの故道願ニ、まこゆつりに、かなをもてゆつられたる狀文にもミへたり、しかりといへとも、ゆめ〳〵かの人〳〵すゑ〳〵までも、ゐこんあるへからす、ことなるふほうあらん時ハ、したしくうとく、かの人〳〵のかたにうとからさらん人に申あはせて、けうくんをせさすへき也、なをもてせういんなくハ、申におよはす、このてう〳〵、くあんのとをりそんちのために、わさとかなをもて、かきをく也、さたのならい、時による事に候へハ、ちかふ事もそ候ハんすらん、かねてしるにおよはす候、もしそのきなく候ハ、ゆめ〳〵このきをそむかるましく候、あなかしこ〳〵、

正安元年八月　日　　源忠範（花押）

1038

『入來院氏臣岡元氏文書』

（端裏書）「ひたちとの□安堵　正校了　重世上」

ゆつりまいらせ候所りやうの事

一所しふやのやしき田畠たてのゝ事、

しゝさかひ、本せうもんにみえて候、

一所みまさかの國かわへ（河会）十丁南内かめいし（亀石）、はしたにの（土師谷）

村、しゝさかひ、本せうもんにみえて候、

所あわの國大野新庄北方内六方重世ちきやうのふん、

しゝさかひ、本わけ狀にみえて候、

一所さつまの國入きのいんの内下そゑ（副田）たの村、しゝさかひ、本せうもんにみえて候、

右の所〻ハ、御一（一向）このほとハ、いかう御しんたいある

へく候、御一このゝちハ、御はからひとして、しけよかしそくにたふへく候、下人めらか事も、もんておなし事たるへく候、よて狀如件、

正安元年八月十七日　　平重世上在判

ひたち殿申させ給候へ、

任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、

元應二年十二月廿日

（高時）相模守御判

（貞顯）前武藏守御判

1039

（鹿屋院）當院弁濟使職事、收納使頼祐一具被仰付候之處、今年陳頭役當院相當候上者、彼職觀阿如元、引得陳頭役、無懈怠可有其沙汰、但明春早〻企參上、可被明申候、若無其儀者、有後悔欤由所候也、恐〻謹言、

正安元年九月廿日　　吉國奉

謹上　右馬大夫入道殿

1040

『正文在官庫』

一　鎮西引付、永仁七十四金澤上總前司代『鎮西探題北条実政』

一番

越後九郎

伊勢民部太夫

古沼三郎兵衛尉

安岐小四郎

伊勢左衛門入道

二番

筑後前司武藤

薩摩六郎左衛門尉

久野左近將監

蕪田四郎次郎

長門掃部左衛門尉

三番

左近藏人大友

戸次太郎左衛門尉

豊田太郎左衛門尉

齋藤孫四郎

佐野十郎

下野守忠宗嶋津

山城治部丞

野依越前房

平岡右衛門尉

式部藏人

豊前〻司

安冨左近將監

佐渡左助

外記四郎兵衛

和泉右衛門次郎

澁谷河内守

豊後左衛門太郎

日奈古孫四郎

伊賀左衛門尉

伊地知八郎

「此写有之ト忠宗公御譜中ニ在リ」

（「旧典類聚」十三所収鎮西引付記ハ永仁七年四月十日トアリ）

1041 『國分氏文書』

警固番役事、去秋分以代官被勤仕候、仍執達如件、

正安元十月十五日　　忠宗

國分掃部助殿

1042 「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長譜中ニ在リ」

伊作(久長)殿警固御番役事、爲御代官、令勤仕給候旱、恐〻謹言、

「正安元」十月廿日　　本性(花押)

實相御房

「朱カキ」「右横折之裏ニ有之」

「いさくけいこはんのうけとり」

1043 「延時氏文書」

薩摩國御家人在國司道嗣代道□(重カ)申公事析田事、訴狀具書如此、早可被参決也、仍執達如件、

正安元年十二月十七日　　前上總介(実政)(花押)

延時三郎殿

1044 『入來本田氏文書』

ゆつりわたすさつまのくにやまとのゐんの内はりわらのむらの田畠くわうや等事

四至ほんせうもんにミへたり

右のむらハ、いゐやすさうてんのそりやうなり、しかるあひた、せうふんたりといゐとも、かのむらをさしわけてしそくくまをに丸(『熊鬼』)に、なかきよをかきて、ゆつりあたへり、たゝし、たい〳〵の御くたしふミほんもんしよのしやうもんらハ、ちやくしかうしゆ丸にゆつりあたへ了、しかるあひた、あんもんのうらをふんして、あてたふところなり、はやくこれをもて、くわんとうあんとの御くたしふミを申給へきなり、よて爲後日讓狀如件、

正安二年歳次庚子六月十五日　　藤原家泰(花押)

「右ノウラニ」任此狀、可令領掌之由、依仰下知如件、

嘉元三年六月一日　　相模守(花押)

「北条貞時ナラン、執權職ニテ応長元十月卒ト花押藏ニミヘタリ」

1045 『本田静観譜中』

正安二年庚子六月十五日、自藤原家泰賈取針原村證文左記之、　薩家泰者千葉介常胤之三男平三郎太夫胤國之孫、山門院之郡司童名熊太郎、秀忠之曾孫也、不知何号藤原矣、系図記別紙、又曰、此年貞久公即年三十有二、

1046

『入來本田氏文書也』

沽渡　薩摩國山門院内針原村田畠荒野等事

四至　本證文見タリ、

右、當村者、家泰相傳所帯也、而先季之比、同國御家人時吉太郎通泰令沽却早、爰自彼通泰之手、本田左衞門尉殿買取之、被知行之處、就関東御徳政明文、家泰依爲本主取返之、雖令領知、買得地事、自今以後者、不能禁遏之旨、重被下御事書之間、家泰依有要用、用途陸拾貫文限永代、相副曽祖父秀忠讓狀案文并関東安堵御下文案文等、奉沽渡本田左衞門尉殿畢、然者、無他妨可被領知也、且又以此狀、可被申給関東安堵候、仍爲後代證文之狀如件、

正安二年歳次庚子六月十五日　藤原家泰（花押）

1047

所見家泰證狀案文左記之、此狀并御下文合四通嫡家持之、本書裏有継印、但書判、

『入來本田氏文書也』

（本文書ハ一五九号文書ト同文ニツキ省略ス）

1048

「古写在垂水遠矢十郎兵衞」

異國要害構石築地破損并楯征矢旗等事、就于先度御教書、堅被相觸候、于今延引之条、何条次第候哉、所詮、重被仰下候上者、云御分領、云名主分、不日可被致其沙汰候、但田地十町別楯一枚、五町別旗一流長八尺、一町別征矢二筋ッヽ、可有御存知其旨候、恐々謹言、

正安二年六月廿一日　守護代藤原範政在判

謹上　加治木郡司殿

1049

『写在官庫』

鎮西検断事、早撰器量之仁、相副國々守護人、可被致嚴密之沙汰之狀、依仰執達如件、

正安二年六月廿四日　「宣時」陸奥守在判　（貞時）相模守在判

『北条』『実政』上總前司殿

「此文書、忠宗公御譜中ニ在リ」

1050

『正文』

薩摩國谷山郡山田・上別符兩村地頭大隅式部孫五郎宗久（山田道慶）与當郡々司谷山五郎資忠相論所務条々

一　弘安十年以後郡司抑留地頭得分由事

右、當郡惣地頭職者、宗久曽祖父豊後守忠久、右大將家御時建久年中令拜領之間、宗久親父忠實傳領之、分

讓子息等内、山田・上別符兩村者、宗久讓得畢、而地頭与郡司所務相論之間、就去弘安三年宰府注進狀、同十年十月三日兩方預裁許畢、如狀者、於下地者、郡司進止之由所見也、爰背彼御下知、自弘安元年至同十年、抑留所當以下得分等之由、宗久雖申之、如同御下知狀者、兩方所申無指實證之間、皆以被弃置畢、此上守先例、可致所務沙汰云々、然者彼裁許以前至未進者、可及訴訟之處、依無其儀欤、未進事、不被載御下知篇目、皆以被弃置之由被仰下之上者、不及其沙汰之条、無異儀、然者難稱御下知違背、是一、次郡司抑留御下知以後地頭得分之由、地頭令申之處、如資忠陳者、検注事、既遂其節、致談合之處、宗久背父祖代々之例、不可除往古神田并竿失以下立用等之旨、支申之、不結目錄之条、併宗久之結構也、更非資忠之素意云々、相互寄事於左右、不遂検注之上者、非自由之抑留、是二、次同年貢未濟事、或号出舉、或稱借米、令借用畢、隨可便補當村年貢之由載狀畢、而未濟之由地頭及訴訟之條、無謂之旨、郡司雖陳之、於出舉物者、不可有其沙汰之由、去永仁五年被定法畢、彼證文則可被立用當村年貢之旨、雖載之、爲出舉證文之由、有所見之間、至出舉分者不能立用、至借米者無其制之上者、弘安御下知以後年々分遂立用結解、可致其沙汰焉、

一　地頭他所造作時召仕百姓否事

右、如同御下知者、一當郡内地頭屋敷事、資忠則於下地者、郡司進止也、至地頭屋敷者、惣領土用熊丸讓得畢、而猶稱次郎丸分、可構屋敷之旨令申之条、無其謂云々、如道智申者、地頭屋敷爲一所事者、地頭一人知行一郡時事也、既分讓子息等之上、無屋敷者、居何所可致所務沙汰哉云々、地頭屋敷事、道智雖申子細、於下地者、郡司進止之条、無異儀欤、至屋敷者、次郎丸舎兄土用熊丸爲惣領之間、讓得畢、分讓村々於子息之刻、面々可構屋敷之由、及訴訟之条、爲非據之旨、郡司所申非無其謂、仍地頭訴訟不及沙汰云々者、地頭屋敷事、惣領依讓得、自余子息等分不及沙汰之由、被載御下知之間、不及異儀、隨如宗久訴狀者、存後訴之旨書載之間、無子細欤、是一、次他所造作之時、地頭召仕人夫否事、就彼御下知、難被信用之由、資忠雖陳之、地頭或切宛用途於土民、或當催一郡事、禁制之間、不及沙汰、其外云地頭方、云郡司方、糺巡役、且止苛法過分之儀、且存撫民之儀、可召仕矣、

一　上別符爲永吉地頭令進止下地否事

右、地頭則嶋津庄荒野開發之地、爲永吉地頭進止之条、云御下知、云傍例、顯然間訴之、郡司亦爲永吉地頭進止事、無其例之旨陳之者、如宗久所進貞應二年四月十八日御下文者、可令早爲地頭代沙汰、開發嶋津庄日向方本庄内荒野事、件荒野爲地頭代沙汰令開作、云領家御年貢、云地頭分米、無懈怠可弁濟云々、就彼下文、上別符者、爲永吉地頭進止之由雖申之、以島津庄日向方本庄荒野開發證文、備進薩摩方寄郡證文之条、難指南、就中、如弘安御下知者、於下地者、郡司可爲進止之由被載畢、當別符於永吉地頭令進止者、先相論之時、尤可申子細之處、依無其儀、山田・上別符兩村下地可爲郡司進止之由、被載之間、宜爲越訴欤、仍地頭訴訟不及沙汰焉、

一　地頭博多上時夫駄員數事

右、地頭則兩名百姓數十人也、而参上當津之時、僅夫二人・馬一疋出之、其外不可立之由支申、無謂之由訴之、郡司又兩村御公事勤仕百姓不幾之間、國司領家地頭郡司四方公事繁多之處、不顧土民煩、如地頭一円可召仕之由、及濫訴、頗非正儀之旨陳之者、當村國司領家地頭郡司相交、各可濟年貢課役之条、無異論、然者如載先段、且存土民之煩費、且糺公事巡役、且任先例之員數、可召仕矣、

一　郡司望補傍官上司否事

右、如資忠所進九月三日付承久三、六波羅狀案者、兵衛尉忠光申谷山郡事、折紙副書、進覧之候、任先例、成賜請所廳宣、可安堵土民之由歎申候、御計候者、可宜候欤云々、如同所進九月四日權右中弁狀者、薩摩國谷山郡司兵衛尉忠光申當郡請所事、任先例、可計沙汰之由承候畢、可成給廳宣之狀如件云々者、郡司帯彼狀等之上、領家國司共以爲往古請所之由令申之處、請所承伏之由、宗久陳之、爲往古請所之条、宗久不論申之上、六波羅狀等顯然之間、今更難稱上司焉、

一　召符違背事

右、相互雖申子細、及訴陳、遂問答之上者、非沙汰之限矣、

一　桑下地利物并直人等得分事

右、如資忠所進文永九年六月日當郡地頭代以下直人等連署狀者、谷山郡注進文永九年地頭御方桑數目錄事、合三百九十六本、内除竿失分百二本、残貳百九十四本

定、右目錄如件云々、如同年六月十三日地頭代狀者、谷山郡注進文永九年地頭御方桑竿失支配事、合久吉三十九本・圖師廿四本・公文廿四本・郡司代十五本、右竿失、郡司者佰本別仁十本、惣公文・圖師者百本仁六本、郡司代者百本別仁四本、任先例、竿失支配之狀如件云々者、當郡者不限地頭郡司、所令進納國司領家年貢也、然者尤云地頭、云郡司、可致公平沙汰、爰桑下地利并桑代事、地頭郡司共以令取得分之条勿論之間、地頭段別四舛令檢納之条、又以無異論欤、然者厖弱地利也、桑者不依畠地多少增得分事、專蚕業術故也、仍可致公平之業、但不可寄事於有名無實桑下、於如然桑下者、可濟畠地所當、凡不可及二重濟物、是一、次文永九年馬次郎入道蓮實兩通連署狀者、不能信用之由宗久雖申之、不加指謀書難之上、如資忠所進十一月十二日付文永十、宗久代平山四郎家直法名直心和字狀者、地頭米請取候波牟爲仁、使者進候、任請取之員數下給可候、兼又先地頭御代官馬次郎入道無沙汰之間、借米登号天、任下給請取候氣留由承云々、而宗久於蓮實狀者、雖論申、至直心狀者、無異論之間、承伏之、代官直心以蓮實爲先代官由、書載畢、然者所務代官狀難被弃置之上、爲先例之旨、郡司令申之處、不帯指一紙狀、地頭以胸臆所難申、難指南、加之、國司領家地頭郡司相交之地、不相綺代官沙汰人、郡司一人可致地下沙汰之由、地頭令申之条、爲非據欤、是二、次蓮實爲地頭代否、可被問證人之旨、地頭雖申之、證文顯然之時、難及證人、是三、次蓮實一族資忠召仕之旨、宗久同雖稱之、論申之上、彼蓮實者宗久母堂平氏後見也、仍宗久親父忠眞召仕代官之由、資忠令申之處、非代官之旨、雖陳之、爲母堂後見事無異論、所詮、爲代官之由、直心出狀之間、不及子細、是四、次蓮實當時資忠召仕之由、宗久雖申之、論申之間、爲胸臆欤、是五、然則蓮實非代官之由、宗久雖申之、爲代官之旨、直心出狀之上者、(ママ)者爲代官之条勿論也、任彼狀、可致其沙汰焉、

一　文應二年二月日水田數目錄以下事

右、如資忠所進地頭代五郎左衞門入道正嘉三年四月十五日狀者、避申郡司堀内并門田四至内事、右件於四至内者、且任先例、水田所當畠地地利物并万雜公事、全不可有其沙汰云々、四至略之、如同所進正元々年十月日大隅守忠時法名道佛狀者、下薩摩國谷山郡、定遣實檢使事、彈正忠中原宗職、右以人遂實檢、雖段歩無偏頗、載起請文

之詞、可令造進目錄狀如件云々、如宗職同二年二月廿日狀者、谷山郡避申郡司所門田四至內事、右件於四至內者、任先例、水田所當畠地々利物并万雜公事、全不可有其沙汰云々、四至略之、如同所進地頭代五郎左衞門入道并郡司代加判文應二年二月狀者、文應元年地頭內檢水田數目錄者、除立用免等結目錄之由所見也、如彼年內檢竿失同人狀者、久吉五町・郡司代二町・田所一町五段・圖師一町五段、右所宛如件云々者、帶文應二年兩通五郎左衞門入道狀等、任彼狀、神田寺田國作庄用地頭代給久吉郡司代田所圖師給等、可引募之由令申之處、彼狀者、爲地頭又代官狀之間、不足御信用之由、宗久雖申之、爲又代官之旨、自稱畢、不及異儀欤、凡宗久普代惣地頭也、尤備進取帳目錄以下證文等、可申子細之處、稱紛失之由、不及出帶、至郡司所進目錄等者、号又代官狀、雖嫌申之、爲又代官之旨領狀之上者、代官之条可謂承伏、是一、加之、正嘉三年四月十五日狀事、非地頭代者、爭連々可召如此狀哉、隨又正元々年十月宗久祖父大隅守忠時法名道佛差下實檢使彈正忠宗職畢、彼宗職又守正嘉三年五郎左衞門入道狀、出同前狀之由所見分明也、但正嘉正元兩通狀事、非指論所之上、先日郡司令拜領畢、旁不及其沙汰、是二、但正元道佛狀并宗職狀等、始引付問答之時出帶之間、不可申子細之旨、宗久雖申之、就先日出帶狀、敵人加其難之時、於引付備進准色狀之条、非無傍例、而号始備進、不可申子細之由申之上者、彼狀可謂勿論、是三、然則且依先例、且任彼狀、有限於立用免者、可致其沙汰矣、

一　當村內神田并久吉薗事

右、當村內長尾大明神黑丸權現兩所數地事、号建曆元年惣庄下知案、郡司雖令備進、如彼狀者、寺社大宮司座主職者、自往古爲領家成敗、于今無相違之處、當地頭構今案、依令押領、恒例神事及違例云々、事實者太不隱便、早停止押領、可依先例云々、然者悉被除置當社免田之条、無所見欤、但如文應二年二月日水田數目錄者、除神田三町九段云々、彼內當社爲神田之由令申欤、件文應帳難被弃破之旨、載先段之間、長尾以下神田事、任先例、不可有相違欤、次久吉薗事、郡司雖申子細、無所見之間、不及沙汰焉、

一　野畠地利物事

右、如郡司所進沙汰人紀三郎入道正應二年畠地所當物号地頭責取注文者、山田・上別符畠地所當四石三斗鍬

二口地頭責取之由所見也者、件畠地利物事、遂検注郡司出徴符之時、地頭直納之条勿論也、而寄事於左右、地頭抑留検注之旨訴申之處、郡司一向打止之由、地頭披陳之間、検注事相論之趣、爲胸臆之上者、自今以後遂検注、任先例、可致沙汰、是一、次正應元年所當事、相互雖申子細、所詮、遂検注之由、各自稱畢、仍可致弁濟、是二、次地頭乍責取所當、不給与返抄於百姓由事、捧沙汰人紀三郎入道注文、郡司雖申子細、彼入道者非地頭代、爲兩方沙汰人之由、郡司申之處、郡司一人召仕之由地頭申之上者、以彼狀難被指南欤、將又返抄事、是又胸臆也、但於自今以後者、究濟之時、不可抑留返抄、是三、次地頭致獨検注之由、郡司雖申之、論申之上、無實證之間、不及沙汰、是四、次百姓等出傳馬之處、地頭不叙用之由郡司雖申之、爲胸臆之間、子細同前、是五、然則於自今以後者、任先例遂検注、可致其沙汰、至正應元年分者、令遂検注之間、可弁濟之由、可被仰下矣、

一　白苧事

右、白苧於春毛者、爲領家得分之由、郡司申之處、非領家得分、郡司令取之由地頭雖申之、爲領家進物之由郡司自稱之上者、地頭不及相綺、是一、次令苅彼白苧之時、相副直人之条、爲先例之處、非先例之由地頭雖申之、相分春毛夏毛、地頭領家検内之条、無異儀欤、不限白苧一事、相副沙汰人之上者、尤相副直人可致公平之沙汰、是二、次邊津羅苧事、爲薗主得分之由、郡司申之處、無先例之旨、同雖申之、邊津羅苧不宛給薗主間、依不作苧、年貢不全之由、郡司所申非無子細、仍於邊津羅苧者、春夏共以宛給薗主、令滿作者、可爲公平、是三、然則於自今以後者、可相副沙汰人也、至邊津羅苧者、可宛給薗主焉、

一　地頭用并地頭代用事

右、郡司則惣領引募畢、仍彼給免以下条々、郡司賜別納御下文者也、庶子分可引募之由、令申之条、無謂之旨訴之、地頭亦押領承伏畢、惣領於引募地頭代用者、爭庶子分可有差別哉之由陳之者、如郡司所進文應二年水田數目錄者、地頭用一町六段代一町三段云々、如彼狀者、就得田、如此給分立除之由、所見也、然者爲浮免欤、於爲地免者、郡司所申雖非無子細、爲浮免之間、糺一郡知行之分限、宗久分地頭給等可引募矣、

一　宗久異賊合戰忠否事

右、郡司則弘安四年宗久爲十余歳之處、不致合戰之

条、不忠之由訴之、地頭亦幼少之間、以代官致合戰之旨陳之者、宗久幼少之由陳申之上、今更彼忠否事、不及尋成敗焉、

一　悪口事

右、郡司則越州(兼時)御下向之時、於引付問答之座、阿礼加登吐悪口畢、可被罪科之由訴之、地頭亦阿礼加乃正字於不知云々、非指悪口之間、不及沙汰矣、

一　宗久以非據押取當村百姓半次郎入道并源次郎男其身以下資財雜物、追捕家内、苅取作毛由事、

右、如地頭所進正應元年八月十二日半次郎入道白狀者、彼馬盗人新藤三者、次郎三郎加爲仁波叔父也、其縁者仁付候天、入道加許仁來候天、訪天候仁、雨不利、源次郎加許居候天雨止天、行土申候江波、其夜曽古仁留候天、荷鞍於取候天、馬於盗天罷候仁付天、同意仁依奉、被召置候事實正仁候云々、如同所進同年七月十九日源次郎男白狀者、子細雖多、所詮、彼馬盗人事不相綺之上、不存知之由載之、如郡司所進七月廿五日(付正応元年)地頭代直心狀者、半次郎入道加間事、馬盗人乃子細仁依天、致其沙汰候、又源次郎事同類仁候、且彼盗馬本品世利、馬主沙汰取候上者、不及御不審欤云々者、捧伴次郎入道并源次郎男等之白狀、稱同意盗人新藤三、地頭致其沙汰之条、爲非據欤、如彼白狀者、件兩人不相綺之由所見也、併爲厭狀欤、加之、如地頭代直心狀者、依馬盗人之子細、致其沙汰之由載之畢、且又如宗久陳狀者、伴二郎入道子息童一人之外不召取、彼童居住他所之上者、可召給云々、郡司捧追捕物注文訴申之處、或致同意沙汰之由載之、或召給身代之旨稱申之条、可謂承伏欤、如此追捕物承伏一事之時、被懸多分之条、爲傍例欤、然者、於彼追捕物者、任注文可令糺返焉、

一　号長夫日食代、被押取同村住人平太郎男馬(栗毛駄)事、

右、長夫事、宛給日食、可召仕長夫之条、被定置畢、而宛給日食之条、無先例之由、地頭令申之条、爲非據欤、然者於自今以後者、宛給日食可召仕也、次取馬於質由事、背地頭口入、不弁濟利銭之間、地頭依爲百姓取質令償之条、非無謂之上、郡司無重申旨之上者、不及子細矣、

一　宗久稱有隠畠咎、追捕百姓太郎男住宅、押取身代六人由事、

右、彼隠畠事、稱有畠主太郎男白狀、或令追捕、或責取過析十五貫文之間、談義所沙汰之時、致訴訟畢、而

於過析者、雖致其沙汰、於資財者無其儀云々、然者過析事領狀畢、凡正應元年檢畠事、雖遂檢畠、不取所當之間、不出返抄處、郡司掠申之由載陳狀畢、而彼年畠地事、稱隱畠、不取所當之由、自稱之上、何可及罪科哉、就中、郡司地頭相並致檢注之上、如此荒野之畠地、非定畠儀之間、隨于時開作之条、畠地之習也、難處重科、然者、於過怠錢十五貫文者、不日可令糺返、至追捕者論申之上、無實證之間、不及沙汰焉、

一　稱有罪科、取流与一男身代由事、

右、當別符百姓三郎貫首、爲宗久雖被取身代以下資財糺返之由、兩方自稱之間、不及子細、是一、次以彼三郎貫首爲椎盗人之由、与一男就訴申、可爲奏事不實罪科之由、懸置之處、顧不實之咎逃出之刻、見合之留置之由、地頭雖陳之、根本爲輕罪之間、難及罪科之上、奏事不實罪科事、無其沙汰之處、召取其身、行罪科之条、爲非據欤、是二、次郡司方沙汰人王平太入道懸置与一男之条、令存知畢、彼入道雖死去、子息現在之上者、可被尋問之由、地頭雖申之、縱雖懸置、構不實之咎、難及罪科之間、不及尋問、是三、然則召置与一男之条、地頭領狀之上者、召出彼男、可任進退意之由、可被仰含矣、

一　地頭押取郡司方沙汰人紀三郎入道身代二人由事

右、押取彼紀三郎入道身代二人之由、郡司雖申之、出擧事爲尋沙汰、雖召置身代紀三郎入道、勾引取彼身代之間、地頭可致沙汰之由、可蒙御成敗之旨、載陳狀畢、然者彼負物事、過年紀之上、帶皆納返抄之由、郡司令申之處、地頭無申旨之間、云過年紀之段、云帶返抄之篇、無異論欤、此上不及身代沙汰哉、爰地頭紀三郎入道爲人勾引之由懸置之旨、雖申之、彼負物事、不及沙汰之由、被裁許之上者、依爲枝葉、非沙汰限焉、

一　山田村住人四郎次郎男娘師若女号芋盗人、押取其身、責取巨多用途由事、

右、地頭所進正應二年九月五日師若女母白狀者、藤次郎加芋盗取之由稱之、責取錢貨三貫文旨、郡司訴申之處、白狀顯然之由雖稱之、責取錢貨事、無陳答欤、於三百以下盗犯者、以一倍可糺返之由、被定置畢、而責取参貫文過析之条、違式目之間、於彼錢者、可令糺返本主矣、

一　上別符住人大藤太号有隱桑咎、以不實押取身代四人由事、

右、稱隱桑、押取大藤太身代四人、責取過析十六貫文

之由、郡司訴申之處、彼桑五十余本現在之處、令隱密之畢、而分限過怠三貫文所致弁也、何十六貫文之由可掠申哉之旨、地頭載陳狀畢、縱依爲百姓之習、雖隱桑、隨于聞出可取有限桑代之處、及過怠之条、非據之至也、就中、隱桑事、論申之上、無實證欤、然者至彼過怠者、令糺返本主、可致有限桑代之沙汰、次爲三貫文過怠之由、地頭雖陳之、以非據責取過析之旨、訴申之時、爲少分之由、雖載陳狀、難被許容之間、以十六貫文可令糺返、次押取資物之由、郡司雖申之、無實證之間、不及沙汰焉、

一　上別符久木野次郎男号有隱畠咎、押取其身以下身代四人并馬二疋、追捕家内、捜取資財物、被責取十六貫文用途由事、

右、當別符作畠者、遂内検濟所當之条、兩方無異論欤、而地頭不遂内検之由、乍令自稱、号有隱畠咎、責取過析十六貫文之条、頗爲非據欤、爰五貫文致弁之間、請取畢、所残者爲不實之由雖申之、如宗久初陳者、無異論之上者、可令糺返本主資財雜物馬等者、論申之間不及沙汰矣、

一　宗久背先例入物時、抑留坊仕、數日令召仕由事、

右、郡司則坊仕者、一日一夜勤仕之条先例也、而或四五日、或五六ヶ日召仕之間、百姓等依歎申、雖相觸地頭、不承引之由訴之、地頭又所相當所役之外、多日召仕事全無之、但當村百姓等數十人在之、而三人之外不勤仕之条、存外也、併郡司致違乱之由陳之者、於坊仕者、數日不召仕之由令申之上者、不及子細、次百姓三人之外者不召仕由事、當村百姓役事、郡司堀内之外、就地頭知行分糺巡役、止過分之儀、相互守先例、可召仕之由、載先段之間、子細同前焉、

一　藤三郎検校号有悪口咎、押取身代由事、

右、相論之趣子細雖多、及刃傷之由載訴陳之處、實證不分明之間、於守護方可尋沙汰之由、可被仰含矣、

一　宗久令押取山田村百姓寂善法師所從得女由事

右、郡司則寂善法師所從得女離主人手之時、取少袖一令逃出之間、令見合之處、地頭寄事於左右、稱盗人押取彼得女之条、爲非據之由訴之、地頭亦雖爲主人、盗犯露顯之上、不及子細旨陳之者、於盗取主人財物者、主人可加誅罰之条、不及異儀、而地頭押取之条、太非物宜欤、早可令糺返主人焉、

一　宗久令點定笛吹三郎作芋由事

右、如郡司申者、以非據雖押取彼芋、恐罪科返与本主之上者、狼藉勿論也、可被處御下知違背咎之由、雖訴之、無誤之旨依聞披欠、地頭返与本主、帶請取之上者、不及子細矣、

一　乙彼岸女号盗父伴二郎入道稲、押取住民等身代四人、責取銭十四貫文由事、

右、彼〻岸女盗取父稲一把之条、指非重科之處、寄事於左右、押取身代四人、結句責取過析十四貫文之由、郡司訴申之處、彼稲者、山田内桑迫細工入道稲於彼諸犬女依盗取、稲主召渡之間、相尋之處、白狀顯然也、仍弁過析五貫文畢、而十四貫文之由掠申之旨、地頭雖陳之、不備進白狀之上、爲稲一把之条、無異論之間、以輕罪處重科之条、勿論也、然者至于所押取身代以下銭貨者、任員數、可令糺返本主焉、

一　宗久無指故、令取流住人百姓等牛馬以下資財雜具等由事、

右、押取當村住人百姓等身代之由、郡司雖申之、地頭論申之上、無實證之間、不及沙汰、次蒭出來之時、不入糠由事、相論之趣不分明、宜任先例、致其沙汰矣、

一　山田村百姓寂善法師從女土与女稱有間夫咎、押取寂善養子觀音女、令沽却無謂事、

右、彼女稱有間夫咎、搦取其身令沽却之条、無謂之由郡司訴申之處、間夫之条顯然之上、證人光吉狀分明之間、致沙汰之由、地頭雖陳之、無訴人之處、誘取證人狀行罪科之条、背理致欠、相論之時、被尋證人事、就訴論人之注文、除兩方縁者、載起請文之詞、被召證狀之条、雖爲傍例、無訴人之時、号證人狀、不載起請詞、就注申行罪科之条、爲非據之間、於彼女者、可返付主人焉、

一　蕨野五郎検校入道稲有打殺自犬咎、宗久令責取三貫文用途由事、

右、五郎検校入道去年永仁元九月二日夜、爲彼犬依被喰失酒飯、令打彼犬之處、存外令死去欠、爰号殺犬之咎、令召取子息坊童、令責取三貫文用途条、非法之由雖申之、地頭論申之上、無實證之間、不及沙汰欠、爰可被問證人之由、郡司雖申之、或地頭下人、或爲訴人之間、無所糺明矣、

一　稱有馬盗人同意咎、封納弥平太入道家内、押取身代四人并馬二疋、令點定取方〻公物稲由事、

右、馬盗人妻女父弥平太入道許仁隠置之間、可召出之由雖催促、依不叙用、召置身代之旨、地頭雖申之、隠

置之条、郡司論申之上、難及三族之罪欤、而剰召取舅身代之条、爲非據欤、仍於三人者、不日可糺返本主人、次諸三郎童事、逃籠郡司方云々、不分明之間、被尋究、可有左右、次方々公物稲以下資財等地頭押取之旨雖申之、論申之上、無實證之間、不及沙汰焉、

一　宗久背御下知并先例、押作下地、或他所田畠耕作時、召仕當村百姓、無謂由事、

右、地頭背御下知、押作下地、他所田畠耕作之時、召仕當村百姓事、無謂之由、郡司雖申之、押作下地之条論申之上、無所見欤、次他所田畠耕作之時、召仕百姓由事、當村以下近邊巡役之外、不可召仕之矣、

一　駒走藤四郎男稱有其咎、責取過粉由事、

右、郡司則宗久召具藤四郎男、打越薩摩郡之時、數日之間不与日食、令責仕之故、不堪無食、爲助身命罷歸之處、宗久稱盗布袋、令取身代、責取銭一貫文之由訴之、地頭亦爲盗人之条、白狀顯然之由、陳之者、不備進白狀之上、生口在國之間、彼是尋究淵底、重可有其沙汰焉、

一　藤四郎男稱令悪口紀次郎入道、責取銭二貫五百文由事、

右、稱有悪口之科、責取過粉之由、郡司訴申之處、悪口之条無異儀之間、致沙汰由、地頭雖陳之、悪口之条爲不實之旨、郡司論申之上、雑人之悪口一旦雖加禁遏、難處科怠之間、仍於彼銭者、可糺返本主、次郡司押取藤四郎作毛以下之由、地頭雖申之、郡司論申之上、爲胸臆間、不及沙汰矣、

一　宗久申付不實於乙太郎冠者、責取銭一貫文由事、

右、郡司則責取彼銭之由訴之、地頭亦逃失之時、宗久下人許仁寄宿之間、相觸主人之時、爲悦彼銭一貫文給与主人之旨陳之者、就乙太郎申狀可有其沙汰之處、在國之間、追尋究可有其沙汰焉、

一　地頭押取百姓九人身代、責取人別三貫文銭貨由事、

右、當村百姓等、稱令切狩倉於畑之由、地頭押取百姓九人身代、責取人別三貫文過粉之旨、郡司訴申之處、當村内永吉者地頭名也、狩倉又爲地頭狩倉之處、任雅意、百姓等伐狩倉之間、可行其咎之由相觸之處、彼等顧自科、強依令懇望、申宿畢、何可及訴訟哉、交名人内石塚入道女子童并水守又太郎所從倉次等者、無謂之由陳申之間、不及其沙汰、又河内五郎子息太郎男事、不知名字之由雖陳之、百姓九人内於二人者、無誤之旨

陳申之間、不及其沙汰之由載陳狀畢、然者至自余輩者、行罪科、取過析之条勿論欤、凡如弘安御下知者、當村下地可爲郡司進止之条顯然也、而或号永吉名、或雖稱地頭狩倉、地頭進止之条、無所見間、不可相綺下地之處、結句押取百姓等身代、責取科怠之条、頗爲非據欤、然者有限地子外、不可相綺下地、於所責取錢貨者、任員數、可令糺返百姓等焉、

一　當村百姓弥平太入道名子次郎太郎男馬二疋錢一貫文地頭責取由事

右、依爲罪科人之跡、地頭令點定作毛之条、無異論欤、爰如弘安御下知者、於自今以後者、地頭加點定事、可令停止之由、被載畢、而背彼御下知、加點定之条承伏之上者、可被處御下知違背之咎旨、郡司所申、雖似有子細、以彼點定一事、難處御下知違背重科欤、然者於自今以後者、縱百姓等雖有重科、至作毛者、不可點定之由、被載御下知之上、國司領家地頭郡司相交之上者、輙地頭一人難點定之間、永可令停止、是一、次彼御下知者、就御公事難澁、立點札事欤、罪科人跡事、不可依彼御下知之由、地頭雖申之、彼點札事、更難差別之間、子細同前、是二、次押取馬二疋并錢一貫文之由、郡司雖申之、地頭論申之上、無實證之間、不及沙汰、是三、然則於點定者、自今以後可停止、至馬以下錢貨事者、爲胸臆之間、不及沙汰矣、

一　井手田水守又太郎稱人勾引、地頭押取身代四人由事、

右、如宗久所進永仁四年二月廿六日野生女白狀者、御沙汰候又四郎者、古曽乃九月乃望之比世利、又太郎乃許仁候志事波、山田人〻大旨知多留事候、委事波又太郎仁可有御尋候云〻、如同所進同年四月三日永增狀者、請取候永增下人又四郎乃本波事、任道理、彼本波仁弥三郎男一人山口地頭殿世利渡給候畢、若牟召又太郎後訴候波牟時半、伊津久仁天毛候江、永增可明云〻者、彼又太郎男爲人勾引之由訴申之間、被下訴人永增訴狀之處、又太郎男難澁之間、爲本波弥三郎男於召渡之由、宗久令申之条、爲非據欤、又太郎男令居住領内之上者、召出之、尋究實否、可成敗之處、稱難澁之由、不究人勾引實否、不尋問生口、召渡別人之条、令違依畢、是一、次又太郎男於爲人勾引者、尤可行彼男於罪科之處、無其儀、令安堵之上者、爭以彼下人可被召渡哉、是二、次野生女白狀事、無指人勾引所見之上、非生口狀之間、眞僞難露顯、是三、次生口名字事、如郡司申者、宗五郎

云々、如宗久陳者、帯野生女并永増狀、爲又四郎之旨陳之、如野生女白狀者、又四郎云々、然者彼生口在所又雖及相論、未断之間、難被是非之間、所詮、彼又太郎男爲人勾引否、地頭成敗不分明之上者、爲守護方可有其沙汰之由、可被仰下、次地頭押取四人身代、責取錢貨十貫五百文之由、郡司雖申之、地頭論申之上、爲胸臆之間、不及沙汰焉、

一　當郡住人専心号夜討人、點定作田由事、

右、如地頭所進永仁三年八月廿七日末宗白狀者、同日谷山地頭方世利、召尋同山田乃内黒丸乃平三郎季宗加白狀、件子細者、山田乃郡司方乃沙汰人成佛於、八月廿三日夜季宗専心房仁被語佐候天、夜討仁志天候子細者、山田沙汰者、専心加父給天有志加波、専心古曽跡波可継仁、存外仁成佛彼沙汰人仁成多留事、不安思江波、成佛於討多羅波、先司可給也、然者成佛於可討其忠仁、能覧屋敷於撰世天、一期之程父子乃契於志天、可取須由、専心房申候之間、同山田乃室乃又太郎加下人觀能季宗三人志天、成佛於討天候、事實仁天候、若彼輩諍申候者、奉被召合候天、子細於可申候云々、如郡司所進四月六日守護代下知者、件夜討事、依専心訴訟、被召取之間、以彼宿意、末宗爲専心語之由載白狀之間、専心所申雖非無其謂、就一方申狀、無左右難被裁許欤、然者沙汰落居之程者、可令安堵其身、若又訴人出來者、可被尋究眞僞云々者、如夜討人田三郎(平脱カ)末宗白狀者、得専心之語、令討成佛之条顯然之間、苅取専心作稲之由、地頭雖申之、成佛者専心之所從也、隨而専心母堂寄宿間、旁以不可致夜討之上、於爲与黨者、爭末宗致夜討之由、専心可致訴訟哉、然間、守護人専心非夜討人之由加下知畢、専心非与黨之条顯然也、是一、次載白狀之間、与黨之条無異儀之處、守護下知令違依之由、地頭雖陳之、如式目者、縱雖白狀、無贓物者非沙汰之限云々、然者贓物不露顯之上者、不可依白狀、是二、次地頭點定専心作稲之条、無謂之由、郡司申之處、於點定者領狀畢、如載先段、不可點定作毛之由、被載関東御下知畢、而稱罪科人點定之条、背物儀欤、自今以後可停止點定、是三、然則於點定作毛者、可令糺返本主成佛跡、至點定者可令停止矣、

一　夜討人田平三郎末宗搦取時、取流又王童由事、

右、郡司則搦取末宗之時、取流彼又王童之由訴之、地頭又爲末宗扶持仁之間、取流之由陳之者、依爲重科、

地頭召取之行罪科之条、不可有子細欤、仍郡司訴訟不及沙汰焉、

一　条〻地頭致非據上者、可預別納御下文由事、

右、地頭或違背御下知、令點定作毛等、或所務并検断致非據之条顕然上者、可給別納御下文之由、郡司雖申之、云御下知違背分、云非據之篇、輙難及罪科之間、不及沙汰矣、

以前条〻、依仰下知如件、

正安二年七月二日　　前上總介平朝臣(実政)(花押)

1051

『國分寺文書』

異國降伏御祈禱事、於薩摩國中寺社、可被致祈請之旨、普可被相觸之狀、依仰執達如件、

正安二年七月十三日　　陸奥(宣時)守御判
　　相模(貞時)守御判

嶋津下野(忠宗)前司殿

1052

『岸良氏文書』

わよのふんをもて、つけわたすやしき、かりくらの事、いまのくちの田のつほ〳〵ハ、さいふにてもけかる(ママ)時、ことハにあいあうして、上中下しんそなく、これをわくへし、ミやけにその二か所、田ち四ちやう内、きしらのむらニ三ちやうのうち、ほん田一ちやう五反　うちわたし一ちやう五反　ミやけニ一ちやう、たゝし二ちやうハ、まんさうくうしをほんミやうにとゝめ了、そたうハ、御ないけんのとく田ニついて、くけくわんとうのほんそたうハかり、これをわきまうへし、しはいほんミやうにとゝめ了、

一やしき一所　きしらのうち　限東溝　限南溝　こんのかミのしゝくうしこれあるへからす、いその　限西大道　限北権守後堀白也、

一かりくら三ケ所、岸良内少山田ニて子後平

しゝ限東犬穴少山田境谷　限南在家上波多目　限西伊河内東立谷　限北後平懸目

右、田やしきかりくらハ、わよのふんをもて、やうたいをかきて、こんあミた佛ニつけわたし了、しゝそん〳〵にいたるまて、いちんといえとも(こ脱カ)、いらんあるへからす狀如件、

正安二年八月六日　　かねいし在判

「右ノ文書やう〳〵読取写取候、本ノマヽ也」

1053

「山田氏文書」

『正文』

いしうゐんもちまつのうちはらたかきもとたあわせてい

ちやう二たん、『天久保』をゝくほのうちゆあなのまへのた三たん、かた〳〵のさたと申、御ひけい候て、あんとし候うへハ、御ゆるし候ハ、さらにしちけんにもいれましく候、なかちにうり候事、ゆめ〳〵あるましく候、かへす〳〵ことも候へハ、しとけなき事候ましく候、よてのちのために、しやうくたんのことし、

しやうあん二ねん十一月三日　　ふちわらのうちのにょ（花押）

やまたとのゝ御かたへまいらせ候

1054

『入來本田某家文書』

薩摩國山門院針原名内拾町玖段参十、國方惣検事、以和与之儀、令止訴訟候旱、恐々謹言、

正安貳年十一月十九日　　雑掌法橋隆宗（花押）

『山門郡司藤原家泰ノ二子也、本田針原ニアラス』

謹上　針原熊鬼殿

1055

「伊作家久長譜中」

豊後國検断事、去六月廿四日関東御教書如此、守護人相共、可被致嚴密沙汰候也、仍執達如件、

正安二年十一月廿六日　　前上總介（実政）（花押）

下野彦三郎（久長）左衛門尉殿

1056

『國分寺文書』

異國降伏御祈禱事、去年七月十三日関東御教書如此、早任被仰下之旨、可被致精誠之狀如件、

正安三年正月十日　　前下野守（忠宗）

薩摩國寺社供僧神官中

1057

「伊作家譜中」

「正文在手鏡」

豊後國津々浦々船事、爲被鎮海賊、不論大小、隨船見在、輙難削失之様、彫付在所并船主交名於彼船、來月中可被注申員數、且有海賊之聞者、守護地頭沙汰人等、構早船、不廻時刻、可令追懸、然者、乗人者縦赴陸地、雖令逃脱、至船者令弃置之時、船主之所行欤、他人之借用欤、尋明之者、可露顯之故也、又追懸之時、乍知及不合力之輩者、可被注進交名、仍執達如件、

正安三年三月廿七日　　前上總介（実政）（花押）

下野彦三郎（久長）左衛門尉殿

1058

『水引執印文書』

八幡新田宮雑掌申、薩摩國山門院郡司家泰抑留當社常

見免田所當米由事、

右、就訴狀爲有其沙汰、去永仁六年六月十一日、同七月廿四日、同九月十五日雖遣度〻召文、不參決之間、仰薩摩在國司道嗣、吉岡弥次郎重將等、相尋難澁實否之處、如道嗣執進永仁七年七月廿七日家泰請文者、無合夕未進云〻、早遂結解、有未進者可究濟也者、依仰下知如件、

正安三年六月六日　　前上總介平朝臣(実政)(花押)

1059

『國分寺文書』

彗星出現事、於薩摩國爲宗之寺社、不日致天下泰平御祈禱、可被執進卷數也、仍執達如件、

正安三年八月廿三日　　前上總介(実政)御判

下野前司(忠宗)殿

1060

『公』

彗星出現事、今月廿三日御教書案如此、早任被仰下之旨、致天下泰平御祈禱、可被進卷數也、仍執達如件、

正安三年八月廿五日　　前下野守(忠宗)在判

國分寺留守殿

1061

「在忠宗公御譜中」

「在限城衆有馬休右衛門」

奉避退于惣地頭方宮里郷名之内永吉田事

合陸町内

壹町貳代三分	郡司名内
七段卅三代八分	平十郎
八段拾七代八分	武光四郎入道領内
五段卅壹代一分	宮里弥三郎入道領内
五段拾七代二分	正富名并橋口田内
貳段拾九代四分	石塚左衛門太郎入道領内
壹段卅八代五分	武光弥三郎領内
貳段	松本領内
貳段卅	吉次名内
貳段卅六代七分	禪理房領内
壹段卅	草道兵衛入道領内
壹段貳拾七代	益富五郎同又次郎入道領内
壹段拾貳代三分	長田入道跡
壹段拾貳代一分	禪勝房領内
壹段	中嶋田内
貳拾中	西田内正永

貳拾　　北子田内正永
貳拾中　　彦松領内
肆拾壹代七分　　勢万名内
貳拾九代二分　　菅牟多田内
貳拾九代二分　　宮原太郎入道
拾貳代三分　　得實名内
貳拾九代四分　　東郡七段内

右、件永吉田等、自郡司并名々領主、令避退惣地頭方之上者、郡司職以下下地事、雖經上訴、不及違乱、永所止訴訟也、仍狀如件、

正安三年十二月十一日　　惣地頭代本性在判

「右裏在之」
爲後證、奉行人（花押）　在判　在判

正安□年八月十八日

左衞門尉光景在判
左衞門尉直兼在判

1062

「忠宗公御譜中」

「在隈之城衆有馬休右衞門」

薩摩國宮里郷三分二郡司職并下地事、雖經上訴、以和与之儀、永吉分田地陸町（坪付在別紙）、自郡司并名々領主、被避進惣地頭方之上者、郡司職以下下地事、不及違乱、永所止訴訟也、將又於彼永吉田等之國衙領家方之年貢課役并寺社役等者、一向爲本名沙汰、可被弁濟也、仍爲後代狀如件、

正安三年十二月十一日　　惣地頭代本性在判

1063

宮里郷郡司名田等事、被和与之由承候了、恐々、

正安三
十二月十一日　　道義在判

當郷地頭代
「朱カキ」「右裏有之」
爲後證、奉行人所加判形也、

正安四年八月十八日

左衞門尉光景在判
左衞門尉直兼在判
隈之城

1064

「國分宮内澤氏蔵」

在判

當宮御領惣検断事、就撫民之儀、被仰付預所了、於検断物者、爲預所沙汰、可沙汰通（進カ）、子細者官（ママ）委被仰下候、然者、

暮(ママ)後用途上品目結小袖上品代老貫柒百文、裏絹代上品陸百文、仰面々、預所并代官等、來十一月中可有沙汰通(進カ)之由、慥可被下知候、更不可有遅々懈怠之旨、仰候也、仍執達如件、

正安四年八月二日　　法眼尚祐

謹上　正八幡宮執印法橋御房

1065 惣検断事、本家御教書案文献之、任被仰下之旨、急速可有其沙汰候、仍執達如件、

八月廿八日　　（花押）

田所法橋御房

1066 「延時文書」

（端裏書）「□(さカ)いこくしのわよのしよう」

和与

薩摩國在國司入道々雄与延時三郎入道成佛相論同國薩摩郡延時名内眞弓町　御靈田　上山本　中山本、以上肆町公事等事、

右、及上訴、雖番訴陳、相互以和与之儀、於自今以後者、可令勤仕延時本名肆拾分壹公事所役也、此儀、向後不可有相違、若致違乱變改者、可有其咎也、仍和与之狀如件、

正安四年八月四日　　沙弥道雄代道弘（花押）

1067 「延時氏文書」

石築地修理事、三丈貳尺延時名分、被勤仕候了、恐々謹言、

「正安四」

八月廿八日　　本性（花押）

延時三郎入道殿

「此文書、御譜中ニ在リ」

（ココニ奥書アレドモ、一〇八七号文書ノ奥書ト同文ニツキ省略ス）

1068 「山田氏文書」

はかたへ御のほりの時のほする文書の正文等目六の事

合

一山田上別符兩村検断損物百姓等不可請取之由狀各三通

内

一〇通　山田村百姓寂善法師

一〇通　上別符こまハしりの清三郎男

一〇通　同所そ山の太郎入道

一〇通　同兩村百姓等はたをきるとかとかうして、郡方ニ身代をとらるゝよしの連判狀、

一〇通　同兩村地頭米郡司をさへとるよし百姓等狀

一通　同兩村内宮薗久吉薗并百姓等はたをきるとかと
かうして、郡司身代取候由申狀土代、
一通　御下知要段
一原田垣本田地事
三通　能願訴狀同具書等
一通　佛教房ゆつり狀、同田地事、
二通　本證文かねしけ寂證等狀、同田地事、
一通　御教書、同田地年貢事、
一通　能願訴狀、同年貢事、但是ハ道慶彼田地廿ヶ年
當知行能願承狀の所見のためニ上也、
右、『文書一卷是迄ニ而候』文書目六之狀如件、
正安三年八月廿七日　道慶（花押）
この狀らうけとり候了、
さたのゝちハかへし進候へく候、
——（花押）

1069
『入來院氏臣岡元氏文書』
可早以（ママ）氏、神保後家□領知可□寺田庄半分壱、除此内伍分事
右、以亡母藤原氏遺領、所被配者（分也脱カ）、早守先例、可致沙汰
之狀、（依仰カ）□下知如件、
乾元々年十二月廿三日　相模守平朝臣（師時）（花押）
武藏守平朝臣（時村）

1070
『入來院氏文書』
入來院書生得分事、背先例抑留之由、雖及上訴、於堪原
分者、以和与之儀、毎年貳石伍斗可被致沙汰之由、治定
候旱、此上者、不可依自余村々沙汰之是非候、仍和与狀
如件、
乾元貳年八月十日　大前則道（花押）

1071
『國分寺文書』
異賊防禦御祈禱事、去年十二月十日関東御教□（書）如此、早
任被仰下之旨、可抽懇祈之由、可被相觸薩摩國中爲宗寺
社管領之仁也、仍執達如件、
嘉元二年正月四日　掃部助（政顯）御判
下野前司（忠宗）入道殿

1072
『國分寺文書』
異賊防禦御祈禱事、去年十二月十日関東御教書并今月四

日御施行如此、早任被仰下之旨、可被抽懇祈也、仍執達如件、

嘉元二年正月廿三日　　沙弥(道義)在判

國分寺別當御房

1073

「在御文庫二番箱他家文書中」

譲渡　田畠山野事

薩摩國伊集院桑波田郷支坪付別紙有、

右、てんはく山野かくらは、紀景氏せんそさうてんのし(ママ)やよりやう也、しかるを、子そく四郎とのへ、ゑいねんをかきて、ゆつり渡ところ也、万雑公事臨時課役等申定所也、たのさまたけなく、ちきやうせしむへし、よて爲後日、ゆり(つ脱カ)状如件、

嘉元二ねん三月二日　　紀景氏(花押)

桑波田四郎三郎殿

1074

『池端文書』

ゆつりわたす

ちやくしまこ四ら(孫)郎うちかまさに(親政)、大すゝのくにねしめ(祢寝)院佐汰のゐんさたのむらのうちのてんちやしき、ならひにしやうくんけの御くたしふミいけのせうもんらの事、ミきのてんちやしきらのミやうしつほつけハ、わけしやうニミゑたり、しかるニ、かのてんちやしきらにおきてハ、氏女かちうたいそうてんのしりやうなり、こゝにらうせうふちやうたるあひた、さやきてちやくしちかまさに、しやうくんけの御くたしふミいけのせうもんらをあひそゑて、ゑいたいをかきりて、ゆつりわたすところなり、よてこ日のために、ゆつりしやうくたんのことし、

かけん二ねん三月十五日　　平氏女(花押)

1075

「正文在國分澤氏」

當宮公文所評定衆事、同御領検断代官職事等、本家御下知正文已上二通献之、各存此旨、致廉直奉公、殊可被抽忠勤之狀如件、

嘉元二年三月　日

執印兼石清水前權都維那法橋上人位判

1076

「在御文庫二番箱他家文書中」

(端裏書)「はせたうのしきちのうちをミやうちのすいてんならひニ御ようとうニ御さうはくの状」

長谷堂敷地内四至阡陌限　東公領堺　南岸波多目　西新堀　北小薗堺　并

北小薗一所東藤太郎検校西堺（南脱）西新堀之通　北住僧薗堺

同五藤四郎本薗一所東公領堺西住僧薗堺　南藤太郎検校薗堺北大道　事

右、此者寺領也、以此薗等所令相博于宮内名水田十六坪内柒段之下地・同地頭加徴米并公領櫛三郎北薗一所東公領堺南櫛三郎薗垣根西大道北古道也、但於寺領者、臨時課役万雑公事等者、寺別當可致其弁者也、如此相互相博之上者、向後全不可有違乱変改之儀、仍相博之狀如件、

嘉元二年八月廿三日　寺別當尼妙法（花押）

地頭代盛信（花押）

雑掌勝道（花押）

1077

『國分寺文書』

追仰

異賊防禦御祈禱事、仰爲宗寺社管領之仁、可抽懇祈之由、可被相觸之、

異賊防禦修之事、〻書一通遣之間、此趣嚴蜜可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

嘉元二年十二月十日　相模守（師時）御判

左京權太夫（時村）

上總掃部助（盛顯）殿

1078

『臺明寺文書』

將軍家御祈禱所大隅國臺明寺衆徒等申河俣據入道禪心以下輩乱入寺内、致狩獵狼籍由事、今月廿一日御教書如此、可停止禪心以下甲乙人狩獵入乱狼籍云〻、早任被仰下之旨、可停止狼籍之旨、可令相觸之狀如件、

嘉元〻年十二月廿三日　時直在判

「此正文、旧御番所御文書中二番箱臺明寺文書一巻中ニ在リ」

1079

「在文庫伊作家文書」「伊作家久長譜中案文在巻本トアリ」

「口裏ニ」

「「かまくら殿御まいりの時

申狀のあんもん御をんの事」

嶋津下野三郎左衞門尉忠長（久長）謹言上

所領薩摩國伊作庄分限尪弱上者、且依重役勞、且任傍例、預御計、弥欲抽異國警固忠勤間事、

件条、亡父下野入道道忍（久経）、去建治元年被仰付警固役、被差下鎮西畢、而道忍弘安七年、於役所死去之後者、雖爲不肖、宛于身二十余箇年、令勤仕彼役畢、加之、豊後國守護上使事、被仰付之日、雖可令言上無力之由、辞退之条、依有其恐、謹期後訴、同所致沙汰也、爰當庄者田數百余町也、爲領家進止地之間、有名無實之上、除佛神人

給田、所残地頭得分給加徴最少分也、其上薩州与筑州筥崎役所者、其堺爲遼遠之處、當所爲領家進退之地、不及召仕人夫官駄、旁以難令合期之条、可足御還迹者哉、且防戦要害之習、云親類、云郎從、不令扶持者、難達戰場之本意、愁訴之至何事如之哉、且如傍例者、就歎申不階(酷)之子細、浴御恩之族在之、然早被優年來重役之勞効、且任傍例、預御計、弥欲致警固之忠節、仍恐々言上如件、

嘉元三年二月　日

申状案　嘉元三々十九　可宛給警固御教書由事」

嶋津下野三郎左衛門尉忠長(久長)謹言上

欲早宛給嚴蜜御教書、弥抽異國警固忠勤子細事、

件条、亡父下野入道々忍(久経)、去建治年中、被仰付警固役、被差下鎮西之間、忠長令隨逐、罷下之處、弘安七年道忍死去之後者、宛于身廿余年、令勤仕彼役了、而未下預御教書之間、所令言上子細也、然早宛賜御教書、弥欲致防戰之忠節矣、仍恐々言上如件、

嘉元三々十九

1080

『入來院氏文書』

(端裏書)「市比野村名主又次郎友家状内野事」

内野事、本自塔原にて候うへ、祖父圓信并祖母信蓮号市比野の内、子細を申事候はさりしうへハ、友家更不可申異儀候、定海背父母知行之例、致非分之違乱候ける事、以外次第候間、爲後日進状候、恐々謹言、

嘉元三年三月十日　　友家(花押)

塔原地頭殿

1081

「正文在文庫伊作家文書」「伊作久長譜中正文在手鏡トアリ」

「口裏ニ」「けいこ御けうそを申給へき案文

1082

「貞久公御譜中」

(端裏書)「嘉元二年参上、同三年三廿九日御進物請取」

「若御前御方白大刀一進、但折節御差合間無御返事」

砂金五十兩、大刀一給候了、難有候、謹言、

三月廿九日　　(貞時)(花押)

嶋津下野三郎(忠宗)左衛門尉殿御返事

1083

『道鑒公御譜中』

(本文書ハ一〇八二号文書ト同文ニツキ省略ス)

1084

『臺明寺文書』

當山寄進析田等、牟花町田参段、花牟礼田貳段半事、

右、件田地等證文等内、牟花町田證文貳通、花牟礼田證文拾壹通内（正文四通 案文六通）并御寄進狀慥給候畢、仍請取之狀如件、

嘉元三年卯月廿日　　別當阿闍利兼能在判

別當律師玄慶在判

別當法眼長順在判

別當助明在判

別當兼學頭法橋在判

『「ロウラ」「覚静房析田寄進請取案文」』

1085

『臺明寺文書』

僧暁了敬白

奉寄進　臺明寺衆集院

忌日田伍段半

牟花町参段（在中田井、為御館分之間、自本公事無之、）

花牟礼貳段半（公事自本無之、）

右、件於彼兩坪者、僧暁了傳領之田地也、而相副彼兩坪文書等、限永年、奉寄進阿弥陀如來者也、惣爲七世四恩師長父母出離生死、自身滅罪生善往生極樂佛果円滿、寄此小因、期彼大果狀如件、

嘉元参年卯月廿日　　但暁了依中風子息香名丸判形了、（花押）

『「ロ裏」「覚静房析田寄進狀」』

1086

『市來崎文書ノ内』

まさとみ名のうちのとうゆ田のつほ付事

合

五反　ぬまくち　しやけとまり

五反　やなき田　一丁　下しろいし　二反上ニあり、

右、付坪ニまかせて知行あるへく候、仍坪付如件、

かけん三年五月十六日　　沙弥しやうしん在判

1087

「在忠宗公御譜中」

『寫在官庫』

可令早嶋津下野前司法師（法名道義）領知土里（黒カ）平太左衛門尉法師（法名道忍）所領事

右、守先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

嘉元三年八月七日　　陸奥守平朝臣（宗宣）在判

『「宣時」』

相模守平朝臣『師時』在判

「以上廿五通正文者、鎮西御下向之時、備進之目、目六所書副之也、

嘉元三年九月六日　　左衛門尉盛時」

『右写継目之裏ニ忠宗御判』（花押）

1088

「小川氏文書」

嶋津庄薩摩方甑島雑掌兼種申、違背関東御下知状、致條〻新儀非法由事、重訴状副具書、如此、來月廿日以前、可参對、令違候者、殊可有其沙汰也、仍執達如件、

嘉元三年八月廿六日　　「九州探題也」（敦顕）上総介（花押）

小河太郎入道殿

1089

『調所氏譜恒幸傳』

嘉元三年乙巳、初恒幸受調所主神司等於祐恒、為弘安五年永仁六年事、以領職者二十餘年矣、當其時有小次郎兵衛尉祐綱者、私於國守掠拜其職、恒幸陳實有以所訟、乃國守以質在廳、至是九月八日、使目代大炊助某、更命恒幸、爲調所主神司兩職、如祐恒讓狀、

1090

『全文書』

廳宣　大隅國留守所

可早存知以稲富七郎左衛門尉恒幸、爲當國調所主神司職事、

右、件職小次郎兵衛尉祐綱構出謀書、掠賜國宣之由、就恒幸、去二月被尋下實否於在廳中之處、不及請文散狀之間、任故祐恒兩通弘安永仁之讓狀、可預御成敗之由、頻訴申之間、所宛賜件兩職也、在廳官人等宜承知、敢勿違失、以宣、

嘉元参年九月八日　　目代大炊助鴨縣主在判

大介鴨在御判

1091

『正文在權執印』（端裏書）「嘉元三十一二」

薩摩國八幡新田宮雑掌道久重言上

同國延時名主三郎（種忠）入道実名不知、背御教書、不□（参カ）對上者、欲蒙御成敗四石御供米事、

副進

二通　御教書一通先進了、

件条、先度言上畢、而背御教書、不及請文陳狀之上者、任被定置之旨、爲蒙御成敗、重言上如件、

嘉元三年十月　日

1092

「正文在文庫伊作家文書」「伊作家久長譜中案文在巻本トアリ」
「ロ裏ニ」
「神代上山権現ニ析田寄進状案文」

奉　寄進上山熊野三所權現析田事

坪浮免捌段町内西方六段

右、於田地者、停止万雑公事、所奉寄進也、仍至于子々孫々、可被致丁寧之祈禱之状如件、

嘉元三年十月十三日

左衛門尉藤原忠長（久長）

1093

「伊作家文書在文庫」「伊作家久長譜中写在巻本トアリ」
「ロ裏ニ」
「つのかしろのりやうけねんくの注文」

おほたのしやう神代郷并つのゝかうりやうけねんくのゐんすの事

神代郷分十疋内いまハ八疋代廿貫文

なかをの村十二貫文

つのゝかう本ハ八疋、いまハあつかそわよのゝちハ五疋代十二貫五百文

以上四十四貫五百文

右、注進如件、

嘉元三年十月　日

1094

「權執印文書」

薩摩國新田宮雑掌申、國司初任御神拜物事、重訴状如此、兩度被仰之處、不参上候、早尋問違背之實否於論人、可被注申也、仍執達如件、

嘉元三年十一月二日　　上總介（政顯）在判

河内小太郎殿

澁谷弥平二殿

1095

「仝」

薩摩國新田宮雑掌申、國司初任御神拜物事、今月二日御教書并訴状如此、早任被仰下之旨、可被申分明左右候、仍執達如件、

嘉元三年十一月廿日　　平在判

延時三郎入道殿

1096

「伊作家文書在文庫」「伊作家久長譜中正文在巻本トアリ」
（端裏書）「薄葉四郎兵衛尉うけふミ　かん元参□」

宛給薄葉四郎兵衛尉景光神代郷御代官職事、然者、毎年中仁不立申旱魃水損、可被運上御用途并色々弁物注文、

一除分
一領家季貢　貳拾玖貫五百文　神代郷并中尾分也、
一下司給參丁陸段　一荒居在家拾捌間
一下司得分籾玖石壹斗貳舛、錢貳貫柒百五十文
一酒勾左衛門尉給中尾分
此外自來丁未季(徳治二年)毎年可有運上御得分事、
定錢肆百拾貫文
一御馬褐四帖　一節季塩引鮭九尺
□(ヒ)筋子拾貳　一差縄拾房
右、於彼御季貢内參百拾貫文并色々物等者、毎年無懈怠十一月中仁、國元仁可進沙汰、残於籾代百貫文者、翌年五月中仁、國元仁可致沙汰之狀如件、
嘉元參年十一月十一日　景光(花押)

1097　『写在指宿助左衛門尉』

異賊用心結番參否事、薩摩國守護代本性注進狀一巻如此、早尋問不參實否於交名人等、可被執進面々請文也、仍執達如件、
嘉元三年十一月十一日　上總介(政顕)在判
河内六郎殿

1098　「貞久公御譜中」

同前
かわちのくににしのしまハ、こ入(道智)たうとのよりゆつりゑて、ちきやうさうゐなく候、しかるを、めゝこ(米ヒ)せんにゆつりたてまつるところ也、をなしまこと申候なから、きやうほうのうちよりやうして、心さしあさからさるにより、こ入たうとのゝあまにたひて候ゆつりをあいそへて、ゑいたいをかきて、ゆつりあたうるところ也、もしこのゆつりをそむいて、ゐらんを申候ハんこまこにをいてハ、ふけうとして、とか(科)に申あて給候へく候、よてのちのために、ゆつりしやうくたんのことし、
かけん三ねん十二月廿日　如ゐん在判
「右正文、旧御番所御文書二番箱中御外祖御譲状一巻中ニ在リ」

1099　『冠嶽文書』

冠嶽靈山寺別當代賢賀申、於社頭致狩獵、乱入神領成煩等由事、訴狀副具書、如此、事實者、甚無其謂、早任先度奉免狀、不可成違乱、次甲乙人等狼藉事、可加制止也、向後有違犯之輩者、可處罪科之狀如件、
嘉元三年後十二月十五日　『忠宗公』道義御在判

中條平内左衞門入道殿

1100 「正文在文庫伊作家文書」「伊作家久長譜中正文在手鑑トアリ」

警固事、自去正月至今月（但七、八月不參）被勤仕候畢、仍執達如件、

「嘉元三」
閏十二月廿九日　　本性（花押）
下野彦三郎（久長）左衞門尉殿御代官

「末ニ」「警固役書下嘉元三」

1101 『安養院文書』

（花押）

宛給　むれ所薗一所事

尺迦太郎所

右、薗者、爲荒薗之間、明年者社役之公事析ニ、用途三百文百姓之中ニ可出之、桑代ハ何方可被令耕作、桑出來候時者、可有桑實檢、所當同可被宛用途者、可任先例、仍下知之狀如件、

嘉元三年閏十二月廿九日

1102 『比志島氏文書』

比志嶋石築地裏加佐并破損事、先度自惣領成其功之處、末子難澁之由、雖被申之、重破損貳丈、猶以自惣領被經入、有末子難澁者、以使可有其沙汰之狀如件、

嘉元四
正月廿八日　　阿忍（花押）
本性（花押）

比志嶋殿

1103 「在御文庫二番箱他家文書中」

和与

薩摩國伊集院内買得地所〻田薗荒野等事

右、件田薗等、迎念与次郎太郎（上神殿祐継）入道殿雖番訴陳、所詮、以穩之（ママ）便儀、所令和与也、於田薗并荒野等之員數者、別注文明白也、仍任之（ママ）旨、相互至于子〻孫〻、無違乱可被領知候、將又上神殿事、雖申子細、如此令和与之上者、向後止之旱、仍和与之狀如件、

嘉元四年三月十二日　　沙弥迎念在判

1104 『水引執印文書』

阿多五大院田内、弥平太与大浦入道除知行分、今又河邊

宮下仁令沽却参町六段下地候、被聞食之由の可給御状候、又去〻年御年貢未進等、無一粒毛未進、八月中仁可致沙汰候、若未進候ハん時者、除此参町六段、所残候、先日任所入置候證文之旨、名主職お可有御知行候、仍爲後日之状如件、

嘉元四年五月廿五日　　沙弥(阿多)蓮道(花押)

『在口裏』「大隅国御家人藤原祐胤□(陳状カ)嘉元四十一四」

1105

『臺明寺文書』

大隅國御家人藤原祐胤謹弁申

爲臺明寺衆徒等構種〻今案、破御致齋、令苅析田、致狼藉由、無跡形不實濫訴条、無謂子細事、

件於析田近邊山野等者、祐胤爲相傳之間、令新開、自往古無知行相違之處、衆徒等自去年始、彼新開成違乱、致苅田狼藉之間、欲訴申之處、自科難遁之間、遮致析田違乱苅田狼藉之旨訴申之条、希代所行也、且僧侶法不實之条、尤戒一段也、冥照覧難測者哉、所詮、成析田違乱、不致苅田狼藉之上者、且任無誤實、被催止不實濫訴、且衆徒等成彼新開違乱、破御致齋及苅田狼藉之条、所伏之上者、早任先規例、爲被行其咎、粗披陳言上如件、

嘉元四年十月　日

（表紙）

忠宗公　自德治元年
貞久公　至正和五年

前編　舊記雜錄　巻十一

嘉元三　德治二（花押）　延慶三　應長一
正和五

1106　「國史」

德治元年丙午、是年十二月改元德治、自十一月以前猶是嘉元四年、冬十二月十四日改元、拠大日本史、

二年丁未、事缺不書、

延慶元年戊申、是年十月改元延慶、自九月以前猶是德治三、

1107　『市來崎氏文書』

和与

薩摩國山門院内西桃木田地并城薗等方々御季貢以下所役對捍事

右、云國衙領家乃貢恒見・宮富神用米書生定使得分、云石築地・楯・籏用途、永仁貳季以來一向對捍之間、及上裁、雖番訴陳、以和与之儀、所經替未濟對捍物代仁被出鷲眼拾結候之間、請取之、止沙汰候旱、但自當年德治貳者、有限於應輪所役等者、毎年無懈怠可被弁勤候、仍爲向後、和与之狀如件、

德治貳年七月廿七日　山門院地頭兼惣郡司代盛秋（花押）

1108　『調所譜敦恒傳』

德治二年丁未十一月晦日、承大隅國調所書生職及主神司職、以恒幸傳故也、

1109　『仁文書』

□（ゆつ）りわたす

大すミのくに、てうそのしよしやうしきなら□（ひに）かうつかさしきの事、

□そへらつねゆき□るを、子息三うま丸にゆつ□(り)□なり、いかなることものなかにも、い□いらん申こともあらハ、ふけうの□□如件、

とくち二ねん十一月卅日

主神司藤原恒□(幸)

1110

『入來院氏臣岡元氏文書』

(端裏書)「和与状、下村殿跡御公事はいふんの事、徳治三正月日」

和与

入來院清敷南方色〻御公事配分事 清敷分十分一

一國衙御米三石七斗八舛九合一夕三才八分内

三斗七舛九合　清敷御分

一宮寺免田四反中　分米二石五斗内

田二十　分米二斗五舛　清敷御分

一楠本免田ほんくやくの米三斗五合五夕内

三舛五夕一才　清敷御分

一國司領家御年貢銭二貫百廿一文内 一貫九百十一文領家御方 二百十文國司御分

此内二百十二文一分　清敷分(御脱カ)

一領家御米三石七斗三舛五合七夕三才八分内

三斗七舛三合五夕八才　清敷御分

一わた十六兩一分内一兩二分朱中(ママ)　同御分

一ふと糸四兩　せに三文目内　せいかう二文目内

一分三文目　せいかうあり　同御分

一麥代銭四百八十文内　四十五文　同御分

一嘉元四年三月十日より書生米七斗五舛内

七舛五合　同御分

右、色〻御公事等、和与之義をもて、所定如件、

徳治三年正月　日　　平氏(花押)

平氏(花押)

1111

新講免勘庄薗年貢事、先執印之時、被進置請文了、自彼年至去年分、任請文之旨、無懈怠被進濟欤、分明可被申散用也、仍執達如件、

徳治三年二月八日　　法眼(花押)

正八幡宮田所法橋御房

1112

御綸旨

澤田所検校永賢加官軍、可致軍忠候、天氣如此、悉之、

二月廿六日　　右少弁▒(ヨメス)

「此文書在国分宮内澤氏」　「正和四年　三百五年ニ成、寛文九迄、但永賢補」
（右文書ハ偽文書カ）

1113
『岸良氏文書』
肝付郡内岸良村之弁済使職あんとのために、京都へ罷上候之間、祖父阿佛譲狀のしやうもん并ニ領家御下知のしやうもん三通、以上四通のしやうもんをハ、京都へもちてのほり候也、四通の安文（案）をハ、ゐ中留置候、道にて阿るちうようなんともあり、（「本ママ、」「いてきたる」）このしやうもんをうしないたりといふとも、このあんもんをしやうもんとして、兼村か子息彦犬丸、岸良之村弁済使職をなかくりやうちせしむへき狀如件、

正和三年十二月廿五日　　左兵衛尉伴兼村（花押）

1114
『岸良氏文書』
肝付郡内岸良村之弁済使職あんとのために、京都へ罷上之間、祖父阿佛狀のしやうもん并ニ領家御下知のしやうもん三通、以上四通のしやうもんをハ、京都へもちてのほり候也、四通の安文をハ、ゐ中留置候、道にて何かちうようなんともいてきたて、このしやうもんをうしないたりといふとも、このあんもんをしやうもんとして、兼村か子息彦犬丸、岸良之村弁済使職をなかくりやうちせしむへき狀如件、

正和三年十二月廿五日　　左兵衛尉伴兼村在判

1115
『岸良氏文書』
（花押）
宛行　嶋津庄大隅方肝付郡内岸良村弁済使職事
左兵衛尉伴兼村
右職者、云祖父阿佛譲狀并全阿手継、云代々御下知、明白之間、任相傳之旨、伴兼村仁所宛給也、有限御年貢以下之課役等、無懈怠可致其沙汰者、早庄家宜令承知、敢勿違失、仍所宛行之狀如件、

正和四年二月廿七日　　尼眞理（花押）

1116
『仝』
納　肝付郡岸良村見参析事
合　拾貫文者

右、所納如件、

正和四年二月廿七日　　尼眞理（花押）

1117

『載肝付兼藤傳』『岸良内蔵丞文書』

（花押）

宛行　嶋津庄大隅方肝付郡内岸良村

收納使職事

左兵衛尉伴兼村『岸良左衛門尉兼村』

右人、所被補彼職也、有限御年貢以下之課役等、任請文之旨、無懈怠可致其沙汰者、早庄家宜令承知、敢勿違失、仍所宛行之狀如件、

正和四年二月廿七日　　尼眞理（花押）

1118

『岸良氏文書』

納　肝付郡岸良村正和四年御年貢事

合参貫文者

右、且所納如件、

正和四年二月廿七日　　尼眞理（花押）

（一一一三～一一一八号ノ文書ハ編年ノ場ヲ違ヘルカ）

1119

『臺明寺文書』

奉寄進

衆集院阿弥陀如來

水田肆段　在曽野郡智能名内堤田

副進　本證文陸通

右、件水田者、快我相傳之田地也、而爲没後忌日析田、限永代、所令寄進也、爰倩思事情、生死海深、難到涅槃岸、煩悩山高、無晴菩提月、然間受如來之加被、欲脱輪廻之苦、所以、昔龍女者捧寶珠於釋尊、唱成道於南方、今快我者施析田於弥陀、望往生於西方、於戲、所憑者六八弘誓、誠説爭無其實、所期者九品來迎、引攝有何疑貽、仍奉寄之狀如件、

徳治三年二月彼岸第三日廿六日

僧快我在判

『押紙有之』「清水大明寺」

1120

『仝』

奉寄進「已下文面同し」

「年号同上」

僧快壽在判

「重寄進、同郡同名内字谷之小熊作、
田貳段、副進本證文二通、文保三年五月十二日」
『在口裏』
「三位房快寿寄進状」

1121
『正文在水引權執印』
權執印妙慶謹言上
爲伊作庄内花熟里地頭代津野弥次郎左衛門尉□（実名）令恪（不知）
惜妙慶下人犬王童無謂事
件犬王童者、花熟里百姓又太郎男□地頭米并領家米、
下司名主公事析以下負物等、令逃脱自船、令付寄田徳□
内小湊之由、妙慶承及之間、即懸置于所、就令申方々、
差遣兩三方之使者、隨負物多少、被分取彼□□、於犬
王・藥師二人童者、被付名主方畢、然間、令服仕來之處、
花熟里地頭代去々年押取彼犬王童於理不盡之條、希代狼
藉也、然者、早任申狀道理、於彼童者、不日可召渡之由、
蒙御成敗□（於カ）地頭代者、爲被行罪科、粗言上如件、
徳治三年八月　日

「徳治三年十一月十一日、引進長谷堂寺地薗云々、伊作家文書アリ、
正文写載スヘシ」

1122
「伊作家譜中」
宗久（伊作二代）
初清久　左京進　大隅守入道　稱道惠

1123
「正文在巻本」
（端裏書）「はせたうのしきちのうちを御ようとうの代ニひきまいらする状」
引進長谷堂寺地薗壹所（但五藤四郎本薗）事
右薗者、雖載進于相博狀、所申請左京進（宗久）殿功御銭參拾貫
文、未進拾肆貫參百文、可弁進之力依無之、十四貫三
百文御用途、限永代所引進也、若彼薗違出（乱脱カ）來令相違者、
爲十四貫三百文以壹倍、忿々可弁進候、若其時難澁仕候
者、不嫌權門勢家神社佛寺領、見合高質被召之候、不可
論申候、仍爲後日證文狀如件、
徳治三年十一月十一日　　寺別當妙法（花押）
沙弥本佛（花押）

1124
「忠宗公御譜中」
造正八幡宮嶋津本庄役事、如鎮西去々年三月三日注進狀
者、正安三・乾元々・嘉元々以上三ヶ年、舊米對捍云々、
甚無其謂、急速可致沙汰之狀、依仰執達如件、

延慶二年二月十日

陸奥守（花押）（宗宣）「宣時」
相模守（花押）（貞時）「師時」

嶋津下野前司（忠宗）入道殿

「右、陸奥守宣時・相模守師時ハ、北条氏ニテ、守邦親王の執権なり」
「右、二月十日ノ正文ハ、旧御番所御文書二番箱中御宝鑑三帖之内ニアリ」

（本文書ハ「博採堂」ノ野紙ニ記セリ）

1125

『上原氏文書』

下　敷仕所

温田村内屋敷壹ヶ所事

右、於屋敷者、停止苧代・桑代・畠地子等惣万雑公事、宛行毎年御年貢貳百文處也、國ケ（衙）社家御公事等者、爲郡内平均之役上者、隨分限、可被致其沙汰、但如此計宛事者、且爲社頭修理、且爲公私御祈禱、宛給之狀如件、

延慶二年八月廿日　郡司藤原（花押）『師高ノ子孫カ』

地頭御代官源（花押）

「建久八年丁巳六月、薩摩国図田帳高城郡二百五十五丁ノ内ニ、国分寺領五十二誤也三ノ町アリ、其内ニ、温田浦十八町、没官御領、地頭千葉介」「下司在庁師高」

1126

『載伴氏六代周防守兼藤譜』

薩摩國給黎三郎資保代元朝与和泉左衛門次郎入道法有相論、當國和泉庄椙村内田畠在家等事、

右、就訴陳狀、擬有其沙汰之處、去月十二日元朝出狀畢、如彼狀者、資保捧寶治二年保久資保法有等祖父譲狀訴申之處、或号正嘉二年九月十七日保俊法名保西資保亡父狀、或出帯正應五年三月十三日保道法有親父譲狀、法有雖及陳狀、以和与之儀、永止訴詔畢云々、此上不及子細、早任彼狀、於件田畠在家者、可令法有領掌也者、依仰下知如件、

延慶二年十月二日　前上總介平朝臣（政顕）（花押）

1127

『載肝付六代兼藤傳』

延慶二年己酉、初父兼石爲本郡弁濟使職時、地頭名越時家代官源盛猾冒國法、奪我職田、故使兼藤周防守訴於探題、既而兼石卒、兼藤襲職、更号尊阿、至是十一月十二日探題金澤上總介實政、奉　命使尊阿領弁濟使職名田、如兼石時、

1128

『古本未吉検見崎氏家蔵』

嶋津庄大隅方肝付郡弁濟使兼石(今者死去)子息兼藤法師(法名尊阿)
与地頭美作前司時家代源盛相論、弁濟使職名田等事、
右、訴陳之趣、子細雖多、所詮、當職名田等事(取詮略之)、地
頭御下知違背之咎、無所遁欤、然則於彼所職名田等者、
爲別納、可令尊阿知行者、依仰下知如件、

延慶二年十一月十二日　　前上總介平朝臣(『金沢実政』(政顯))御判

1129

『入來家臣武光氏文書』

薩摩國武光弥三郎經兼与宮里八郎正有相論、當國宮里
郷正岡名内田地参町・屋敷壹所所當公事等事、
右、就訴陳狀、擬有其沙汰之處、如嘉元三年十一月廿八
日正有狀者、件田屋敷者、亡父正行、弘安八年十月十日
讓与養子經兼時、定置所當公事分限之上、以和与之儀、
向後請米佃者貳町分、臨時課役者壹町分、可弁勤、又薗
公事者、任正行讓狀、不可懈怠之由、出狀之間、所止訴
訟也云々、如經兼同日狀者、子細同前、爰兩方之品秩、
相論之下地、有疑貽之間、被糺明之處、守護人下野前司(忠宗)
入道々義代本性与經兼・正有等、就當郷田地、番訴陳、
依出和与狀、去正安四年八月十八日・嘉元三年七月二日
被裁許畢、此上者、云品秩、云論所、無不審歟、然則相
互任和与狀、可致沙汰矣者、依仰下知如件、

延慶二年十一月廿六日　　前上總介平朝臣(政顯)(花押)

1130

『權執印文書』

□(薩摩)國八幡新田宮雜掌申、同國宮里郷鶴王丸名々主草
道太□正平法師(法名道惠、今者死去)、子息七郎正時抑留當宮免田
壹町貳段神用米由事、
□(右)解去永仁七年五月十日・同六月十三日・正安元年七
月廿日、雖□(召カ)不参之間、仰澁谷彦太郎重尚法師(法名浄重)・河
内小太郎重雄、□四日尋問實否之處、如浄重等執進同五
月廿日・同四年道惠兩通請文者、無對捍儀之處、近年當
名損亡之間、雖□家明申畢、所詮、於道惠知行分五段所
當米者、可致其□(弁)也、而道惠死去之間、今年八月三日以
重雄并澁谷弥平催(二脱カ)促之處、如爲重執進同九月廿五日正時
請文者、鶴王丸名□(道)惠之時、伊集院野田淡路坊兼祐・武
光日向入道法忍・□(道)惠等令知行之間、不能陳申云々、爰如
雜掌注文者、自弘(脱アラン)正應二年拾石陸斗、自永仁五年至正安
三年拾貳石伍斗、□(合カ)貳拾参石壹斗云々者、於知行分者、

可致沙汰之旨、亡父□(承)伏狀之處、正時爲彼遺跡、稱他人領知之由、捧自由請文不□、不遁難澁咎歟、然則任先例、遂結解、可令究濟也者、依□(仰下知如)件、

延慶二年十二月十二日　　前上總介平朝臣(政顯)(花押)

1131 『入來院氏臣岡元氏文書』(端裏書)「寄進狀比伊郷水田壹丁事」

蒙仰候四郎太郎重久□孝養筑州比伊郷内水田壹町事、何僧仁毛、可令進給候□(哉カ)、若又御口入僧不法之時者、□(自カ)可改候、恐惶謹言、

延慶二年十二月廿九日　　平重□

進上　岡本殿

1132 『國分寺文書』

異國降伏御祈事、於薩摩國寺社可致精誠之由、嚴密可相觸別當神主之狀、依仰執達如件、

延慶三年二月廿九日　　陸奥守(宗宣)御判
相模守(師時)同

嶋津下野(忠宗)入道殿

1133 『國分寺文書』

異國降伏御祈事、関東御教書如此、早任被仰下之旨、且精誠御祈禱、且可被進卷數之狀如件、

延慶三年五月四日　　沙弥(道雄カ)在判

國分寺留守殿

1134 「延時氏文書」

薩摩國新田宮雜掌阿源申、抑留當宮御神拜御供米由事、八月廿九日御教書并重訴狀具書如此、早任仰下之旨、賜分明御請文、可令注進候、仍執達如件、

延慶三年九月四日　　沙弥道雄(在国司入道)(花押)

謹上　延時三郎入道殿

1135 「權執印文書」

薩摩國莫祢孫太郎入道成道申質人等事、訴狀具書如此、子細載狀、爲有其沙汰、早可令參對也、仍執達如件、

延慶三年十一月十二日　　前上總介(政顯)判

下野(忠宗)前司入道殿女子跡

1136 「權執印文書」

薩摩國新田宮雜掌「虫ック」

同國延時三郎入道抑留當宮御拜御供米由事、去八月廿九日御教書并重訴狀同九月四日到來、謹拜見仕候、早任被仰下之旨、雖相觸延時三郎入道候、不及請文陳狀候、若此條僞申候者、

日本國六十余州大小神祇冥道御罰於可罷蒙候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

延慶三年十二月五日　　沙弥道雄

1137

『比志嶋文書』

警固番役事、被勤仕候了、仍執達如件、

延慶三　十二月十五日　　本性(花押)

比志嶋孫太郎殿

1138

『調所氏譜教恒傳』

延慶三年庚戌、先是酒大夫入道圓也及其妻、使代官秀吉掠他利祿、求爲調所書生及主神司職等、於是三午丸具陳來由、請襲兩職、在廳官等連署助之、乃十二月二十三日、大外記兼大介中原朝臣承國宣命、三午丸爲書生及主神司職、如恒幸讓狀、

1139

『仝文書』

藤原三午丸申大隅國調所書生職并主神司職等事、酒大夫入道圓也等、爲神敵國敵之上、任三午丸親父恒幸之德治二年十一月卅日讓狀、可安堵之由申之、且在廳等捧連署狀、可宛賜三午丸之由、稱申之上、帶恒幸狀之條分明、仍改圓也妻女之代秀吉等之非分之競望、以三午丸爲書生并主神司職、任先例、可致其沙汰之旨、所(マヽ)國宣之狀如件、

延慶三年十二月廿三日

大外記兼大介中原朝臣(花押)

1140

『仝文書』

三午丸所職事、就在廳□　□補之早、以落(茲カ)御沙汰不被知食□　□在廳沙汰之輩、不沙汰上洛之日□　□徒令在國云々、造意所行之□

1141

『入來院氏臣武光氏文書』

入來院領家文書代用途内堵原御分四十五貫余、別以御志奉免許候畢、若自余村々無沙汰候者、各別之契約を可申候、仍狀如件、

延慶四年三月四日

1142

『臺明寺文書』

法忍（武光師兼）（花押）

大隅國臺明寺雑掌申、異國降伏御祈禱巻數事、解狀副具書、如此、爲関東御祈禱所之条、無異儀之上者、可被執進彼巻數候、仍執達如件、

延慶四年六月二日　　前上總介（政顯）御判

上野前司（時直）殿

『正和元年十月二日、此名ノロ裏ニ中島殿御教書安トアリ』

「御下知案文」

『ロ裏ニ』

1143

『仝』

大隅國云々、同案ニ而略ス、

延慶四年六月二日　　前上總介（政顯）御判

上野前司（時直）殿

『在ロ裏』

「御下知案文」

『ロ裏ニアリ』

「爲後證、於正文者、衆徒所申預候也、

延慶四年六月八日　　雑掌僧本證在判」

『即応長元也』

1144

『國分氏文書』

義絶　土与壽冠者事

右、彼冠者不調条々、令自愛白拍子、令私用國分寺御領麑島尼寺田御年貢、結句相具彼白拍子、令遂（逐）電早、或守護代平内兵衛入道入中、書送起請文間、存其儀處、一々令自破起請文、不恐神明、不恥（令カ）守護代、不輕（令カ）親所存、希代爲不調仁之間、永令義絶畢、其後又所令自愛白拍子令逃間、号尋彼白拍子、重又逐電之条、不調令至極者也、然者、於土与壽冠者者、不可有競望之儀、以此旨、可令申公家武家、仍爲後日、義絶之狀如件、

應長元年潤六月廿四日　　沙弥道本在判

1145

『比志島氏文書』

右衛門尉紀基員

院御方催十八人

饗析腰差酒肴一具事

右、任先例、所請取如件、

應長元年閏六月　日

久吉（花押）　利里（花押）

守里（花押）　久成（花押）

行吉（花押）　重安（花押）

守弘（花押）　重吉（花押）

光貞(花押)　　末吉(花押)

1146

『仝』

(端裏書)
「てんかの御かた」

右衞門尉紀基員

殿下御方藏人所舍人廿人

饗析腰差酒肴座飯五石五段(ママ)

右、任先例、所請取如件、但家弘沙汰也、

應長元年閏六月　日

清國(花押)　有弘(花押)

成重(花押)　友行(花押)

家弘(花押)　友重(花押)

清行(花押)　友氏(花押)

重元(花押)　重弘(花押)

1147

『仝』

右衞門殿、六方めんふミとりしたゝめ候て、府生二郎家弘かさたとして、とりてまいらせ候、このうへわつらひ候ましく候也、わつらひ候ハヽ、家弘あきらめ申候へし、宿所(綴小路息)あやのこうちからす丸よりにし、すミより二めきたのつらニて、府生二郎と、御たつね候へし、仍如件、

應長元年閏六月　日

殿下御方府生二郎家弘(花押)

1148

『叢朋寺文書』

衆集院阿弥陀如來寶座前

奉寄進析田伍段内

一井木一段　須波留二段　白土二段

右、寄進之志趣者、爲令悲母比丘尼常空忌日九月三日之膳析盡未來際無退轉也、抑孝子雖假形於比丘、無行無德、雖歸命於佛陀、無信無解、自沈于苦海、報謝之志似雲、不如早扇三宴之威風、波披五障之雲霧、爰以寄水田於佛前、以准極樂界會之宴池、施一飡於衆僧、以擬九品聖衆之供養、然則、聖靈者頓證菩提、凡類者悉得解脱、仍寄進之狀如件、

應長元季九月三日　　入阿弥陀佛(花押)

1149

「田布施金峯山蔵王權現鐘銘」

奉始鑄　薩州阿多郡金峯山洪鐘一口

右、奉鑄志者、爲正朝外朝天長地久　関白殿下関東武家(ママ)

四海守護國土安穩諸人繁昌、勸化十方檀主所禱、仍如件、

應長元年辛亥十一月　日

大勸進金剛弟子妙法敬白

大工沙弥西願

「按ルニ、応長ハ九十四主花園帝の年号にて、関白殿下は近衛家にて家平公に当れり、武家ハ守邦親王、また守護は道義公の時の事なり」

1150

『比志島氏文書』

就比志嶋孫太郎忠範掠訴、被成下候去三月一日御教書案、同四月廿四日使節御催促狀、謹拜見仕候旱、抑前田并馬越田地屋敷事、於馬越田薗者、令沽却于河田右衛門太郎佐清旱、至于前田者、守護方押領之間、當時所及訴訟候也、其子細當知行仁等可明申候欤、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

正和元年六月十日　　僧榮秀請文 在裏判

1151

『水引執印文書』

（端裏書）「日向殿大間帳」

譲与　先祖相傳所職并所領田畠等事

一　弥三郎經兼分

本万徳惣領職加弁済使所務定

上村　給乃弁濟使職　清水寺院主職并田畠等　在廳職

牛屎院書生職　南郷書生職　入來院塔原内南部村并弥毛原村 但此南部・弥毛原両村、後ニハ可譲給三郎太郎也、

吉枝名惣領職　宮里郷内正岡田地参町并堂薗壹曲　在御下知、

一　三郎次郎師藤分

万徳名内　又五郎居薗壹曲　源藤次郎薗壹曲　源藤太郎薗壹曲　山門尼御前本薗壹曲　藤四郎安元（光）薗壹曲

以上五ヶ所許宛テ加弁濟使所務

水田宇津木並八段　溝越四段 同加弁済使所務　吉枝名内西町壹町　小山本三段十坪　保佐田五段 付下　同四郎入道契約田薗等壹曲　在廳給壹町 元五町内　新五郎薗壹曲　西尾寺院主職并加田薗等定

勲功御領筑前國七限郷内淵田壹町　同長淵畠地壹所

入來院塔原大狩倉請（『謹』）絹拾伍内　絹陸兩

一　伴三兼治分

万徳名内　石走五段　西部貳段　此坪等許ニ宛テ加弁済使所務定　原田早田壹段卅坪

八講田参段　軍原壹曲 加前原定、此分許宛テ加弁済使所務定　吉枝名内　櫃

丸陸段　保佐田五段付上　牧崎當時細工作薗壹曲

入來院塔原内大狩倉請絹拾伍内　絹五兩　在廳給五段元五町内

勲功御領筑前國七限郷内袴田五段　件田者、書落六月十七日譲状之間、重所譲与也、在判（花押）『武光文書ニ判アリ』

一　又三郎兼正分

万徳名内　弥二郎入道薗壹曲　當時居薗此分ニ宛テ加弁済使所務定　又竹中薗壹曲　前小薗壹曲　此者雖為小太郎之薗、被賣本主之時、止余人競望、可令賣領知也、背此儀於子孫等者、可為不孝仁也、

字水田参段坪　深町卅代坪同加弁済使所務

宮里郷内志奈尾田陸段坪　免フクロ三段坪　大野本三段坪

平良ゝ田二段卅坪止一向地頭所務、正富内元小田五段内二反ハ地頭被田除之、三段内者段ハ停止地頭所務、證文在之、

鶴王丸名内一房薗壹所同停止地頭所務、證文在之、

五大院若吉内柳田八段　小樋口二段本方三段

新田宮領荒野壹曲限東正岡作畠　限西大俣田溝　限北毛刈田　限南万徳堺

吉枝名内　松本四段　橋口八段　長薗壹曲

勲功御領筑前國橋爪四段大六十歩　在廳給五段元五町内

入來院塔原内大狩倉請絹拾伍内絹四領

一　女子乙鶴御前分

万徳名内　榎木町薗壹曲加弁済使所務定

五大院若吉名惣領職　但柳田八段、小樋口二段本方三段　又三郎譲与之、

此外ハ可令知行之、坪付ハ見本證文、

一　三郎太郎兼長所

万徳名内　當時居薗加弁済使所務

水田武津町壹町但法忍命之後ハ可令知行之、

牧崎舟太郎薗堺河縁薗壹曲

入來院塔原内南部村・弥毛原村、　此両村者、経兼命之後ハ可知行之、

一　後家分

万徳名内　當時居薗壹所　中津牟礼坪

吉枝名内　打開四段　本銭返田薗并沽却田畠等、但除吉枝質券地等定、

家内資財物并所從下人等但所譲与正安三年三月廿三日於田薗等者、一期之後者、可被付于惣領也、

一　鶴石分

万徳名内　中津牟礼坪加弁済使所務定

一　土用御前　阿久利御前所

平四郎薗壹曲但一期之後ハ可被返付惣領也、

右、件所職田畠等者、『薗等者』守面々譲状等、可令知行之状如件、

応長二年六月十七日　　法忍(伴師兼)在判『(花押)』

『此文書、入來家臣武光氏蔵ト小異、朱ヲ以如是也』

1152

『入來家臣武光氏文書』

(端裏書)「さへもんのせうふん」

譲与　弥三郎經兼所

可早任譲状旨令領知田薗等事

一本万徳惣領職加弁済使所務定

一上村　給乃弁済使職

一清水寺院主職并田薗等

一在廳職　牛屎院書生職　南郷書生職

一入來院塔原内　南部村・弥毛原村但、此南部・弥毛原両村ハ、後ニハ、可譲給三郎太郎也、

一吉枝名惣領職

一宮里郷内正岡田地参町并堂薗壹曲在御下知、

一勲功御領、筑前國七隈郷惣領職

右、件於所職以下田薗等者、限永代所譲与也、但、所譲与自余子孫(々々)之等中、田薗等并給田、至于諸公事、隨分限可令配分也、此外雖爲一事、不可成違乱、仍譲状如件、

応長貳年六月十七日　　法忍(花押)

1153

「長谷場氏文書」

「下公文所可勘申」

南郷末弘名

注進　應長元年地頭御得分米結解事

合　「勘合了」

見作田壹町貳杖仲

除田参段壹丈仲

新用作壹丈　免田三反□

應輸田柒段壹丈

地頭用□　分米一斗二舛

定田柒段仲　才二反廿

得田五段卅□　分米五斗七舛

請加郷地頭用□　分米七舛二合五夕

并米柒斗陸舛二合五夕

募申神柱宮二季彼岸中大般若、將軍家供粉米、

御倉納参斗陸舛参合、四斗在同返抄、

右、結解注進如例、「藤太郎弁、十一月廿二日」

正和元年八月　日　　名主上

1154

『臺明寺文書』

將軍家御祈禱所大隅國臺明寺雜掌駿建謹言上

同國税所介篤胤代忠秀乍請取陳狀、爲訴人無音上者、

欲被弃置濫訴沽田物由事、

副進

一通押書狀 先進早、

右、忠秀爲訴人乍爲當參、請取陳狀之後、迄于十余ヶ日

無音之上者、任定法、爲被弃捐彼逆訴、言上如件、

正和元年九月　日

「臺明寺雜掌申狀、正和元九七

（花押）

（花押）」

1155

『肝付六代兼藤傳』

正和元年壬子、先是名越尾張幸夜刃丸（疑是尾張守高家小字也、）襲本郡地頭職、乃使實性來爲地頭代、實性又動侵我所領職田、尊阿以聞探題、然實性亦聞、以無實探題實政不能裁断、告之鎌倉、九月十日、幕府守邦使北條相模守師時（按大系図、師時死于前年応長元年、而高時任相模守為後六年文保元年事、然則此云相模守不知果為誰、疑大系図師時死年有誤、）命實政、猶遣使按察情實、以歸尊阿侵地、以舊領故也、

1156

『末吉士検見崎氏家蔵』

大隅國肝付郡弁濟使尊阿申所職并名田畠等事、就度々下知狀、被打渡處、地頭尾張幸夜叉丸重押領之由、尊阿訴之、而不實之旨、地頭代實性等所陳申也、所詮、於下地者、不日差遣使者、可沙汰付于尊阿、至押領段者、爲實事者、爲處罪科、糺明眞僞可注進、且向後、猶有其煩者、嚴蜜尋究、可被下知狀、依仰執達如件、

正和元年九月十日　　相模守（師時）（兼時）御判

（金沢実政）

上總前司殿

1157

『比志島氏文書』

薩摩國滿家院内上原三郎基員与同院中俣弥四郎入道々

證相論師若女事

右、訴陳具書雖多子細、所詮、基員則彼女爲相傳所從之

處、現在道證許之間、可出度（渡）之由相觸之時、可返与之旨

乍出返狀、于今不糺返之條、無謂之由申之、道證又返狀

事不審也、披見正文之時、可申子細之由陳之、爰如基員所進二月十日時元延慶道證于時成能、狀者、抑今度□爲相尋□下人弥次郎男許候之由、承及候、善悪可進候云々、於彼狀者不審之由、道證雖申之、披見正文之時、道證承伏畢、但件女返遣基員許之後、多年召仕之□可被尋近隣輩之由、道證令申之間、當院名主比志嶋孫太郎・西俣又三郎等當參之間、可被尋問之旨、基員令申之處、爲敵方之由道證遁申之上、不立申自余證人欤、此上者、任返狀承伏□可令糺返彼女於基員方也、次悪口由事、基員者對道證爲非分身之由申之、道證者、以基員爲税所介郎從□稱之、而如基員所進當院正地頭大隅禪門御下知并税所介篤秀・篤胤等狀者、能基基員曾祖父、爲義祐代官知行當院郡司職之時、依地頭代非法事、令訴申之刻、宛能基身、預正地頭下知狀畢、隨義祐・篤秀・篤胤三代之間、自能基至基員代々雖有數通狀、郎從之禮儀無之、□月二日付正和元、篤胤狀者、上原三郎入道賴念爲養子讓得上原屋敷一所、當知行事、兼存知候旱、且被帯比志嶋孫太郎忠範狀之上者、不可有後日煩候也云云、稱賴念者當院一分名主也、基員自幼少被取養、彼賴念讓得屋敷之條證文顯然之上、一族輩中篤茂以來代々給関東御下文畢、爲彼子孫等于今院内現在之處、道證以基員爲税所介郎從之由、載訴狀之条、雖似過言、基員先祖爲無足不知行各別之上、爲税所介代官之條、無異論之間、悪口之篇、相互雖申子細、非沙汰限之狀如件、

正和元年九月十日

【守護代】沙弥本性（花押）

1158

『臺明寺文書』

大隅國臺明寺雜掌數建申下部次郎判官代牛太郎以下輩、得六郎兵衛尉惟村語、乱入當寺領止上村、致追捕狼藉由事、解狀副具書、如此、事實者、太不隠便、早可令停止彼輩乱入狼藉、若又有子細者、可被注進交名人等之狀如件、

正和元年十月二日　　前上總介（時邑野）御判

守護代

「在口裏」

「中嶋殿御教書案、可停止止上村守護使乱入之事」

1159

「長谷場氏文書」

依有要用奉沽渡本庄南郷内末弘名水田等事

合壹町參段者

右、水田者、宗兼重代相傳之地也、雖然依有要用、對于同

郷門貫次郎左衞門尉殿、代銭廿貫文仁、限永代、所奉沽渡也、若向後他人彼水田仁致違乱事候者、於彼沙汰者、宗兼可明申候、但本證文者、願阿存生之時、爲煙上、皆以焼失候畢、今者彼文書宗兼之許ニ一紙モ無之候、此上者若散在之文書候天、致沙汰人候者、兩御方仁訴申、可被處盗人之罪科候、若此条偽申候者、當御庄鎭守五社七堂御罰ヲ宗兼可蒙罷候、仍爲後日放券之状如件、

正和貳年五月七日　　散位伴宗兼(花押)

1160 『比志島氏文書』

薩摩國比志嶋孫太郎忠範申城前田事、重申狀如此、先度催促之處、無音云々、太無謂、來月廿日以前可被申左右、違期者、殊可有其沙汰也、仍執達如件、

正和二年七月十七日　　前上總介(敦顯)御判

『忠宗公』下野前司入道殿

1161 正和二年十月廿七日、大介兼税所藤原敦胤、以相傳知行曽野郡用松名内萩峯伍段号大卒都婆寄進山王寶前、爲長燈料足田、

1162 『臺朗寺文書』

(本文書ハ一一六三号文書ノ案文ニツキ省略ス)

1163 『臺朗寺文書』

奉寄進『前ト同案ト見ヘタリ』号大卒都婆事

山王御寶前長燈析足田大隅國曽野郡用松名内萩峯伍段

右、田地者、雖爲用松名内爲和与之地、敦胤令相傳之、年來知行無相違地也、然者、挑燈明於寶前、弥増神明之威光、致懇祈於社檀、倍憑現當之悉地、仍抽無二之丹誠、爲仰七社之擁護、停止万雑公事臨時課役、所奉寄進也、至于子々孫々、不可有相違之儀、仍爲後代寄進之状如件、

正和二年十月廿七日　　大介兼税所藤原敦胤(花押)

1164 『比志島氏文書』

薩摩國比志嶋孫太郎忠範申城前田事、重申狀如此、下野前司(忠宗)入道不應度々催促之間、可尋注進實否之由、被仰了、所詮、來月廿日以前、可被申左右、違期者、殊可有其

沙汰也、仍執達如件、

正和二年十一月廿日　　前上總介(政顕)御判

下總權守(渋谷重経)殿

1165

『比志島氏文書』

和与

さつまのくにみついへのゐんひしゝまのまこ太郎たゝのりと河田うへもん太郎□はかさいちよミなもとのうちの女とさうろん□河田ミやうのうちかきもと田いちやうならひにそのいしょの事

右、たそのゝ事によて、さうろんをいたし、そちんにつかうといへとも、和よのきをもてさたをやめ、かのたそのハ、こう安八年四月廿九日たうくわんのゆつり状にまかせて、きやうこうたゝのりいらんけいはくあるへからさるよし、和よせしめ、かつハ御くうしにいたてハ、河田ミやうのうちてんえんたるうへハ、かのミやうにあいくわゝて、きんしすへきよし、をなしくちゝやうせしめ、和よ状をいたさるゝうへハ、しこんいこ、たかいニいろんあるへからさるものなり、よて爲後和よ状如件、

正和二年十一月廿一日　　みなもとの氏女代義行

1166

『比志島氏文書』

かわたのミやう并むまこ(馬越)へ田ゐん及かきもとの田やしき以下、當ゐんそうちとうさた、さいつようとうしやうふたにのしゝ内てんちらの事、さうろんをいたし、そちんにつかうといへとも、和よのきをもて、さたをやめ候、わよ状をしかへ候了、これによて、せに貳拾五貫文、明年正月中に給候へきよしの御状を給候ぬ、そのほかせいあのあま御せんのすこの米いちはいふん拾四石四斗弁られす候によて、うたへ申され候へとも、かの和よのうちにこんして、さたをやめられ候ぬ、たゝしもしこのてう〳〵わよちゝやうの中に、御けちをなされ候ハさらんいせんニ、一事たりといふとも、わよちゝやうのへんをやふて、忠範いき申候ハゝ、かのけいやくのようとうハ、御わきまへあるへからす候、又御さた候とも、いちはいをもて、かへしまいらせ候へく候、又すこの米ももとふミにまかせて、一はいのふん弁候へく候、かくのことく、ちゝやうしなから、和よのへんをへんかいのきをそんし、やくきの内ニようとう御さた候ハんを、うけとら

す候て、いきを申候ハヽ、御けちにしさいを申ましく候、又やくそくの日けんすき候ハヽ、御けちなりて候とも、やふるいわれをもて、ほんそのあんニまかせ、さたあるへく候あいた、かの御下ちハめしかへすへく候也、よて爲後日之狀如件、

正和二年十一月廿八日　　源忠範(花押)

1167

『臺明寺文書』

奉寄進　　臺明寺本堂

在上小河田下五段但能楽經田也、

右、件田地者、自先師永覺阿闍梨所被讓与也、而増運今沈病床、余命無憑之間、爲先師永覺阿闍梨忌日追善之僧膳粉米、以彼田地、所奉寄進貴山也、自今以後者、爲衆徒御計、無他妨可有御知行、仍寄進之狀如件、

正和二年十二月廿一日　　僧増運在判

『口裏ニ』「於閑阿闍梨永覺忌日田寄進狀等」

1168

『比志島氏文書』

わよす

ひしゝまのまこ太郎忠範とにしまたの又三郎久盛とさうろんさつまのくにミつへのゐんにしまた名のこうし大小公事、けいこ石ついち、そうちとうさたさいつようとうの事、

右、条〻さうろんニをよふといへ[(ともわよのきをカ)]もて、そせうをやめ給候、わよ狀をいたし給候うへハ、きやうこうたかいニいろんあるへからす候、よて爲後代和与狀如件、

正和貳年十二月廿[　]　　源久盛(花押)

1169

(端裏書)「延時三郎入道」

薩摩國御家人延時三郎種忠法師[成仏ナラン]代忠種謹弁申同國若松彦太郎忠兼訴申[(名)]田并瓦田村事

副進

一通見佛讓狀文永元年十月十日

右、如訴狀者、彼名田畠等者、見佛讓与妻女平氏之間、讓与養子千与壽之處、成佛以義絶身致押領云云、此條先義絶證據何事哉、於亡父見佛所領者、以文永元年十月十日讓与成佛(于時種忠)之条、證文炳焉也、閣子息成佛、爭可讓与氏女之哉、号讓令備進之狀、尤非無不審之上、文永以

後成佛當知行經四十余年、無相違之上者、非御沙汰限、
隨而、云氏女、云千与壽、令死去、送年序之後、忠兼始而
及謀訴之條、釁謀次第也、所詮、云相傳證文、云當知行
年記、旁分明之上者、早被弃捐忠兼濫訴、爲蒙御成敗、
仍披陳言上如件、

正和三年五月　日

藤原家泰（花押）

こ日のために、しひつをくわへ候也、

いへたゝ（花押）

いへやす（花押）

1170

『本田靜觀傳』

正和三年甲寅三月十日、自藤原家泰方買取竹原町二段證
狀、左ニ記來由、則見證狀内、

1171

『入來本田氏文書也』

奉賣渡薩摩國山門院内竹原町貳段事

雖四至有、先日之竹原町わり残不可残之間、堺さすに
不及、

右、件田地者、『山門郡司秀忠ノ曾孫也』家泰重代相傳私領也、而間依有要用、代用
途拾貫文仁、限永代、本田入道殿所奉賣渡也、仍國司領家
地頭兩三方御米以下万雜公事、臨時課役、一向停止之、
於此四至内者、一塵モ無妨、可被知行狀如件、

正和三年三月十日　藤原家忠（花押）

1172

「伊集院氏系図」

俊忠
侍従房
久兼
弥五郎　圖書助　初號伊集院　法名道貫

1173

「正文在伊集院廣済寺」

伊集院寺脇内円福寺阿弥陀堂免薗壹所并小山下田三反
事、件薗苧桑代地利物、爲検断加徵米等、阿弥陀堂仁所
奉免除也、但於大犯者除之、仍狀如件、

正和三年三月十五日　沙弥（花押）

1174

「伊作氏久長譜中」

「正文在手鏡」

薩摩國伊作庄日置北郷地頭下野彦三郎左衛門尉忠長(久長)代
定恵与同郷下司日置弥太郎忠純相論又太郎男同妻子一
類事

右、男等、依引流其身、令服仕之處、自應長元年、迄籠忠純領日置庄畢、雖可訴申守護所、依爲縁者、無其儀之旨申之間、尋下之處、如忠純代資家陳狀者、又太郎男同妻子等事、可召渡之由、雖申之、不請取云々、爰如定恵所進延慶三年三月十日又太郎狀者、申請米六斗事、來秋以六利可弁、過十一月者、以此狀爲引文、可被召仕云々、如同人所進同年六月五日又太郎并又五郎狀者、稲三十四束内各十七束所申請也、以六利來秋可弁賃物者、又五郎身又太郎妻同子夜叉女等所入也、過十一月者、引流云々、然而彼負物勘合質人之處、人別爲貳石内欠、如被定置者、難取流其身之間、爲忠純沙汰、以一倍可糺返焉者、依仰下知如件、

正和三年七月十六日　　前上總介平朝臣(政顕)(花押)

1175

『高岡士河上次郎左衛門蔵』

御下向道のほと何事候つらん、かくりき(脚力)の罷上て候も、あひまいらせ候はぬよし申候へハ、おほつかなく思やりまいらせてこそ候へ、さてハこのさたのあひたの事、とかくさしあひ候て、于今令延引候之条、存外事に候、いかさまにも候へ、出家(慶尊カ)沙汰事きれ候て後、いさくた(伊作田)河上のちとうの事ハ、申さたすへきにて候也、いかやうなるひほうをし候とも、ゆめ〳〵あしさまの返事すへからさるよし、さたの物ともに、よく〳〵おほせふくめらるへく候也、この出家のさたも、さのミハのひ候はし(八月五日の執達ヲ云カ)、いまはほとなくことき候ハんすらんと覺候へハ、とく〳〵申さたすへく候也、又御下之後ハ、ふしんなく候、ひんきの時ハ、連々に世間不定可仰給候、毎事期後信候、恐々謹言、

(正和三年カ)七月廿五日　　導證(賓家)(花押)

橋口殿(家忠)

1176

『高岡士河上氏家蔵』

薩摩國市來孫太郎家貞(時家)代慶尊申、市來院領家年貢等事、訴狀副具書、如此、子細見狀、爲糺明可參對也、仍執達如件、

正和三年八月五日　　前上總介(政顕)(花押)

橋口次郎入道(家忠)殿

(鎮西探題北条上総介実政)

『入來家臣武光氏文書』

注進　薩摩國高城郡内吉枝名同車内并在廳職證文等、
任公方御下知之旨、當名能惣領仁、奉勘渡目錄事、
合
一通　師高譲狀案文　建保六年二月日、不知正文在所、共可尋之、
一通　高重譲狀案文　建長七年歲次乙卯七月廿四日、不知正文在所、共可尋之、
一通　師高譲案文（狀脱カ）　貞應元年八月日
一通　同譲狀案文　寛喜四年七月十三日
一通　高長譲狀案文　承久三年十一月廿一日
一通　関東御教書案文　正嘉元年五月二日
一通　領家御下文案文　文永九年十一月四日
以上此五通狀者、京都居住仁、民部法橋許預置候、請取与書狀并彼證文等案文、封裏進之、正文者、取寄追可進之、
一通　師重法名道行譲狀正文　正安三年九月卅日
一通　同譲狀正文　正安五年正月日
一通　領家御下文正文　弘安五年正月日
一通　同御下文正文　弘安五年正月八日
一通　同御下文正文　弘安九年八月廿一日
一通　同御下文正文　正應參年六月日
一通　同御下文正文　正應四年六月日
一通　同御下文正文　永仁二年正月十五日
一通　同御下文正文　正安四年八月廿六日
一通　地頭方施行正文　弘安九年閏十二月日
一通　同施行正文　正應四年九月五日
一通　領家御舉狀正文　弘安九年十一月十日
一通　領家御舉狀案文　建治元年十二月二日
一通　六波羅御教書正文　弘安九年十一月五日
一通　六波羅殿御教書案文　建治元年十二月十七日
一通　守護所請文案文　建治參年四月九日封裏進之、
一通　六波羅御教書案文　建治元年五月十一日同封裏進之、
一通　武藏殿御教書正文　六月十四日両御判在之、
一通　一見狀正文　正應六年七月六日　越後殿御判在之、
一通　守護方警固書下　正應六年七月十日
一巻　車内證文并地頭与領家相論訴陳狀具書等案文、皆封裏進之、
一　在廳職證文等内
一通　廳宣案文　安貞二年三月卅日
一通　廳宣案文　永仁二年九月日国領藺事
一通　廳宣案文　永仁三年正月日国領藺事

此在廳職證文同具書等者、不知正文在所候、正文在所聞出候時者、可沙汰進候、自御方同可被沙汰召候、
右、證文等帯持之分、不残一紙、任公方御下知之旨、吉枝名惣領仁奉勘渡早、此上者、雖爲散文書一通、取落而、以其不可致訴訟候、若有残證文者、隨見出而可進之、不思儀仁天毛彼名并在廳職證文等、他人帯持之由、承及者、不可奉隠之候、又沙汰取可進之、自惣領毛任御下知之旨、可被沙汰候、將又此内案文計進候證文能正文者、自是毛可尋出候、自惣領毛可有御尋候、仍證文目錄如件、

正和参年十月三日　　藤原弥法師丸(花押)

伴氏女(花押)

藤原親郷(花押)

證人

高城郡惣地頭代伴弘雄(花押)

薩摩國守護代沙弥阿忍(花押)

1178

「伊作家文書在文庫」「伊作久長譜中正文在巻本トアリ」

(端裏書)「くうせんのうけとり」

嶋津下野彦三郎(久長)左衛門殿名國司功銭支

合捌拾貫文者

右、用途者、本光房上洛之間、唯寂房爲代官、且所請取之狀如件、

正和三年十月十一日　　久米寺雑掌代僧唯寂(花押)

1179

『比志島氏文書』

比志嶋孫太郎忠(範字有憚)、申薩摩國城前田事、重申狀如此、可續訴陳狀云々、早帯具書正文、可被(遂脱カ)其節、仍執達如件、

正和三年十月十九日　　音輔在判

尚信同

下野前司(忠宗)入道殿代

1180

『比志島氏文書』

比志嶋孫太郎忠(範字有憚)、申薩摩國城前田事、重申狀如此、爲被續訴陳、可参對之由被仰之處、難澁云々、來十五日以前、可被申散狀、仍執達如件、

正和三年十一月三日　　音輔在判

頼尚(ママ)同

下野前司(忠宗)入道殿代

1181

『仝』

比志嶋孫太郎忠―範字有憚、申薩摩國城前田事、重申狀如此、
催促難澁之間、所遣奉行人使者也、仍執達如件、

正和三年十一月廿日　　音輔在判

尚信同

下野前司(忠宗)入道殿代

1182

「伊作家久長譜中」

「正文在手鏡」

薩摩國伊作庄地頭下野彦三郎左衞門尉忠長(久長)代行長申小
船壹艘事

右、如訴狀者、當庄住人弥平五以下輩、對同國市來院住人
志布志入道、令借用小船一艘之處、件船於海路破損畢、
而彼入道後家尼、帶在所領主市來孫太郎家貞代七郎入道
如道擧狀、以聟淨證爲代官、觸訴當庄領家代勝道之間、
爲船代、引渡得善法師一類三人於如道之後、經十六箇年
之處、彼尼又企訴訟及違乱云々、仍爲糺明、可召進件尼・
同淨證等由、度々被仰家貞之處、無音之間、以頴娃次郎
左衞門尉久純・鮫嶋彦次郎家藤等、重加催促之處、如久
純等執進今年七月二日・同十六日家貞請文者、下野彦三
郎左衞門尉忠長代行長申借船事、可相觸志布志尼之處、
自去五月之比、爲物詣上洛之間、不及召進、下向仕候者、
忿可召進云々者、家貞背度々催促、寄事於物詣、于今不
召進彼尼之條、不遁難澁之咎歟、然則於彼船者、永可令
停止件尼競望者、依仰下知如件、

正和三年十一月廿七日　　前上總介平朝臣(政顯)(花押)

1183

「伊作家文書在文庫中」「伊作久長譜中正文在巻本トアリ」

請取　任官用途事

合玖拾捌貫文者

右、件用途者、嶋津下野三郎左衞門尉殿名國司用途也、
且於鎌倉所請取之狀如件、

正和三年十二月廿三日　　久米寺雜掌代唯寂(花押)

1184

『比志島文書』

薩摩國御家人比志嶋孫太郎忠範申同國邊牟木房禪慶出
擧米對捍事

右、如忠範申者、彼米去延慶四年禪慶令借用之處、不弁□

間、属當國守護人下野前司入道〻義、雖可觸訴、依爲當敵□(所止訴カ)訟也云〻、如所進延慶四年四月廿一日禪慶借書者、米二石八舛□(借カ)請也、秋時加六利可弁之、但質券仁波下人菊重法師同娘□王以上三人所書入也、若十二月過者、彼下人共永代可引流云〻、爰禪慶背度〻召文、不参決之間、以石堂又次郎入道并□四郎親治、尋問難澁實否之處、如親治執進正和二年七月二日□請文者、忠範濫訴事、使節催促之外不付召文、本解狀□違背之由掠申之條、招奸曲之咎欤、而禪慶不弁出擧□旨雖申之、胸臆浮言之間、難存知之上者、非沙汰之限、所詮、□本解狀、可進上巨細陳狀云〻者、禪慶就使節催促、雖捧□(散狀カ)于今不及参對之條、難遁難澁之咎欤、然則任忠範出帯□文、以一倍可令糺返矣者、依仰下知如件、

正和四年五月十二日　　前上總介平朝臣(政顯)(花押)

1185

「山田家文書」

【写】

谷山五郎入道覺心与大隅式部孫五郎入道道慶相論薩摩國山田上別符所務以下事、覺心則背度〻御下知、身代錢賃以下色〻損物桑竿失等、所糺返之由訴之、道慶亦百姓等検断過粁物事、任被仰下之旨、欲返与百姓等之處、覺心依致勢、令不請取云〻者、任先下知、澁谷白男河小太郎入道相共、可被沙汰渡兩方也、仍執達如件、

正和四年七月十六日　　掃部助(政顯)在判

加世田別符地頭代

1186

「伊作家文書」

嶋津下野彦三郎左衞門殿名國司功錢事

合貳貫文者

右用途者、本光房上洛之間、唯寂房爲代官、且所請取之狀如件、

正和四年九月十日　　久米寺代官僧唯寂(花押)

「此文書、伊作家久長譜中正文在巻本トアリ」

1187

「延時氏文書」

(端裏貼紙)

財部延時九郎兵衞

さつまのくにさつまこをりのふときのミやうのすいてんはくちらの事

右ふんゑい九年けんふつのこけゆつり狀をさゝけて、そせうをいたすといゑとも、のふとき三郎入道成佛(いまハ)しきよ、

ふんゑいくわねん、同八年二通ゆつり状をたいして、四十よねんをへおはん、このうゑハ、ねんきといゝ、そせうといゝ、いこせしむるあいた、きやうこうのわつらいを、たゝぬかために、ふんゑい九年のこけゆつり状を、成佛しそん延時又三郎忠種つけわたしをはぬ、しこんいこ、延時のミやうのもんしよありとかうして、しそんの中ニもそせうをいたさハ、ほうしよたるへく候、かつハこうせうのために、一もんせうはんをくわへらるゝところなり、よて状如件、

正和四年九月廿日　　平忠兼（花押）

沙弥貞知（憲カ）（花押）

平爲忠（花押）

沙弥道一（花押）

1188

『豪明寺文書』

寄進臺明寺廿枝田五段事

一通　伊作敷殿活券状　徳治三年二月廿日

右、志趣者、爲守部貞清往生極樂出離生死矣、所奉寄進如件、

正和四年十一月二日　　貞清在判

『口真三』

「□願田田口廿枝

寄進状（案）□」

1189

『入來家臣武光氏文書』

避進　薩摩國高城郡吉枝名内兼治分水田坪〻事

合　保佐田内上五段十中坪　横丸内四段貳拾坪矣

右、件田地等、都合玖段參拾中内七段參拾中者、當名惣領御方仁、永避進候旡、横丸田内貳段北依、停止國衙所當米・領家御年貢銭・地頭米・免田所當米・万雑公事・臨時課役等、兼治可令知行一圓不輸候、彼貳段分諸公事等者、惣領御方仁拘持給候旡、將又、自法忍之手讓給候在廳給五段、同避進候、若本万得名内兼治知行分田地、有國検之時、爲其募爲要者、可返給候、此上者、至于子〻孫〻、不可有違乱變改之儀候、仍爲後避状如件、

正和五年三月十三日　　伴兼治（武光）（花押）

證人

沙弥崇也（花押）

1190

『岸良氏文書』

在判

宛行　嶋津御庄大隅方肝付郡内

可早以伴兼村子息左衞門次郎伴兼義岸良弁濟使職田畠

山野狩倉等令相傳知行事

右、件村者、阿佛相傳知行所職也、而如阿佛讓狀、兼村帶次第調度證文、申披子細之間、宛給之早、而任重代之旨、依子息兼義仁讓得之間、所宛行也、有限於御年貢者、無懈怠令勤仕之、爲兼基遺跡、可令領掌之狀、所仰如件、

正和五年六月二日　　尼眞理在判

1191

『岸良氏文書』

納　肝付郡岸良村御季頭用途事

合五百文者

右、且所納如件、

正和五年五月晦日　　尼眞理（花押）

1192

「伊作家文書在文庫」「伊作家久長譜中正文在巻本トアリ」

「口裏ニ」「御功錢請取　五十貫文　正和五十三久米寺僧」

請取　功錢事

合伍十貫文者

右功錢者、嶋津下野彦三（久長）郎左衞門尉殿名國司用途也、仍所請取之狀如件、

正和五年十月三日　　久米寺唯寂（花押）

1193

『志布志寶滿寺文書書写』

奉打渡

日向方嶋津御庄志布志津大澤水寶滿寺敷地四至境事

限東深小路大道

限南經峰

限西河

限北天神山後堀　〃

右、任被仰下之旨、奉打渡于寶滿寺之狀如件、

正和五年十一月三日　　沙弥蓮正在判